佐久市埋蔵文化財調査報告書　第119集

NO ZA WA KA N SE KI

野沢館跡Ⅳ

（長野県史跡伴野城跡）

－長野県佐久市大字原野沢館跡Ⅳ発掘調査報告書－

２００４．３

佐　　久　　市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第119集

NO ZA WA KA N SE KI

野沢館跡Ⅳ

（長野県史跡伴野城跡）

－長野県佐久市大字原野沢館跡Ⅳ発掘調査報告書－

２００４．３

佐　　久　　市
佐久市教育委員会

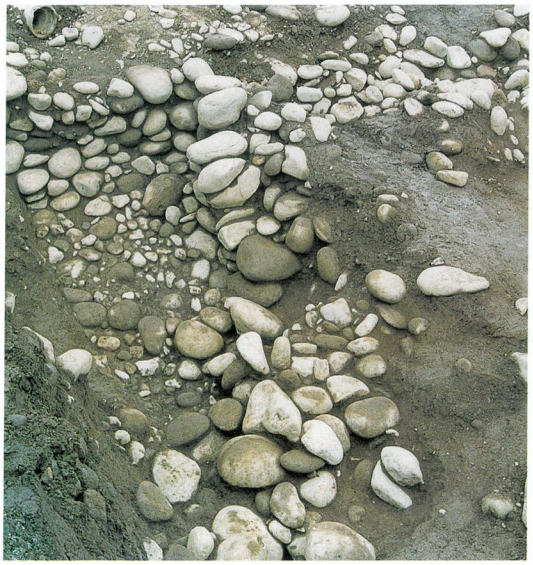
野沢館跡Ⅳ付近航空写真

野沢館跡Ⅳ付近航空写真（東より）

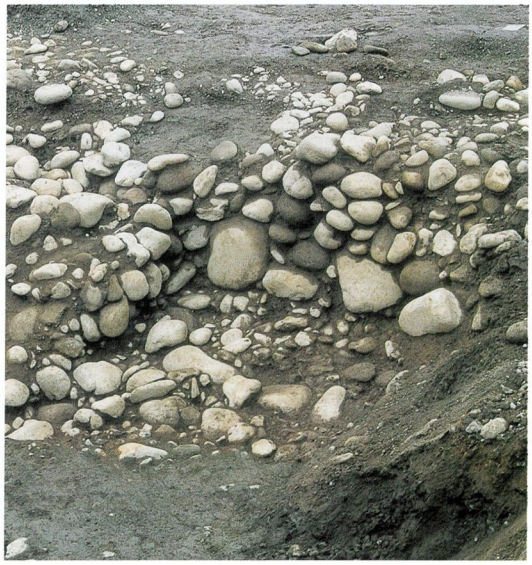
野沢館跡Ⅳ付近航空写真（北より）

調査区航空写真

虎口部分石積検出状況

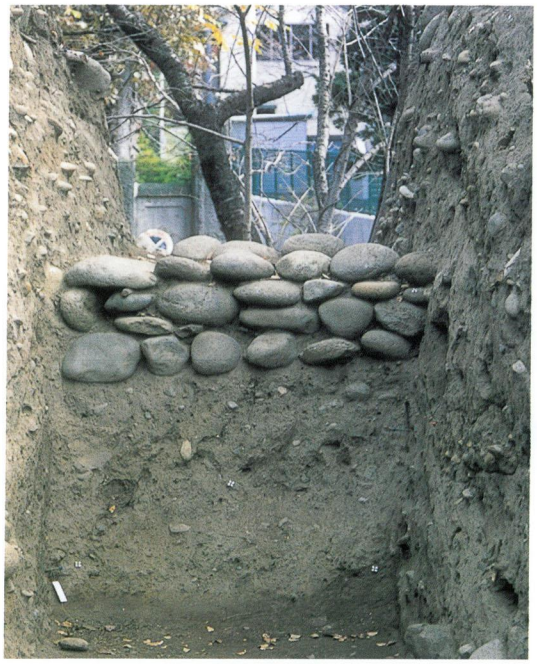


土橋西側石積検出状況



土橋東側石積検出状況

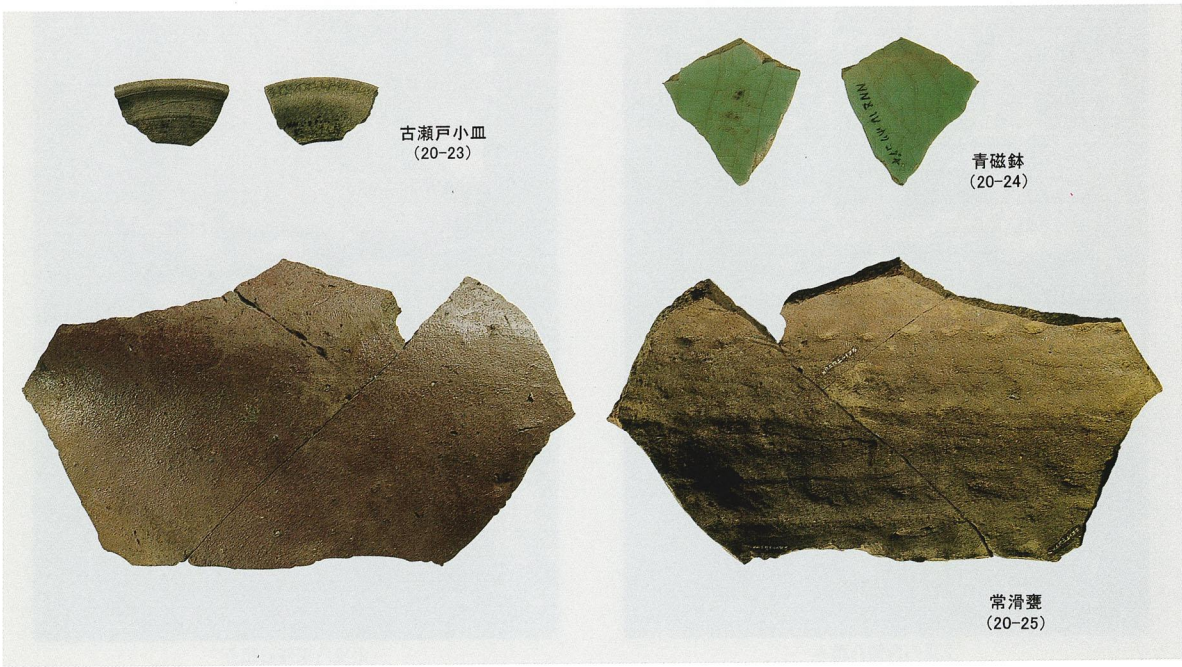
土墨土層断面



土墨内西側石積み

土墨内東側石積み

トレンチＢ礫検出状況



例　　言

1　本書は、佐久市が行う「まちづくり総合支援事業城山公園整備」に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　調査原因者　佐久市
3　調査主体者　佐久市教育委員会
4　遺　跡　名　野沢館跡Ⅳ（NNZ Ⅳ）
5　所　在　地　佐久市大字原字居屋敷110-5
6　調 査 期 間　発掘調査　平成14年９月17日～10月10日
　　平成14年10月21日～12月２日
　　平成14年12月17日～12月26日
　　整理調査　平成15年４月１日～平成16年３月31日
7　調 査 面 積　1,900㎡
8　空中写真撮影、石積平面図・側面図の作成は株式会社こうそくに、国家座標に基づく測量基準杭の設定は有限会社浅間エンジニアリングに、堀覆土の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ委託した。
9　発掘調査中、長野県埋蔵文化財センター河西克造氏には数々のご指導をいただき、報告書作成に際しては玉稿を賜り付編に掲載させていただいた。
10　石積みの構造については、奈良県立橿原考古学研究所北垣聰一郎氏、土師器皿・陶磁器類については長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏のご教示をいただいた。
11　本書の執筆・編集は三石が行った。
12　出土遺物及び調査に関する記録類は、一括して佐久市教育委員会文化財課の責任下に保管されている。

凡　　例

1　挿図の縮尺は遺構－1/80、遺物－1/4を基本としたが、異なる場合は図中に明記した。
2　土層及び遺物胎土の色調は、1999年版『新版　標準土色帖』に基づいて示した。
3　写真図版中の遺物番号は挿図における遺物番号と同一であり、縮尺は図版中に明記した。
4　遺物観察表中における（　）は推定値、〈　〉は残存値であり、―は計測不能を表している。
　単位はcm・gである。
5　本報告書の挿図中のスクリーントーンは以下のことを表す。

地　　山　　崩　落　礫

灰　　釉　　陶磁器断面

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例

第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　調査組織……2
　第３節　委員会の設置……2
　第４節　調査日誌……3

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……4
　第１節　自然環境……4
　第２節　周辺遺跡……6
　第３節　野沢館跡の概観……8

第Ⅲ章　発掘調査……10
　第１節　調査の方法……10
　第２節　虎口の確認調査……13
　第３節　東及び南側堀の確認調査……16
　第４節　東側土塁の一部切断調査……21
　第５節　郭内の確認調査……26
　第６節　遺　物……27

第Ⅳ章　調査のまとめ……30

付　　編　戦国期の野沢館跡－構造と変遷－……33
　　野沢館跡Ⅳにおける自然科学分析について……44

図　　版

挿　図　目　次

第１図　野沢館跡Ⅳ位置図……1
第２図　野沢館跡とその周辺の地形地質図……5
第３図　周辺遺跡分布図（１）……6
第４図　周辺遺跡分布図（２）……7
第５図　伴野城跡絵図……9
第６図　野沢館跡図……9
第７図　調査区現況測量図……11
第８図　調査区設定図……12
第９図　虎口部分石積み実測図……14
第10図　トレンチＡ石列実測図……15
第11図　トレンチＢ実測図……17
第12図　堀プラン確認図……19
第13図　トレンチＡ・Ｃ実測図……20
第14図　土塁及び郭内トレンチ設定図……21
第15図　土塁土層断面図（１）……22
第16図　土塁土層断面図（２）……23
第17図　主郭の断面模式図……24
第18図　郭内トレンチ平面図……25
第19図　郭内確認図……26
第20図　遺物実測図（１）……27
第21図　遺物実測図（２）……28
第22図　土塁範囲推定図……31

第Ⅰ章　調査の概要

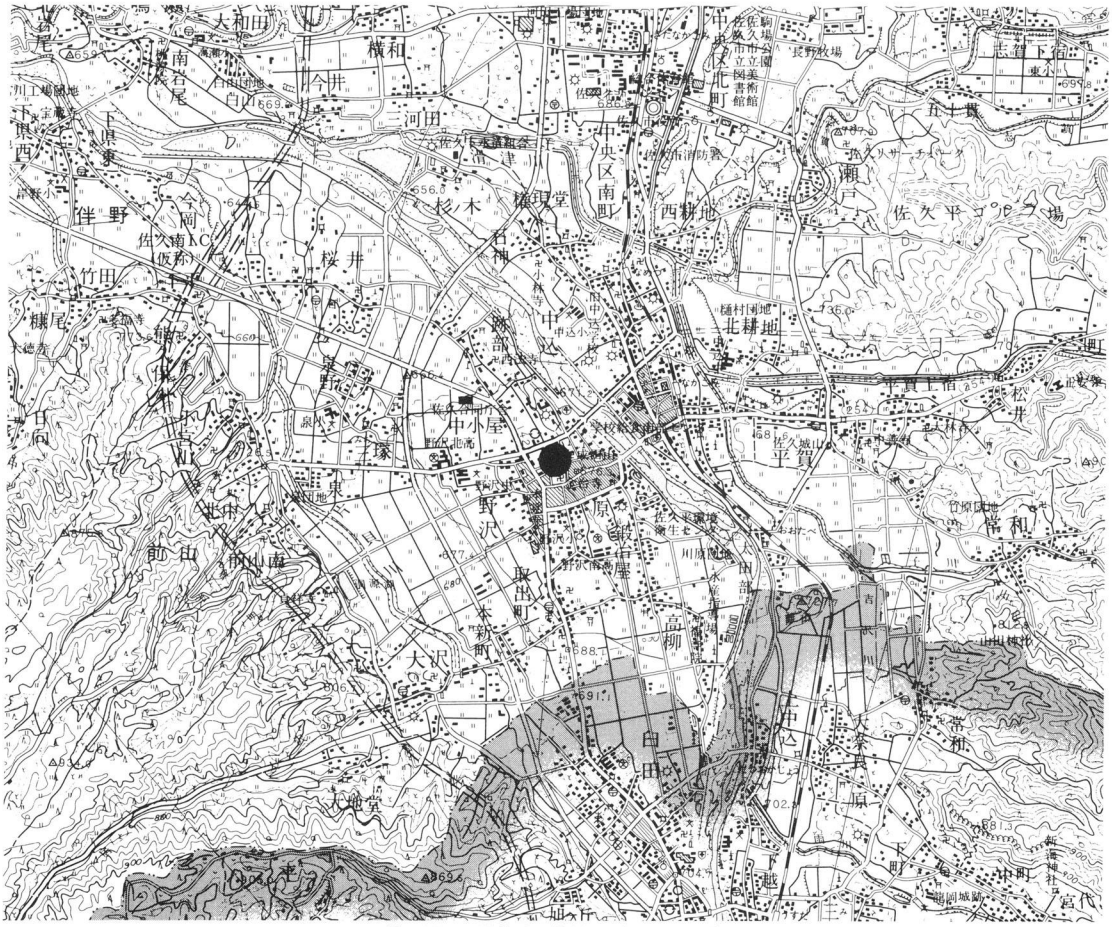
第１節　調査の経緯と経過

野沢館跡は佐久市大字野沢･原に所在し、千曲川左岸に広がる標高675m内外の河岸低段丘に展開する。平安時代末期から中世の居館址として、昭和40年に「伴野城跡」として長野県史跡に指定されている。

伴野城跡は「鎌倉時代以来伴野氏の館跡で後の野沢城の主郭にあたる。東西74～85m、東西110mの長方形で周囲に用水路を巡らし、その内側に沿って西・北・東の三方に土塁を残している。室町から戦国時代にかけて伴野氏が館跡を主郭として二の郭・三の郭などを設け堀を巡らすなど規模を拡大した。江戸時代以降は官庫・陣屋・岩村田藩出張所など官公地として存続した。」と『佐久市志』に記述されている。

本館跡内では平成３年度に野沢館跡Ⅰ・Ⅱの調査が行われ、中世の土坑・柱穴址・石組遺構等が検出されている。また、平成11年度に実施された薬師寺遺跡では近世の寺院と中世の園池が調査され、平成13年度の野沢館跡Ⅲ、平成15年度の野沢館跡Ⅴでは土坑・柱穴址が調査されている他、平成15年度に行われた野沢館跡Ⅵの発掘調査では外郭の堀の一部が確認されている。

今回、佐久市都市計画課が行う「まちづくり総合支援事業城山公園整備」に伴い、堀及び土塁の確認調査を実施することとなり、佐久市教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。



第１図　野沢館跡Ⅳ位置図（１：50,000）

第２節　調査組織

調査主体者	佐久市教育委員会	教　育　長　髙柳　　勉
事　務　局	教　育　次　長	黒沢　俊彦（平成14年度）　赤羽根寿文（平成15年度）
	文化財課長	嶋崎　節夫
	文化財係長	森角　吉晴（平成14年度）　高村　博文（平成15年度）
	文　化　財　係	林　幸彦　三石　宗一　須藤　隆司　小林　眞寿
		冨沢　一明　上原　学　出澤　力
		山本　秀典（平成14年度）　赤羽根太郎（平成15年度）
調査体制	調査担当者	三石　宗一　出澤　力
	調　査　主　任	森泉かよ子
	調　査　員	阿部　和人　岩下　友子　柏木　義雄　柏原　松枝　菊池　喜重　小林よしみ
		佐藤　剛　篠崎　清一　島田　幹子　副島　充子　田中　章雄　中島フクジ
		橋詰　勝子　橋詰　信子　花岡美津子　平林　泰　真嶋　保子　和久井義雄
		渡辺　長子

第３節　委員会の設置

１　委員会の設置と委嘱

県史跡伴野城跡の公園整備とこれに伴う埋蔵文化財発掘調査について検討を行うことを目的として「県史跡伴野城跡保存整備委員会」を組織し、平成14年７月17日付けで佐久市教育委員会教育長名で委嘱を行った。

県史跡伴野城跡保存整備委員会

役　　職	氏　　名	経　　歴
委　員　長	木　内　　寛	佐久地方古代中世研究者
副　委　員　長	武　田　今朝治	野沢地区開発促進期成同盟会副会長
委　　員	小　野　正　敏	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
委　　員	飯　島　敏　宏	野沢地区開発促進期成同盟会副会長
委　　員	市　川　悦　雄	野沢地区開発促進期成同盟会副会長
委　　員	井　出　正　義	佐久地方古代中世研究者
委　　員	内　堀　儀　彦	野沢地区開発促進期成同盟会会長
委　　員	河　西　克　造	長野県埋蔵文化財センター
委　　員	茂　原　仙　次	地元学識経験者
委　　員	並　木　徳　夫	地元学識経験者

２　委員会設置要綱

佐久市教育委員会では、同委員会設置要綱（案）を定め第１回委員会において承認を得た。

県史跡伴野城跡保存整備委員会設置要綱

（趣　　旨）

第１条　この要綱は、県史跡伴野城跡の史跡公園整備とこれに伴う埋蔵文化財発掘調査について検討を行うために設置する県史跡伴野城跡保存整備委員会（以下、「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（協議事項）

第２条　委員会は、次に掲げる事項を協議し、決定する。

（１）野沢館跡Ⅳの発掘調査に関すること。

（２）史跡公園「城山公園」の整備に関すること。

（３）その他必要な事項。

（組　　織）
第３条　委員会は、別表の委員をもって組織する。
　　２　委員長は、会務を統括する。
　　３　委員長に事故ある時は、副委員長がその職務を代行する。
（委嘱及び任期）
第４条　委員会の委員は、佐久市教育委員会が委嘱する。
　　２　委員の任期は、委嘱した日から１年間とする。なお、事業が継続する場合はさらに１年間延長するものとする。
（役　　員）
第５条　委員会に次の役員を置く。
　（１）委員長１名
　（２）副委員長１名
（会　　議）
第６条　委員会は、委員長が招集する。
　　２　会議の議長は、委員長がこれにあたる。
（事 務 局）
第７条　委員会の事務局は、佐久市教育委員会文化財課に置く。
（そ の 他）
第８条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。
（付　　則）
　この要綱は、平成14年７月17日から施行する。

第４節　調査日誌

平成14年７月17日	第１回伴野城跡保存整備委員会
９月12・13日	スーパーハウス設置、機材搬入。
９月17日～10月10日	重機により旧野沢会館跡地へトレンチの掘り下げを行う。 堀の存在を確認するため、トレンチＡ・Ｂ・Ｃの掘り下げを行う。 東側土塁の一部切断調査を行う。
10月２日	第２回伴野城跡保存整備委員会
10月21日～12月２日	旧野沢会館建物及び城山公園内四阿・遊具の基礎撤去作業を行い、破壊状況と遺構の確認を行う。
10月22日	堀・土塁の石積み写真実測実施。
11月17日	地元野沢地区の皆さんを対象とした現地説明会を開催。
12月６日	第３回伴野城跡保存整備委員会 ラジコンによる空中写真撮影。
12月17日～26日	南側虎口部分と東側Ａトレンチを拡張し、石積みの検出を行う。 土橋石積み写真実測実施。
平成15年２月12日	既設トイレ・花壇撤去立ち会い。
２月17日	第４回伴野城跡保存整備委員会
７月18日	第５回伴野城跡保存整備委員会
４月１日～平成16年３月31日	報告書作成作業を行う。
平成16年３月18日	第６回伴野城跡保存整備委員会

現地説明会

保存整備委員会

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境

佐久平は北に浅間山を主とする三国山脈の南端峰群、東から南に関東山地から連なる山々である佐久山地、西から南方に八ヶ岳連峰と四方を山々に囲まれた盆地で、長野県の東端部に位置する。

佐久市の東側群馬・長野の県境は佐久山地と呼ばれている荒船山（1,422m）、物見山（1,375m）、八風山（1,315m）から妙義山（1,104m）と続き、妙義荒船佐久高原国定公園に指定されている。西側は赤岳（2,899m）、硫黄岳（2,742m）、蓼科山（2,530m）、霧ヶ峰、美ヶ原台地と続く八ヶ岳中信高原国定公園が諏訪郡界となっており、両側とも古代からわが国東西交通の難路として東山道・中山道とその脇街道としての多くの岐路が拓かれていた。また、北側は活火山浅間山（2,560m）から北へ高峰山（2,105m）、湯の丸山（2,105m）、烏帽子山（2,065m）、四阿山（2,333m）などの上信火山帯が続く上信越国立公園がそびえている。

この佐久平の中央を南から北へ多くの支流を集めて千曲川が貫流している。千曲川は東信最東端の埼玉県境にある甲武信ヶ岳（2,483m）から発源して北流し、川上村を流下して南佐久郡佐久町付近に至ると水量を増し谷幅を広めて佐久平に入り小諸市布引北方で小県郡に流出している。この千曲川の流路を基軸として小諸市から佐久町までの南北約20㎞、佐久市中央部で東西約10㎞のほぼ菱形の高原盆地が佐久平である。稲作単作地帯ではあるが灌漑水の安定・夏季の晴天日が多いなどの自然条件に恵まれている地域である。

地形構造の上からの佐久平は①浅間火山噴出物の堆積する北東部、小諸・岩村田地域、②佐久山地古期岩層周辺の南佐久東半部、③千曲川以西、八ヶ岳蓼科山麓部分の南佐久西半部に大別区分される。その境界は南北でほぼ千曲川の流路であり、①・②の境界は内山川と志賀川が合流して千曲川に注ぐ滑津川の東西線で、旧南佐久郡と北佐久郡の境界の断崖線でもある。

①は小諸市・御代田町・佐久市の北半部の平坦地で、わが国で最も若い火山浅間火山の第四期の火山噴出物―塚原泥流・軽石流・追分火砕流―の火山灰・火山砂・火山礫・浮石・火山弾の堆積地帯で未分解透水性は良好であるが、粘性・凝結性の乏しい火山性壌土が地表を被っている。そのために流水に対する抵抗力は頗る弱く、この地帯は流水による火山麓地帯特有の水蝕地形「田切り地形」が発達している。

②は佐久市南半部・南佐久郡の千曲川以東の町村の平地部分で、佐久山地の秩父古生層・中生層・新生代第三紀層地帯を浸食谷がよく発達し、谷口扇状地・洪積堆積層分布地も含まれている。肥沃土壌層は厚いが段丘や傾斜地が多い。

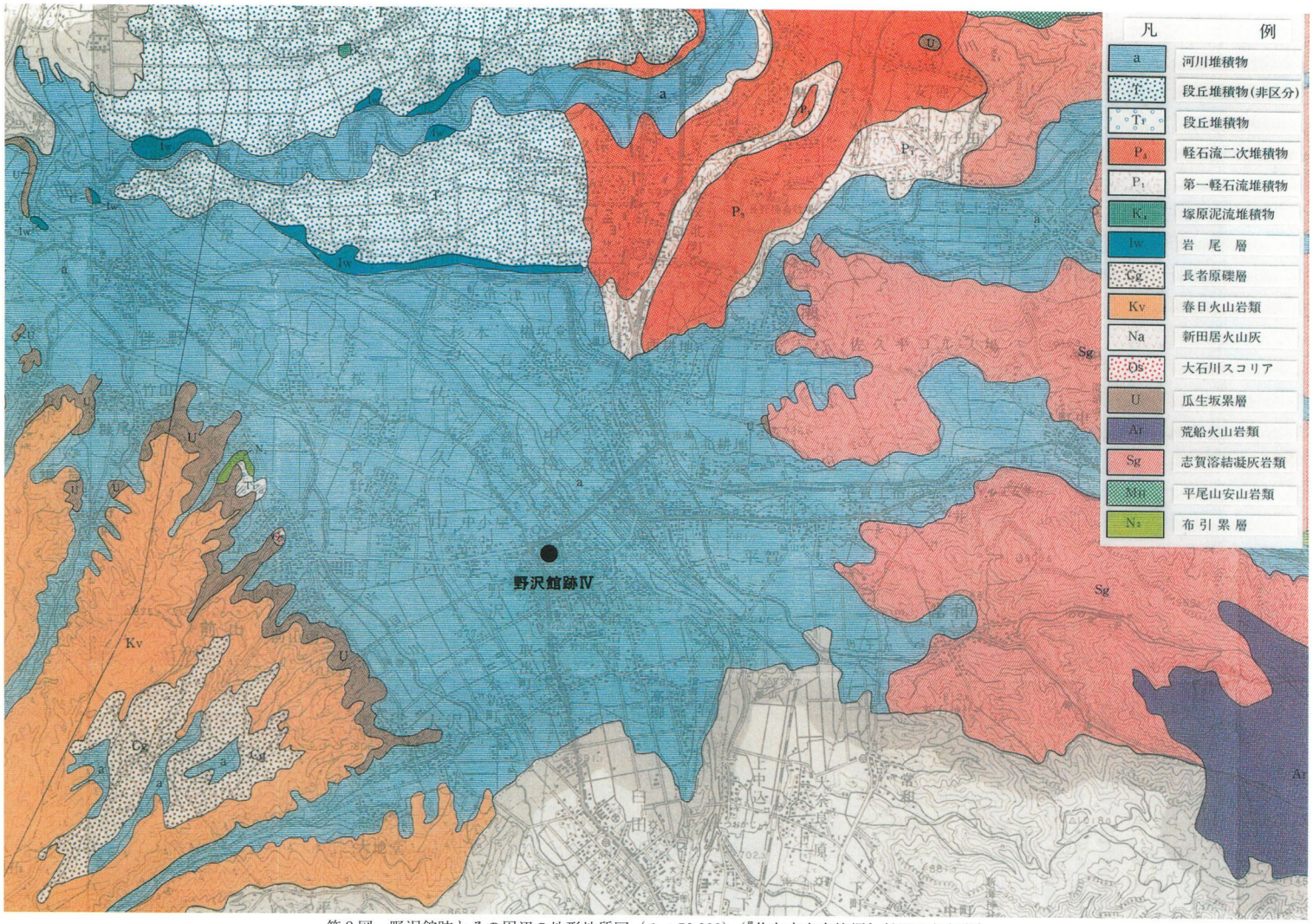
③は北佐久郡御牧村・小諸市の一部・望月町・立科町・浅科村・佐久市西部・臼田町・佐久町の西半部地域の八ヶ岳蓼科火山山麓平地で、火山基盤の集塊岩は佐久平まで到達し沖積層と合わさって台地状地形を作っている部分もあるが火山溶岩の露出はなく、山麓緩斜面は厚いローム層に被われている部分が多い。佐久平周辺部は耕作適地土壌に恵まれている。

このうち野沢館跡は、③千曲川以西、佐久市南部の中心部に位置し、千曲川の西約300mの沖積地に存在しており標高約675mを測る。この付近は佐久平中心部の沖積氾濫源の堆積地帯で、地層は上部から黄褐色の砂質細粒粘土層が40m内外の厚さで堆積している。その下部は大小の円礫を多量に含む砂礫層が観察され、50m以下は確認することができなかったが数メートルの厚層であることは付近の古井戸から推定される。

これらの堆積当時の状態を考えると、千曲川の大洪水大氾濫期が長く続き流路は至る所を移動し、上流の八ヶ岳・佐久山地からの多量な大小各種の砂礫を佐久平一面に溢流堆積したもので各所に自然堤防なども形成した。流水量の変化により流路がほぼ安定した以後も時には大洪水の濁流のみが自然堤防を溢れて濁水を充たした細粒粘土をその上部に堆積してこの付近の水田耕作面が形成されたものと解釈される。

佐久平の中心部である野沢平のこの辺りは土壌も肥沃であり古くから用水施設も完備され、冷旱害もない水田適地である。野沢館跡の堀へ引水した水路が起源であると伝えられる八か用水（野沢堰）は、野沢町の古村名（今の大字）高柳・鍛冶屋・本新町・取出・野沢・原・三塚・跡部の八ケ村を潤すので命名されたもので、臼田町稲荷山下で千曲川から取水し、道川・柳沢用水・一本柳用水に分水して野沢平の田用水として利用されている。

（佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第13集『薊沢　蔦石』より抜粋、一部加除）



第２図　野沢館跡とその周辺の地形地質図（１：50,000）（『佐久市志自然編』付図より転載）

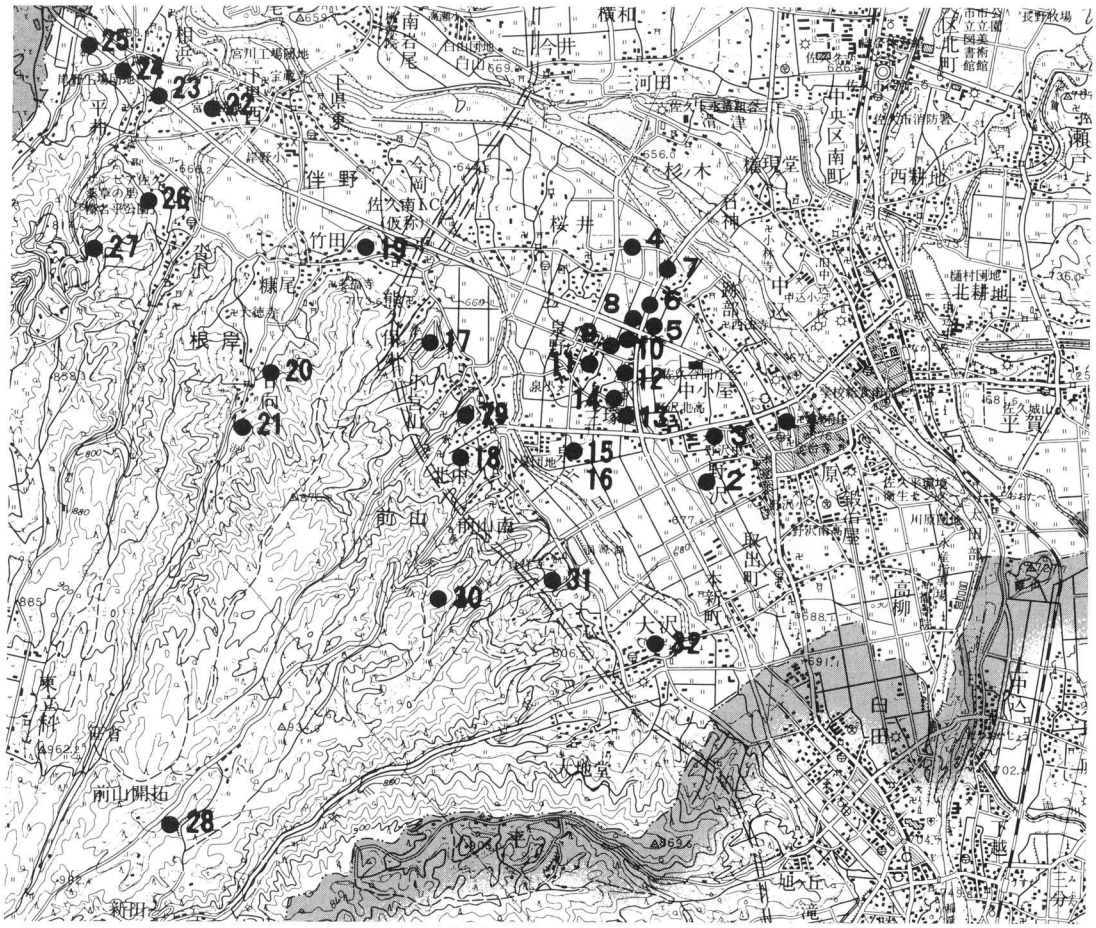
第２節　周辺遺跡

野沢館跡が所在する野沢地籍及びその周辺の三塚・前山・小宮山・桜井地区には東に傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。

まず、先土器時代の遺跡として、211点からなる石器群が出土した立科Ｆ遺跡があり、検出層位から31200年±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡には、前期前半の住居址６棟が調査された後沢遺跡、中期後半の住居址16棟が調査された中村遺跡、筒村Ｂ・山法師Ｂ遺跡などがある。また、前山地籍の瀧の下遺跡からは後期の敷石住居址２棟が検出されている。縄文時代の遺跡はその多くが山地沿いの谷間か水田面に接する山裾周辺に広がっており沖積低地での集落址は発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては後沢遺跡で中期３棟・後期32棟の住居址、方形周溝墓３基が調査され、西裏・竹田峯遺跡からは中期９棟・後期５棟の住居址とともに後期の壺棺墓が検出され、壺内より胎児骨と管玉・ガラス小玉が出土している。また、舞台場遺跡では後期の住居址13棟が調査されている。いずれも片貝川西部の山裾に広がる遺跡であり、千曲川と片貝川に挟まれた微高地上からは弥生時代の集落は検出されていない。

古墳時代に至ると遺跡は沖積低地まで広がり、圃場整備などで中道遺跡・市道遺跡・三塚町田遺跡・跡部町田遺跡・三塚鶴田遺跡・上桜井北遺跡などが調査されている。近年では都市計画道路小諸臼田線道路改良事業（国道141号）に伴い平成11年度に跡部儘田遺跡･跡部町田遺跡Ⅱの発掘調査が行われた他、寺添遺跡（平成６年度）、市道遺跡Ⅱ（平成10年度）、宮添遺跡（平成11年度）、中道遺跡Ⅱ（平成９･11･13年度）、東五里田遺跡（平成14年度）の調査が実施され、中期後半から後期の集落址が調査されている。

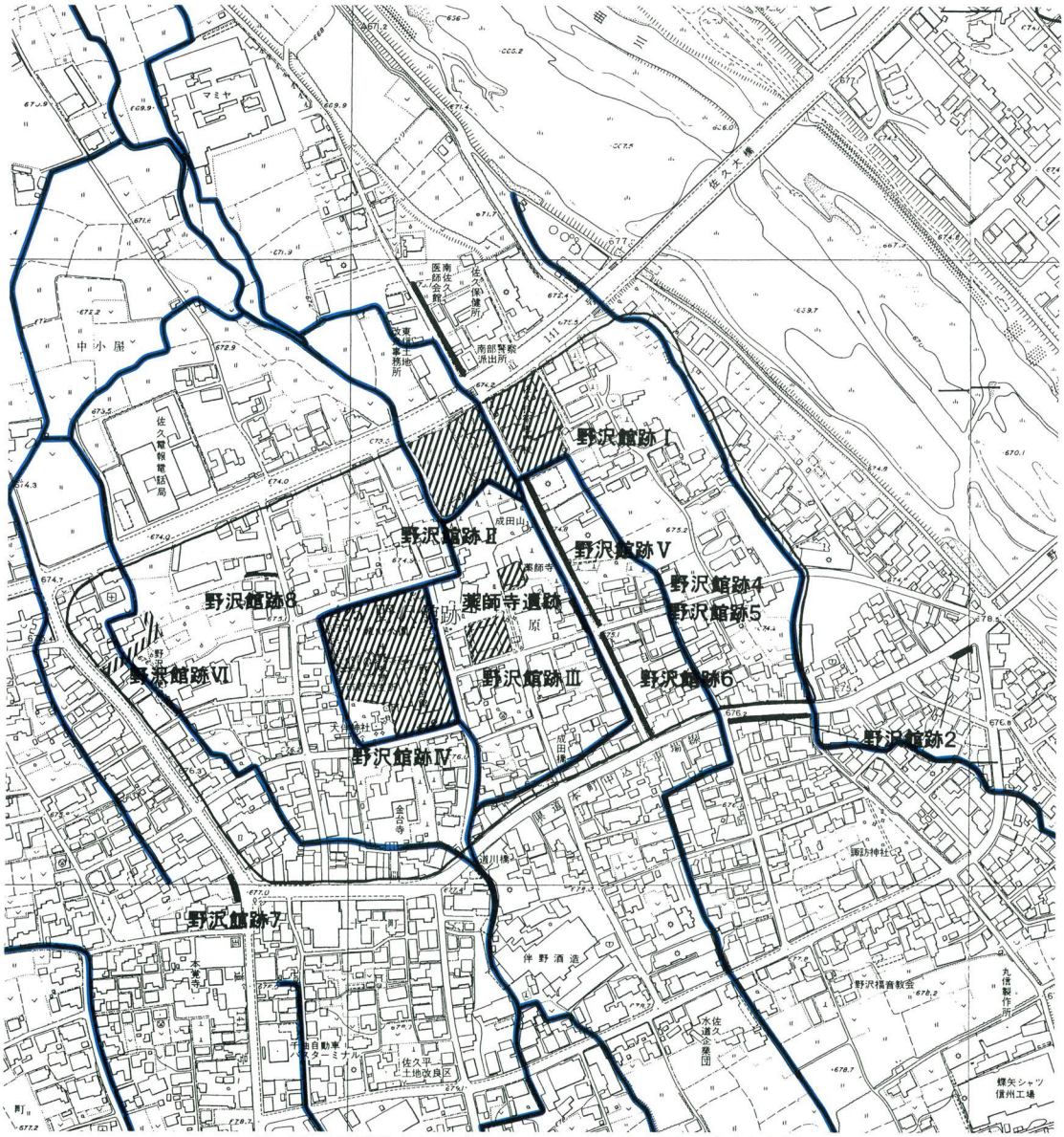


第３図　周辺遺跡分布図（１）（１：50,000）

古墳址は千曲川東岸の山裾に群集墳が集中して存在するのに対して西岸には少なく、蓼科山塊が沖積平坦地に突き出す尾根の先端部やその山腹などに散在しているのみで、昭和61年度に佐久市志編纂事業に伴い調査が行われた瀧の峯古墳群の他、榛名平遺跡で後期から終末期に属する横穴式石室の榛名平１号墳と坪の内古墳が調査されたにとどまっている。

奈良・平安時代は古墳時代と同様な様相を示し、低地と山裾に小規模な集落址が確認されている。中道遺跡からは奈良三彩の蓋が、榛名平遺跡からは奈良二彩の蓋が出土しており注目される。

鎌倉時代以降になると野沢館跡や前山城跡が伴野氏によって築かれたとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野氏館の様子が描かれている。また、榛名平遺跡からは中世後期と考えられる土壙墓・火葬墓といった墳墓群が検出されている。



第４図　周辺遺跡分布図（２）（１：5,000）（▬は現在の水路を表す）

第１表　周辺遺跡一覧表

№	遺　跡　名	所　在　地	調査年度	検　出　遺　構　・　出　土　遺　物　等
1	野沢館跡Ⅳ	野沢字居屋敷	平成14年度	本調査
2	儘田遺跡	野沢字儘田	昭和45年度	住居址４（奈良・平安）、土壙９
3	東五里田遺跡	野沢字東五里田	平成14・15年度	住居址２（奈良）、掘立柱建物址21（奈良・中世）、竪穴状遺構２、土坑14、溝址２
4	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	昭和52年度	住居址18（古墳～平安）、特殊遺構10
5	跡部町田遺跡	跡部字町田	昭和50年度	住居址５（古墳）、土坑２、溝１
6	跡部町田遺跡Ⅱ	跡部字孫次郎・反田	平成11年度	住居址16（古墳～平安）、掘立柱建物址１
7	跡部儘田遺跡群跡部儘田遺跡	跡部字儘田・口明塚	平成11年度	住居址74（古墳～平安）、掘立柱建物址５、鍛冶址１、畑址
8	三塚町田遺跡	三塚字町田	昭和49年度	住居址６（古墳）、竪穴状遺構１、土坑、溝
9	市道遺跡	三塚字市道	昭和49年度	住居址10（古墳～平安）、竪穴状遺構５、土坑、溝址
10	市道遺跡Ⅱ	三塚字市道	平成10年度	住居址５（古墳・奈良）、掘立柱建物址４、土坑10、溝址３
11	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	昭和50年度	住居址４（平安）、土坑３
12	三千束遺跡群宮添遺跡	三塚字宮添	平成11年度	住居址４（古墳・奈良～平安）、竪穴状遺構２、土坑３、柵列３、ピット39
13	三塚遺跡	三塚字東野沢田	昭和48年度	住居址３（古墳・平安）、土坑２
14	三千束遺跡群寺添遺跡	三塚字寺添	平成６年度	住居址29（古墳・奈良）、掘立柱建物址６、井戸址４、土坑３、溝址１
15	中道遺跡	前山字中道	昭和46年度	住居址６（古墳・平安）、奈良二彩蓋形陶器、和同開珎
16	中道遺跡Ⅱ	前山字中道	平成９・11・13年度	住居址17（弥生～古墳）、土坑４、ピット群
17	後沢遺跡	小宮山字後沢	昭和51・52年度	住居址54（縄文～平安）、方形周溝墓３、特殊遺構、土坑
18	瀧の下遺跡	前山字滝下・鱗渓	平成２年度	住居址３（縄文）他
19	西裏・竹田峯遺跡	伴野字西裏、根岸字竹田峯	昭和60年度	住居址26（弥生中期～平安）、特殊遺構４、周溝３、土坑26、溝７、ピット
20	筒村Ｂ・山法師Ｂ遺跡	根岸	平成３・４年度	住居址９（縄文・平安）、掘立柱建物址４、竪穴建物址２、土坑、ピット群
21	中村遺跡	根岸字日向	昭和57年度	住居址16（縄文中期）、土坑５（縄文前・中期）、溝１
22	舞台場遺跡	根岸字反り田	昭和56年度	住居址52（弥生～平安）、掘立柱建物址４、土坑22、特殊遺構１、溝址２
23	小金平遺跡	根岸字小金平	昭和56年度	住居址３（縄文・奈良・平安）、土坑、ピット群
24	立石遺跡	根岸字立石	昭和56年度	遺構・遺物なし
25	石附窯址	根岸字石附	昭和56・63、平成元年度	須恵器窯址２（古墳）、木炭窯址５（古墳）、方形周溝墓１、竪穴状遺構、土坑
26	榛名平・坪の内遺跡群榛名平遺跡	根岸字榛名平・坪の内	平成５・６年度	住居址112（縄文～平安）、掘立柱建物址30、古墳２、方形周溝墓、土坑、竪穴状遺構
27	瀧の峯古墳	根岸字堂の入山	昭和61年度	古墳２
28	立科Ｆ遺跡	前山字立科	平成２年度	石器ブロック９
29	前山城跡	小宮山字城山・伴野城根		
30	前山古城跡	前山字尾垂・川越石		
31	荒城跡	前山字鷺林		
32	荒山城跡	大沢字城山		

第３節　野沢館跡の概観

今回調査を行った野沢館跡Ⅳは佐久市大字野沢字居屋敷110－５に所在する。昭和40年に長野県史跡に指定されており、大伴神社をはじめ南に金台寺、東に成田山薬師寺といった寺社に囲まれた野沢市街地の中心部に位置している。

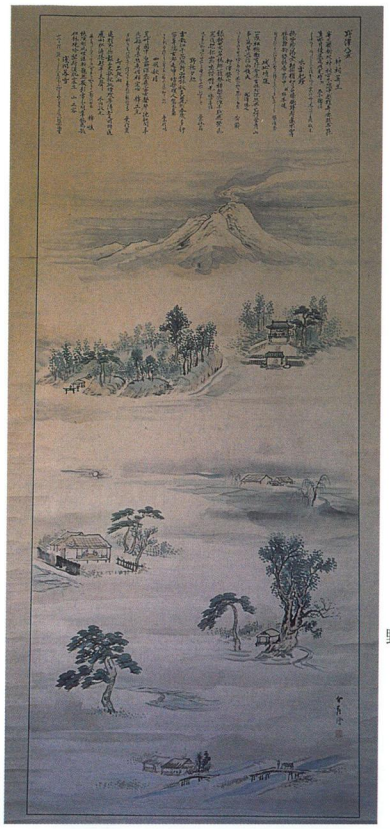
「伴野城跡」として長野県史跡に指定されているのは東西74～85m、南北110mの範囲内で、現在は周囲に用水路が巡り西・北及び東の一部に高さ約３mの土塁が残っている。

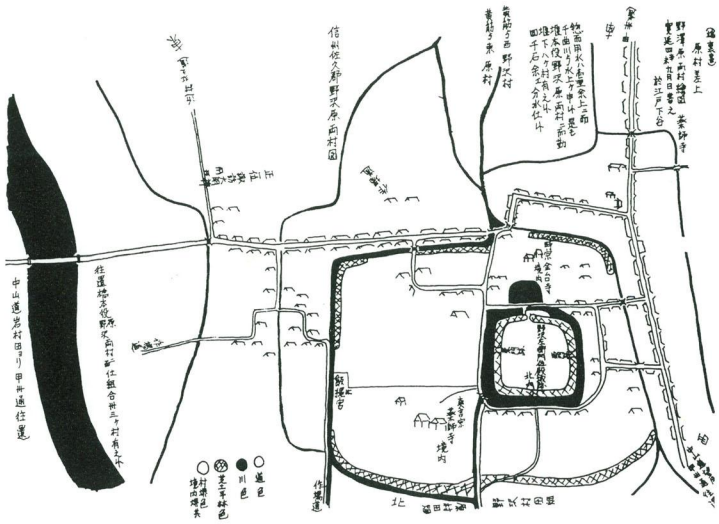
野沢館跡のはじまりについては二つの見方があるとされ、(註１)「ひとつは野沢を名字とした人物として、平安末期、木曽義仲に従った野沢太郎が知られていることから、平安末期この地には野沢氏が住んでいたと考え、野沢城はこの野沢氏にはじまるとするものである。そして鎌倉幕府初期に甲斐から佐久伴野庄の地頭に補任された小笠原長清から、その子時長に引き継がれたと考える。もう一つは、小笠原長清の子で伴野氏を名乗った時長かその子の時直が築いたとするものである。」その後、伴野と大井の争い、伴野一族内の争いの中で、防衛強化の必要から現在の野沢館跡を主郭として外郭を設けて城郭としての形態を整えるようになったとされ、(註２) 寛延四年（宝暦元、一七五一）の絵図を第５図に示した。

江戸時代以降の野沢館跡については、「江戸時代になってからの野沢城趾は、先ず小諸に在城して佐久を領した仙石氏が、ここに米倉を建てて年貢米の貯蔵に当てた。その後江戸の中期佐久の大部分が幕府領となった当時、代官の陣屋がこの城地に設置され（代官馬場源兵衛）又米倉も置かれて貢米の貯蔵が行われた。享保三年（一七一八）役所を廃止するに当たって、ここを村の郷倉地に下付したという。明治になり、二十二年にこの館趾に城山館が建てられ、更に四十四年には村社諏訪社を館趾の一角に移し、以前からここに在った八幡社と合祠し、旧庄名に因んで大伴神社と称した。以来この館趾は、大伴神社の境内地並びに公園となって現在に及んでいる。」と記載されている(註３)。

近年では昭和36年に野沢会館が建設され、昭和51年からは城山公園（都市公園）として市民の憩いの場として広く利用され今日に至っている。今回の調査地付近は、昭和58年に行われた佐久市遺跡詳細分布調査によって主郭・外郭を中心に「野沢館跡」として周知され、本調査の他に「薬師寺遺跡」（平成11年度）、「野沢館跡Ⅲ」（平成13年度）、野沢館跡Ⅴ・Ⅵ（平成15年度）などの発掘調査が実施されている。

註１）郷道　哲章　1993「第三章　第一節　二 武士と館」『佐久市志　歴史編（二）　中世』
註２）木内　　寛　1993「第六章　第五節　二 城館と集落」『佐久市志　歴史編（二）　中世』
註３）平林　富三　1972「伴野氏館跡（野沢城）来歴」『資料第一　伴野氏館跡来歴　伴野氏について』

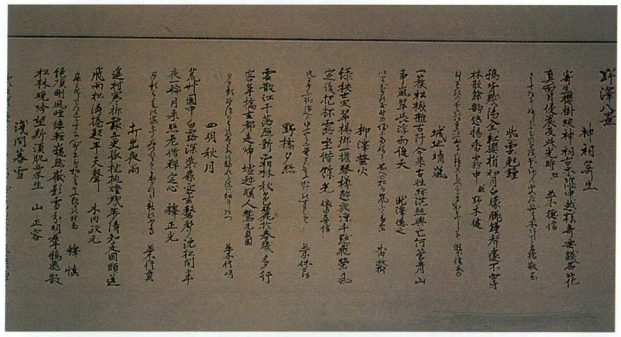


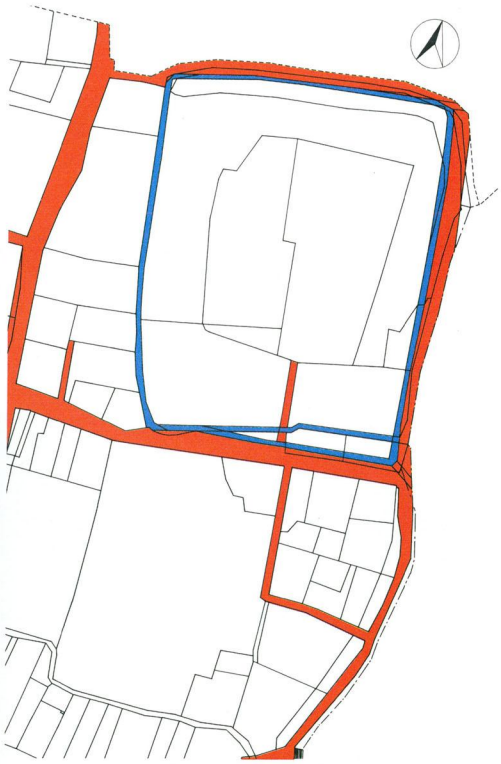


第５図　伴野城跡絵図（『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』より転載）

野沢八景（並木徳夫氏蔵）

並木氏によると、1830年代（天保年間）の作とされ、野沢館跡の他金台寺・野沢橋・浅間山など旧野沢村の代表的な景色が描かれている。





第６図　野沢館跡図
（昭和31年調整の旧公図を基に作成）

第Ⅲ章　発掘調査

第１節　調査の方法

今回発掘調査を実施した野沢館跡Ⅳは、昭和40年「伴野城跡」として長野県史跡に指定されていることから長野県教育委員会の指導を受け実施した。また、調査の方法については随時「保存整備委員会」に諮り決定した。

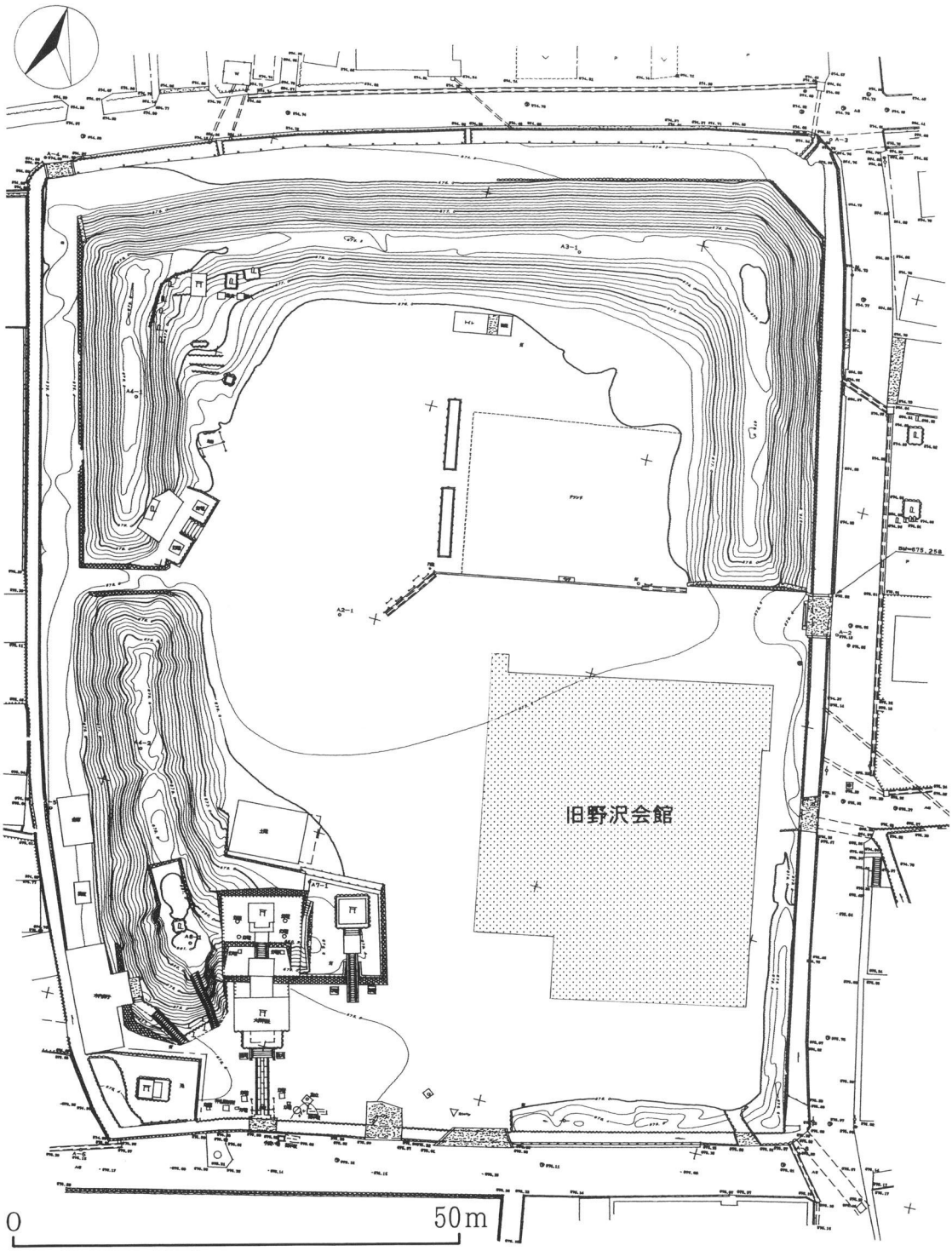
調査は①調査区東及び南側の堀の確認、②東側土塁の一部切断調査、③旧野沢会館建設及び城山公園内の四阿・遊具の設置による郭内の破壊状況と遺構の確認の３点について行った。

①東側Ａ・南側Ｂの２箇所について、調査区の周囲を巡っている現水路内側の石積みを撤去した後、トレンチＡ・Ｂを掘り下げ堀の確認を行った。その結果、いずれのトレンチからも堀の覆土である黒色の水性堆積層が認められ、堀の存在が確認されたことからさらに東側にトレンチＣを設定し掘り下げを実施した。覆土については当時の古環境に関する情報を得るため珪藻分析・花粉分析を行った。調査区南東部分については堀のコーナーを確認するためプランの検出を行った。

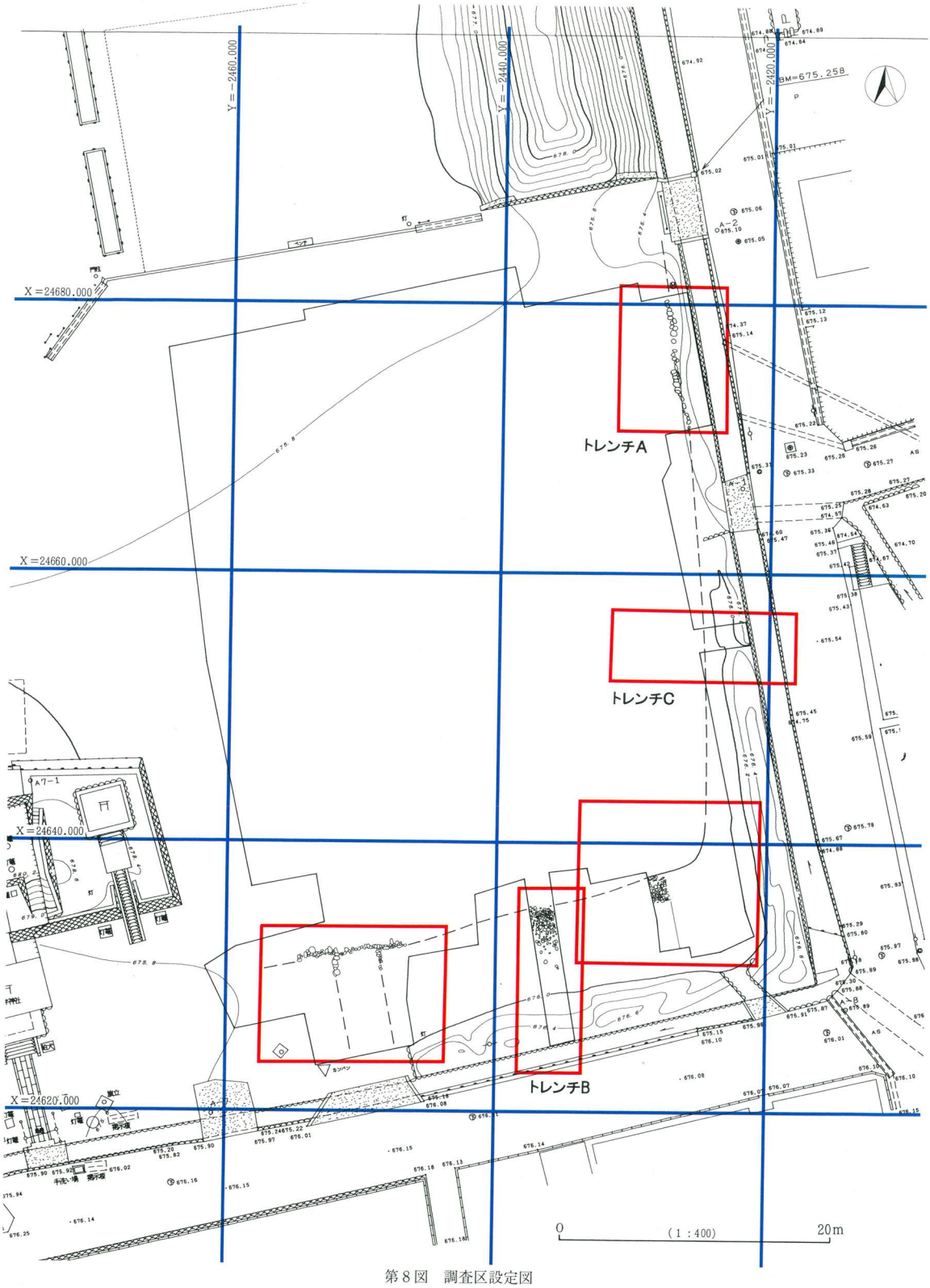
郭内への入口施設は南側中央部分に存在すると考えられたことから、調査範囲を拡張して検出された石積みの範囲確認を行った。調査の結果、南側の入口施設である土橋の両側に設けられた石積みの一部であることが判明した。また、東側に設定したトレンチＡにおいても同様な石積みが確認され、東側での入口施設の存在が予想されたことからトレンチを南北に拡張して石積みの範囲確認に努めたが、石積みの上部にあたると考えられる石列が検出されたものの、明確な石積みの範囲は確認できなかった。検出された石積みについては保存を前提として範囲確認のみとし、調査の際の堀内に崩落した礫の撤去も最小限とした。

②土塁は西・北及び東の一部に残っている。現存する土塁上にはケヤキ・サクラなどの高木があることから、これらをできるだけ避ける位置にトレンチを設定し、規模・構築過程を把握することを目的として一部切断調査を実施した。調査にあたっては、遺物の出土層位を把握するため表土削平以外の掘削作業は人力で行った。掘り下げ段階で中央部分より東側（外側）６段、西側（内側）４段の石積みが確認された。土塁の構築段階を考えるうえで重要な資料であると考えられることから保存整備委員会に諮り、この部分については保存することとし、他の部分について地山まで掘り下げを行うこととなった。また、委員会での指導により郭内における整地層を確認するためトレンチを西側に延長して掘り下げを行ったが、トレンチ内より城跡に関連すると考えられる土坑・ピット等が検出されたため、検出面での記録を行った後現状のまま埋め戻すこととし、整地層の確認はこれらの遺構を避け部分的に行った。

③平成13年度に実施した旧野沢会館の撤去は基礎部分を残しての撤去であることから、今回は基礎を撤去した後、会館建設による破壊状況の確認調査を行い、併せて遺構の有無を確認した。建物基礎の撤去については、破壊を免れている部分を傷めないように会館建設時に掘削した部分のみを掘り起こして基礎を引き抜く方法で行い、会館跡地内の破壊状況と遺構の確認を行った。また、これ以外の部分は城山公園（都市公園）として利用されていたことから、公園内に設置されていた四阿・遊具、南側の防火水槽についても同様な方法で撤去を行い設置によって破壊を受けている範囲の確認を行った。



第７図　調査区現況測量図


Y＝－2460.000
Y＝－2440.000
Y＝－2420.000
BM=675.258
X＝24680.000
X＝24660.000
X＝24640.000
X＝24620.000
トレンチA
トレンチB
トレンチC
0
(1：400)
20m

第８図　調査区設定図

第２節　虎口の確認調査

郭内への出入口施設である虎口の位置を明らかにすることを目的として史跡内南側のほぼ中央に調査区を設定して掘り下げを行った。調査の結果、堀内周の立ち上がり部分にあたるほぼ直立した状態の石積みが確認された。

石積みの石材には川原石の自然石が用いられており、本調査地は千曲川の氾濫源に位置していることから堀の掘削の際に入手できる石を使用しているものと考えられる。

石の積み方については、土橋部東側に一部大型の石を立てて使用している部分が認められるものの、石積みの強度を保つため石の長辺を控えとして石の小面を堀面としている。また、これらの石材は小面を水平に積むことを基本としているものの横目地の通らない乱れた「乱積み」である。堀内からは崩落した礫が多量に検出されたことから底面までの掘り下げには至らなかったため規模については明確ではないが、土橋接続部から東側2.2m、西側2.8m、高さ約１ｍまで調査を行い、この石積みが内側で南に屈曲して土橋を形成していることが判明した。

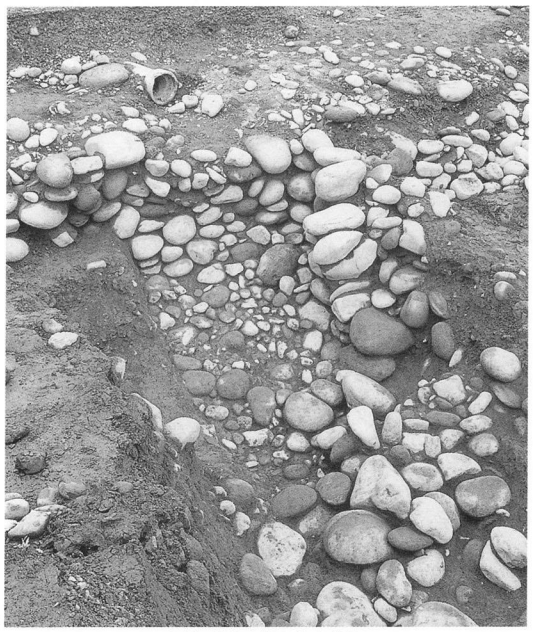
土橋は現在の出入口とほぼ同じ位置にあたり約３ｍの幅を有する。土橋の両側に設けられたこの石積みは堀部と同様な「乱積み」であり、東側で1.4m、西側で1.7mが確認されたが、南に向かうに従って徐々に形を失い、さらに南側は撹乱による破壊を受けている。また、残存している石についても堀側にずれているものが認められる。

土橋の構築については、第９図に示したように堀部と土橋部の接続部に石積みの上段部にあたると考えられる石列がみられる点と石積みの屈曲部に連続性が認められない点から、掘削した堀の南面にいったん石積みを行った後、礫や土砂によって堀を埋め戻し、両側に土留めとして石積みを設けて土橋を付加したものと考えられる。
また、土橋西側の堀内には土橋の石積みとして用いられたと考えられる礫が崩落した状態で検出されている。

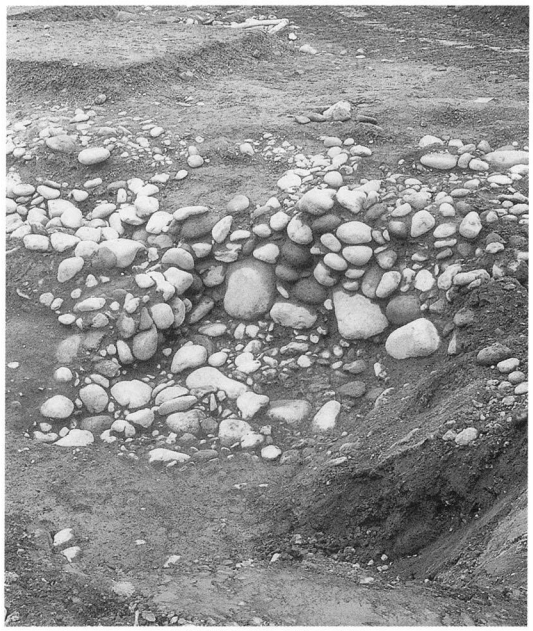
トレンチＢによって確認された堀の内周は礫を敷き詰めた状態で緩やかに立ち上がるのに対して、虎口の両側部分については石積みを行いほぼ直立した状態で立ち上がっていることから、虎口部分からトレンチＢに至るまでの間で堀の構造が異なることが想定されるが、トレンチによる調査であり、虎口東側に撹乱が存在することから石積みの行われている範囲については確認できなかった。

虎口部分石積み検出状況

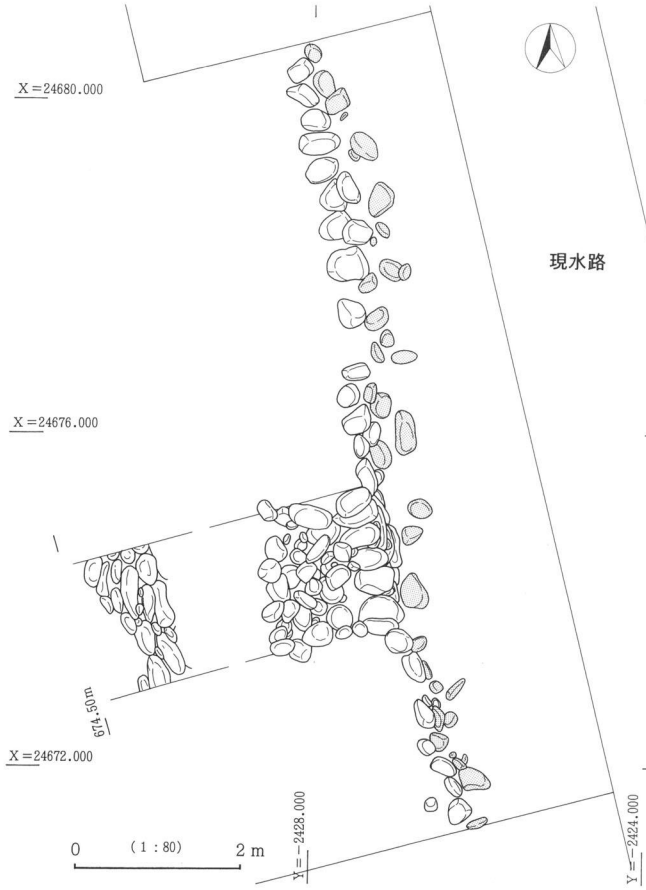
第９図　虎口部分石積み実測図



土橋西側石積み検出状況



土橋東側石積み検出状況



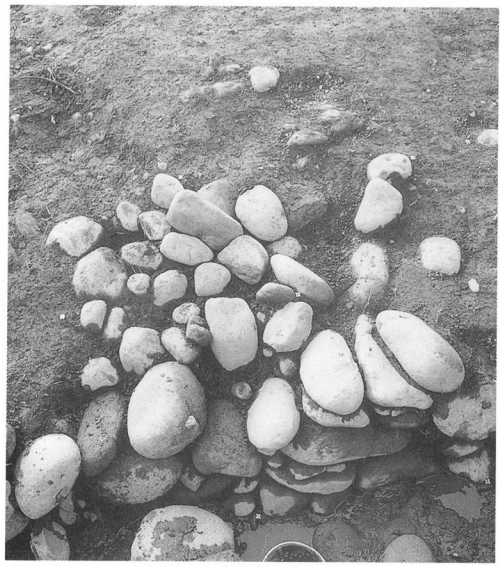
第10図　トレンチＡ石列実測図

トレンチＡ石列検出状況

遺物は虎口付近の堀内から第20図20～22の土鍋片と24の青磁鉢が出土している。21・22の土鍋は同一個体と思われ、口縁部は「く」の字状に外反して内面に耳部が付加される。青磁鉢（24）は龍泉窯系のものと思われるが小片のため器形は不明である。

東側に設定したトレンチＡにおいて確認された石積みが南側虎口部分でみられた石積みと類似することから、トレンチＡを南北に拡張して出入口施設の有無を確認する調査を行った。

その結果、石積みの上部にあたると考えられる南北の石列が確認されたものの、東側の堀内に向かってずり落ちた状態で検出されたため、保存を前提とした確認調査であることからこれらの礫について除去は行わずに範囲を確認するに止めた。したがって、その詳細な位置・形状等は不明であるが、南側のトレンチＢ・東側のトレンチＣにおいてはこのような石積みが確認されていないことから、この付近での入口施設の存在が推測される。



トレンチＡ石積み検出状況

第３節　東及び南側堀の確認調査

調査区の現状は北･西及び東側の一部に土塁が残っているものの、周囲に用水路と道路が巡り現状では堀の存在は確認できない状況である。したがって、東側にトレンチＡ・Ｃ、南側にトレンチＢの３本のトレンチを設定し堀の存在を確認した。

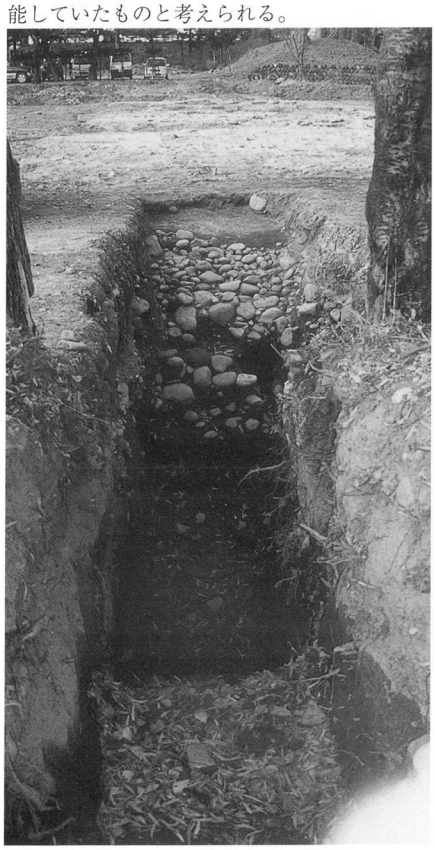
その結果、南側に設定したトレンチＢで調査区南端部より北約10.4ｍから堀の存在が確認された。土層断面によって確認できた最も深い部分で地表面より3.5ｍ、確認面より3.1ｍを測る。また、内周立ち上がり部分には礫が敷き詰められた状態で検出された。

遺物はトレンチＢから第20図２の土師器皿の他、混入品である打製石斧（第21図35）が１点、トレンチＣから第20図17の土師器皿が出土しているのみである。土師器皿はいずれもロクロ成形によるもので底部に回転糸切り痕が残る。また、土層断面より両側を石積みによる東西方向の水路跡が確認された。この水路跡は第６図に示した野沢館跡図にも記載されており、覆土の砂層からは近現代の陶磁器・ガラス等が多量に出土していることから近代の水路跡であると考えられる。

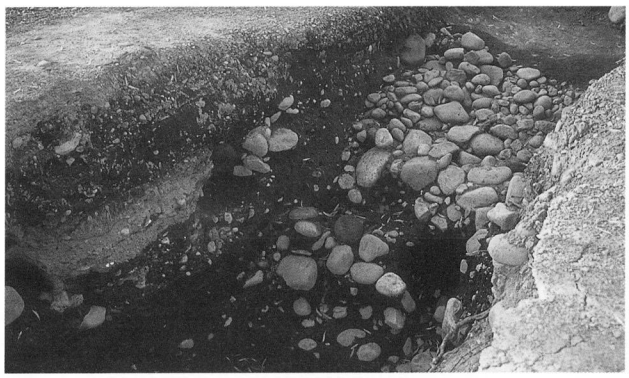
トレンチＡ～Ｃの土層は27層に分層されるが、上層の１～３層は造成の際の砕石と埋土である。また、４・５層の砂層は水路跡の覆土であり、６層はこの石積みの裏込め層である。

堀内の堆積土は７層～26層であり、７～９層は中央付近上面に薄く堆積する。27層は堀の壁体に礫を敷設するための埋土と考えられ、26層は礫を多量に含み崩落層と思われる。また、覆土中トレンチＡの14･19層、トレンチＣの21･24層は砂層であり、堀が埋没する段階での数度にわたる水の流れが想定される。

堀の立ち上がり部分に敷き詰められた礫は上方に用いられている礫に比較して下方に大型の礫を使用している。これらの礫は土層断面から27層上面に敷設されており、被覆された状況は認められないことから露出した状況で堀が機能していたものと考えられる。

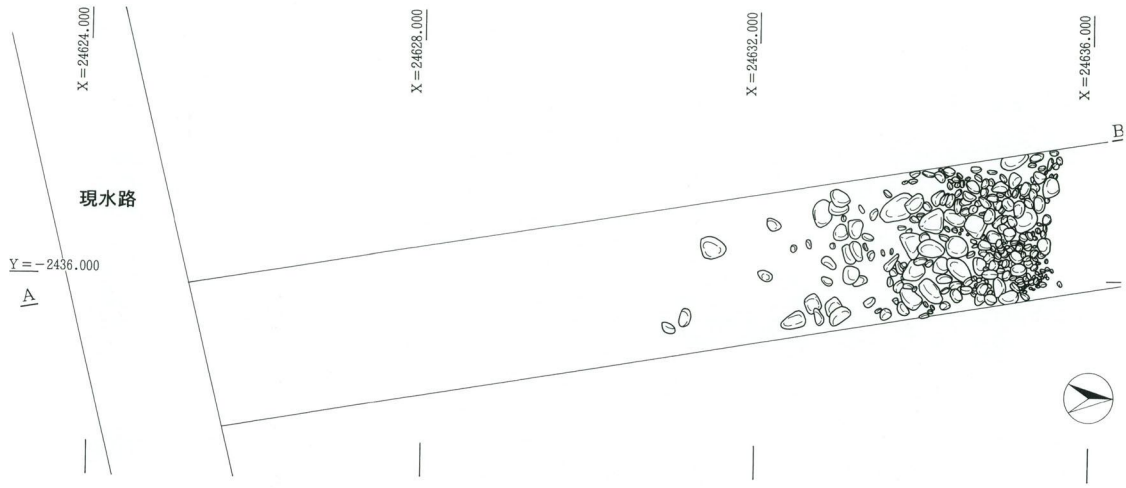


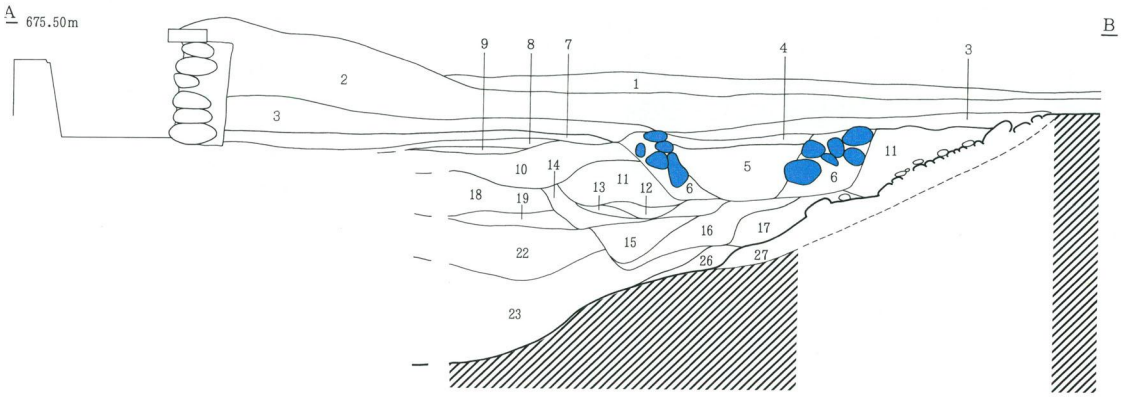
トレンチＢ

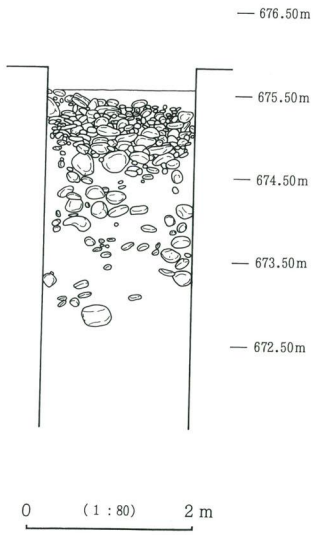


トレンチＢ礫検出状況

トレンチＢ土層断面

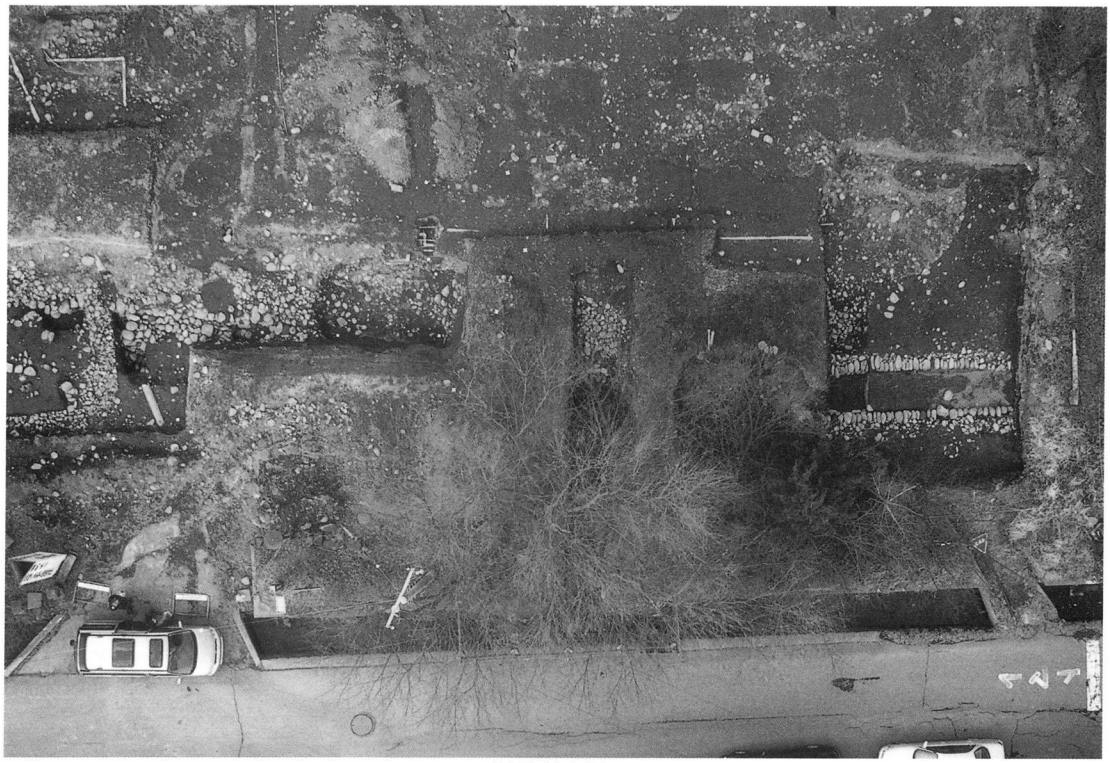






1. 砕　　石
2. 黒褐色土層（10YR2/3）　埋め土。
3. 黒褐色土層（10YR3/2）　埋め土。
4. 黒褐色土層（10YR3/2）　砂層、水路跡覆土。
5. 暗褐色土層（10YR3/3）　砂層、水路跡覆土、陶磁器・ガラス片多含。
6. 灰黄褐色土層（10YR4/2）　水路跡裏込め層。
7. 褐色土層（10YR4/4）　黄褐色砂質土主体、シルトブロック含。
8. 褐灰色土層（10YR4/1）　シルト層。
9. 黒褐色土層（10YR2/2）　１～２㎝大の小礫多含。
10. 黒褐色土層（10YR3/2）　10㎝以下の礫多含。
11. 灰黄褐色土層（10YR4/2）　シルト質層、炭化物わずかに含、砂粒・砂ブロック・鉄分含、小礫少含。
11'. 暗赤褐色土層（5YR3/3）　11層を主体として鉄分多含、小礫含。（トレンチC）
12. 灰黄褐色土層（10YR4/2）　砂礫層、鉄分含み礫は赤褐色化。
13. 黒褐色土層（10YR3/2）　シルト層、砂粒含。
14. 黒褐色土層（10YR3/1）　砂層、砂粒細かい。
15. 黒褐色土層（10YR2/2）　シルト層、礫多含、砂粒含。
16. 黒褐色土層（10YR2/2）　シルト質層、鉄分・砂粒少含。
17. 黒褐色土層（10YR3/1）　シルト層、２～３㎝大の小礫含。
18. 黒褐色土層（10YR2/2）　シルト層、粘性あり、砂粒含。
19. 黒褐色土層（10YR3/1）　砂層、砂粒細かい。
20. 黒褐色土層（10YR2/3）　シルト層、砂粒・砂ブロック少含（トレンチC）。
21. 黒褐色土層（10YR2/2）　砂層、比較的粒子粗い。（トレンチC）
22. 黒色土層（10YR2/1）　シルト層、粘性強、10㎝以下の礫少含。
23. 黒褐色土層（10YR3/1）　シルト層、粘性強、礫はほとんど含まない。
24. 黒褐色土層（10YR3/1）　砂層、砂粒細かい、シルトブロック含。（トレンチC）
25. 黒色土層（10YR2/1）　砂質土、１～５㎝大小礫多含。（トレンチC）
26. 黒褐色土層（10YR2/3）　砂礫層、５㎝以下小礫多含、27層崩落層。
27. 暗褐色土層（10YR3/3）　礫層、鉄分多含。

第11図　トレンチB実測図



南側堀検出状況

調査区南東部分については堀のコーナー部分を確認するためプランの検出を行い、一部西側について掘り下げを行った。この部分は南側堀部の東端部に位置しており、トレンチＢと同様に礫が敷き詰められた状態が確認されたことから、主郭の正面にあたる南側堀部の内周部分に礫を敷き詰めたものと考えられるが、部分的な調査であるため範囲については不明である。

また、トレンチＢの土層断面によって確認された水路跡が堀内を東西に走る形で検出された。一部底面まで掘り下げを行ったが、北側２段・南側３段の石積みによって設けられ幅約1.3m、深さ約60mを測り、覆土である砂層中からはトレンチＢと同様に陶磁器・ガラス等が多量に出土した。

東側に設定したトレンチＡ・Ｃにおいてもトレンチ Ｂと同様に黒色の水性堆積層がみられ堀の存在が確認されたが立ち上がりの状況が各々異なることが判明した。

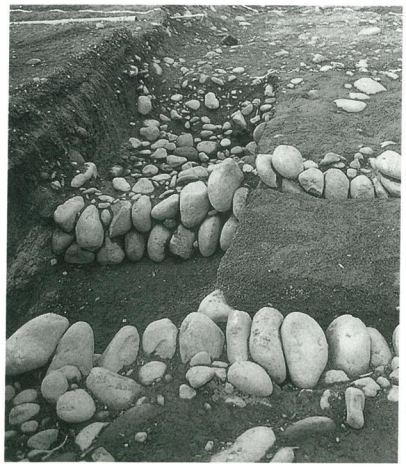
トレンチＡでは虎口部分と同様に40㎝前後の河原石を用いて石の小面を堀面とした石積みと背後の裏込め石が検出されたが、東側に存在する現水路との幅が狭く、さらに水路からの水の流入が激しいことから石積みの存在を確認したのみで覆土の掘り下げには至らなかった。また、トレンチＣでは旧野沢会館の基礎埋設による撹乱のため立ち上がり部が明確ではないが、確認できた範囲ではトレンチＡにおいてみられた石積みやトレンチＢのような礫の敷設は行われていない。

今回の調査で南側及び東側での堀の存在が明らかになったものの、周囲に用水路・道路が巡っており用地の関係により部分的な調査であることから、堀の外周について確認するまでには至らず堀幅・構造等については不明であるが、部分的にではあるが堀のプランが確認できたことは多大な成果を得ることができたものと考えられる。

堀覆土については当時の古環境についての情報を得ることを目的として珪藻分析・花粉分析を行った。その結果、覆土上層である18層・19層・20層にマツ属の割合が高いのに比べて、下層である22層・23層ではマツの増加が顕著ではなく、北信地域での傾向からマツの増加が近世以降と考えると堀内の下層にあたる層位は堀が機能していた戦国時代から中世頃の堆積物と考えられる。との所見を得ている。

詳細は付編「野沢館跡Ⅳ自然化学分析業務委託報告」を参照されたい。

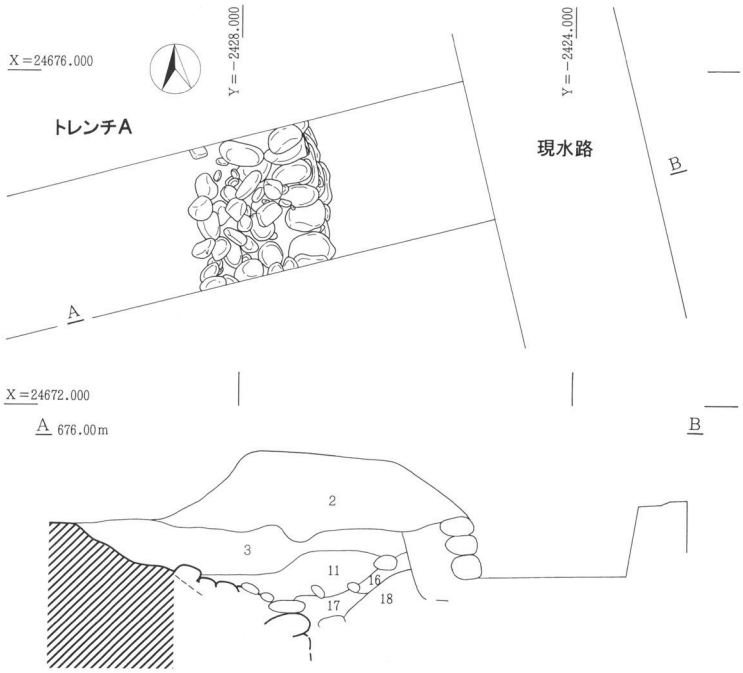
第12図　堀プラン確認図



水路跡石積み

水路跡検出状況

トレンチA礫検出状況



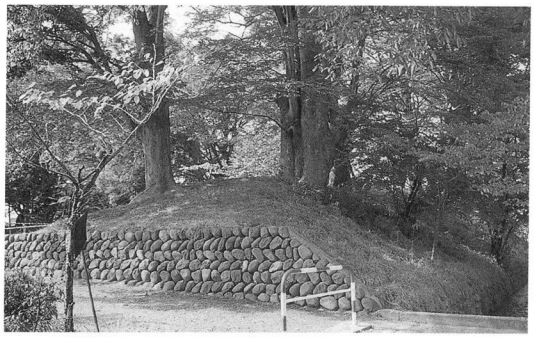
第13図　トレンチA・C実測図

第４節　東側土塁の一部切断調査

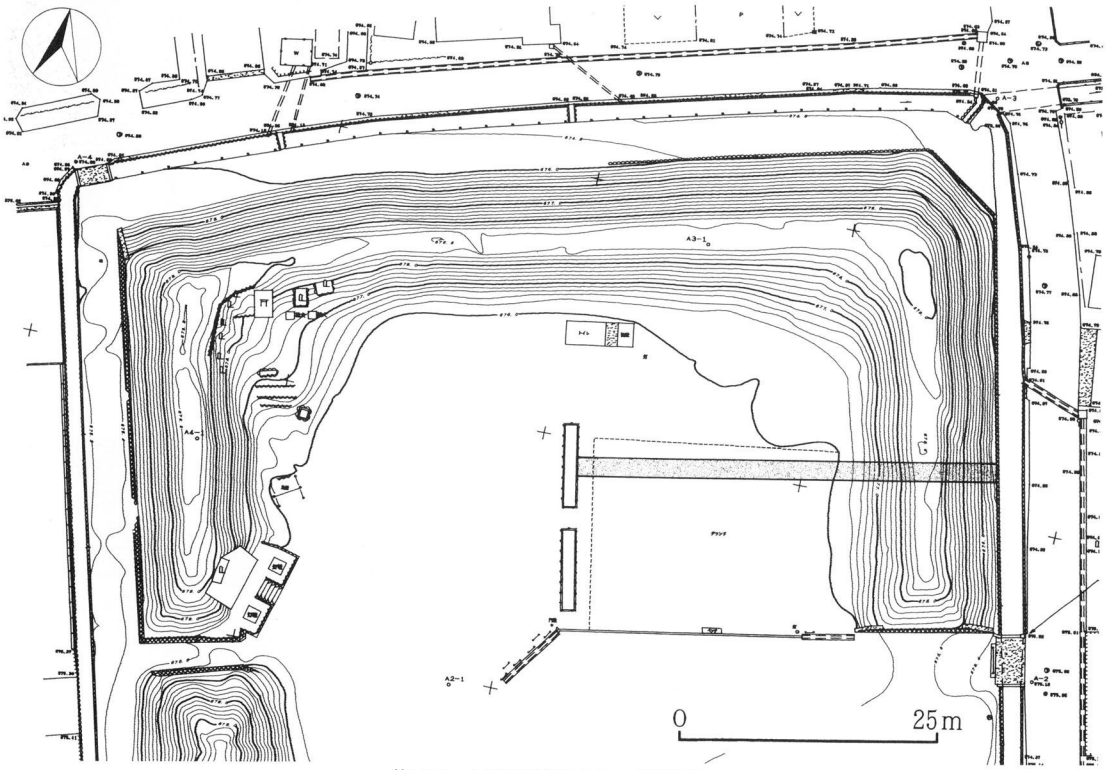
現存する土塁について規模・構築過程を把握することを目的として東側土塁の一部切断調査を行った。現状の土塁は調査区の南側及び東側の南半部は既に削平されており旧状を留めていないが、東の北半部と西側・北側には現在も土塁が巡り、この土塁の上をはじめ周囲には欅の大木が茂っている。現存する土塁の規模は基底部幅13m、上面幅２mで、高さは土塁内側の地表面から３mを測るが、昭和52年度から53年度にかけて補修工事が行われている。

調査は東側に現存する土塁のほぼ中央付近で欅・桜の木を避け、幅２mのトレンチを設定して土塁の切断調査を行った。また、遺物の出土層位を把握するため表土以外の掘削作業はすべて手作業で行った。

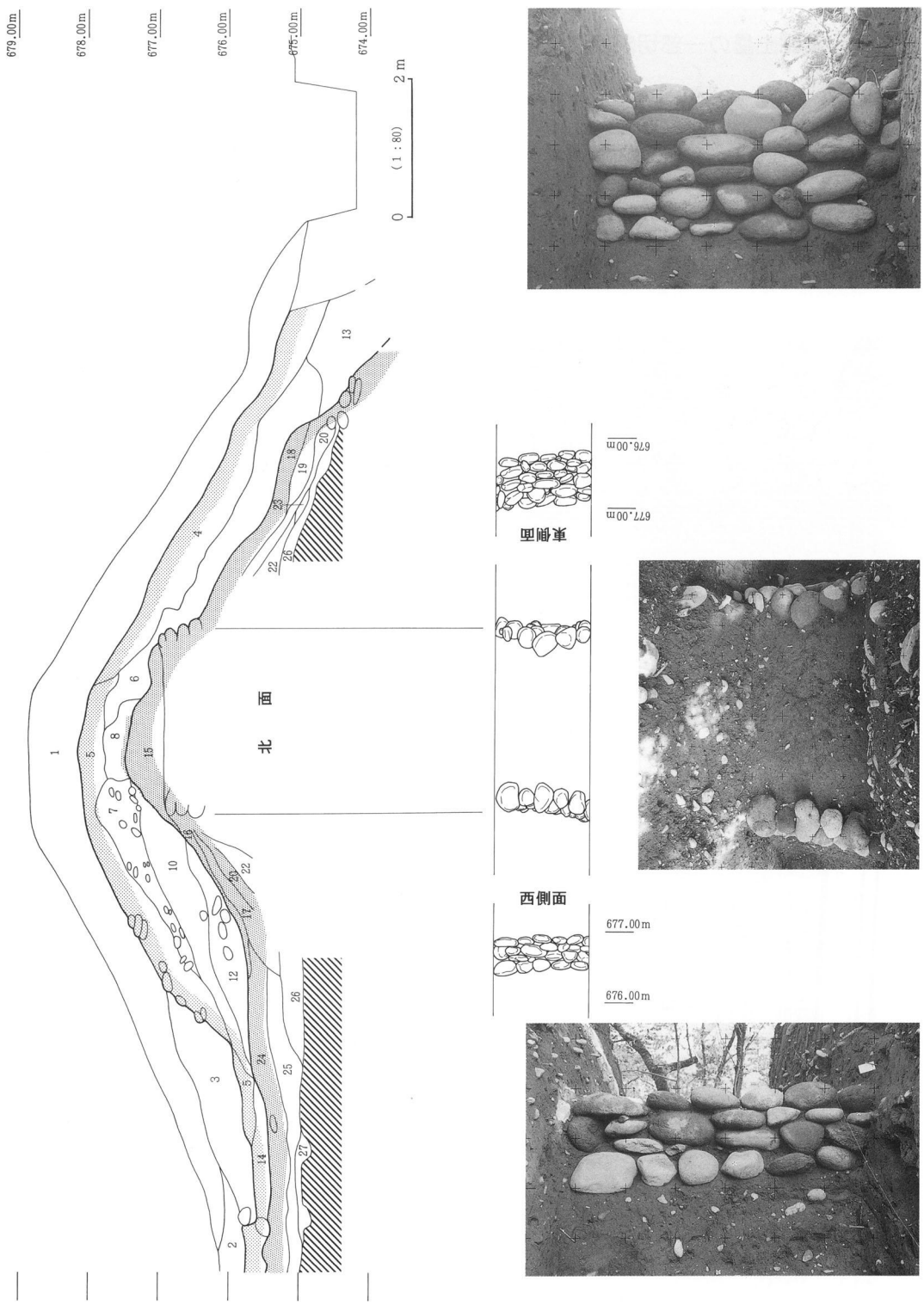
掘り下げ段階で土塁のほぼ中央、頂部から1.9m下より東側（外側）６段、西側（内側）４段の石積みが検出された。土塁の構築段階を考える上で基礎的な部分であると考えられることから、この部分については保存することとして両側を地山まで掘り下げを行い土層の観察を行った。



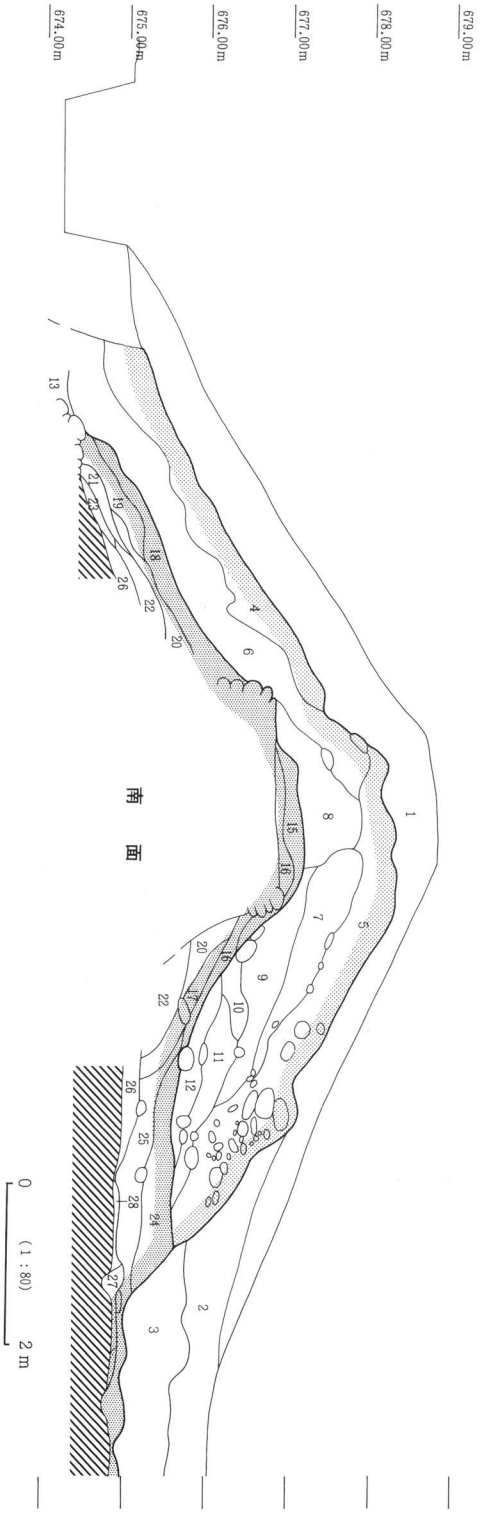
東側土塁（調査前）



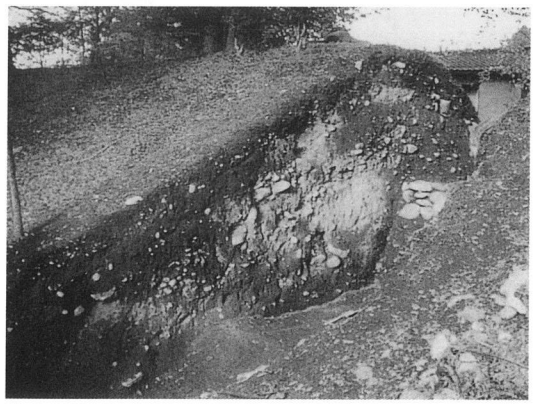
第14図　土塁及び郭内トレンチ設定図



第15図　土塁土層断面図（1）



1. 黒 褐 色 土 層 （10YR3/2）
土墨補修工事の際の盛土。
2. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
郭内表土。
3. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
撹乱。
4. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
シルト質土、しまり・粘性強。
5. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
大小の礫を多量に含み、裾部に大型の礫がみられる。
しまり・粘性ややあり。
6. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
4層に比べ色調が暗く、キメ細かいシルト質土、
少量の小礫含む、しまり・粘性弱。
7. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
小礫を多量に含み、粘質土混在、粘性あり。
8. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
小～中型の礫を含む、しまり・粘性ややあり。
9. にぶい黄褐色土層 （10YR4/3）
粘質土、少量の小礫含む、しまり・粘性強。
10. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
砂質、小礫を多量に含む、しまり・粘性なし。
11. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
小礫・シルト質土を含む、しまり・粘性あり。
12. 褐 色 土 層 （10YR4/4）
シルト質土、粘質土含む、しまり・粘性ややあり。
13. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
少量の小礫含む、しまりあり。
14. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
炭化物・小礫を含む、しまり強。
15. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
小～中型の礫を多量に含む、しまり・粘性あり。
16. 黒 褐 色 土 層 （10YR3/2）
小礫を含む、しまり・粘性弱。
17. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
小礫・シルトブロックを含む、しまり・粘性あり。
18. にぶい黄褐色土層 （10YR4/3）
小礫多量に含む、しまりあり。
19. 褐 色 土 層 （10YR4/4）
砂質、小～中型の礫を多量に含む、しまりあり。
20. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
少量の小礫・シルトブロックを含む、しまりあり。
21. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
小礫を多量に含む、しまり強。
22. 黒 褐 色 土 層 （10YR2/3）
少量の小礫・シルトブロックを含む、しまり・粘性あり。
23. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/3）
地山のシルトブロックを含む、しまりあり。
24. 黒 褐 色 土 層 （10YR2/3）
炭化物・小礫を含む、しまり強。
25. 黒 褐 色 土 層 （10YR3/2）
炭化物・小礫を含む、しまり強。
26. 暗 褐 色 土 層 （10YR3/4）
炭化物を少量含み、小礫を含む、しまりあり。
27. 黒 褐 色 土 層 （10YR3/2）
シルトブロック含む、しまりあり。
28. 褐 色 土 層 （10YR4/4）
シルト質土。



第16図　土墨土層断面図（2）

第17図　主部の断面礫式図（1：200）

土塁内の土層は28層に分層されるが、このうち最上層である１層は土塁補修工事の際の盛土であり、２層は郭内の表土、土塁の西側（内側）にみられる３層は撹乱層である。

土塁構築土は４層から23層及び26層であるが、土層断面の観察により４層から13層の上層土塁と15層から23層・26層までの下層土塁の大きく二つの構築方法に分かれることが判明した。

まず下層土塁の構築については地山である黄褐色土の上に26層暗褐色土を20～30㎝ 程度埋め戻した後、これを基礎として小礫を含む暗褐色土を主体とした15層から23層を盛り上げて行われている。石積みは現存する下層土塁の頂部の約50㎝ 下から幅約２ｍ、土塁の東側（外側）で６段、西側（外側）で４段が検出された。高さは各々 80㎝・50㎝ を測り、川原石の自然石が用いられ、石の長辺を控えとして小面を石壁面としてほぼ直立した状態で積まれている。

次に上層土塁の構築は下層土塁全体を被った状態で盛り土が行われているが、外側と内側の盛り土に用いられる土に相違がみられる。土塁の外側(東側)では少量の礫を含むものの、シルト質の暗褐色土が用いられているのに対して、内側（西側）では最下層である12層にシルト質の褐色土を用いている他は礫を多量に含む暗褐色土を主体として使用している。

土塁と整地層の関係については、下層土塁の整地層は黒褐色土層である24・25層、上層土塁の整地層は暗褐色土である14層と考えられ、ともに炭化物を含むが、24・25層は土塁構築土である17層の下にはみられず裾部を被った状態で堆積しているのに対して、14層上には上層土塁の最上層である５層が盛られている状況が認められる。

以上から、下層土塁構築段階での郭内の整地は土塁構築後に行われ、上層土塁構築段階ではある程度土塁を構築した後郭内の整地を行い、最後に５層を盛り上げて土塁が完成するという順序で行われたものと推測される。

残存する土塁の規模は、下層土塁が基底部幅7.2m、郭内の整地層（24層）上面からの高さ1.7mを測り、上層土塁は基底部幅11.8m、整地層（14層）上面からの高さ2.5mを計測する。

郭内における整地層と遺構を確認することを目的として土塁の西側にトレンチを延長して掘り下げを行った。その結果、城跡に関連すると考えられる土坑・ピット等が検出されたため、整地層の確認はこれらの遺構を避け部分的に行った。

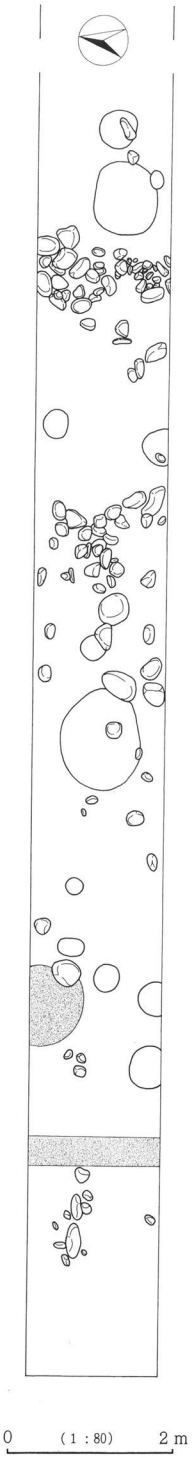
検出された遺構は土坑２基、ピット７基で、いずれも上層土塁の整地層と考えられる14層上面から検出されたものであるが、今回の調査では掘り下げは行わず、遺構の有無を確認するに止めた。

出土遺物には上層土塁の構築土である５層から石臼（第21図27）、６層から土鍋片（第20図19）、７層から常滑の甕片（第20図25－１・２）と石臼（第21図26）が出土しているほか、下層土塁の整地層と考えられる25層から古瀬戸小皿（第20図23）と土師器皿の小片が出土している。また、土塁から西側郭内に延長したトレンチからは土師器皿（第20図１・４・５・11・12・14～16・18）、凹石（第21図29）の他、土鍋片が出土している。

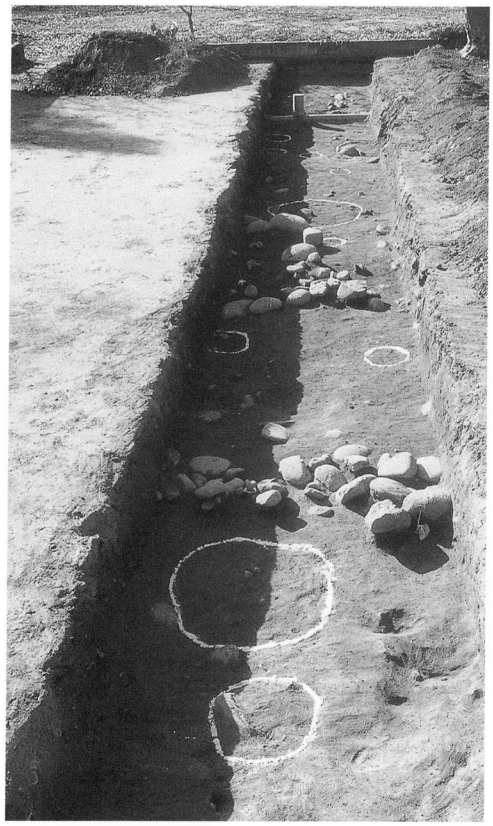
土鍋（19）は口縁部のみの破片であるため全体の器形は不明であるが、口唇端部に面取りを行い平坦面をもたせている。25－１は常滑甕の肩部にあたる破片で、器形は不明であるが推定で最大径90㎝前後を測る大型品である。23はロクロ成形による古瀬戸小皿で、内面のみに施釉される。

土師器皿はいずれも欠損品であり器形・法量の明確なものはないが、ロクロ成形によるものであり、底部には回転糸切り痕が残る。体部は底部から直線的に立ち上がるものが主体的である。

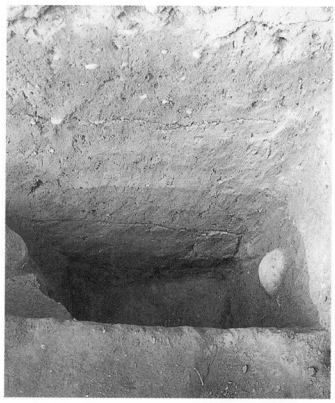
第17図主郭の断面模式図は二度の構築過程が想定される土塁と整地層との関係を模式的に示したものである。

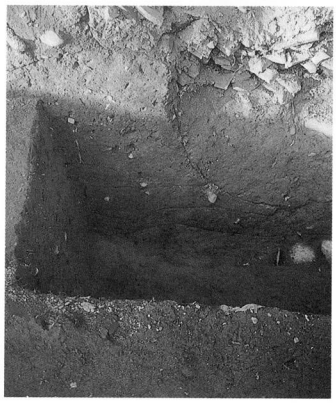


第18図　郭内トレンチ平面図



遺構検出状況





トレンチ土層断面

第５節　郭内の確認調査

今回の調査地は昭和36年に野沢会館が建設された他、城山公園として広く市民に利用されてきた場所であるが、平成13年に行われた野沢会館の移転により新たに城山公園が整備されることとなり、整備に先立って旧野沢会館の建設及び城山公園内に設置されていた四阿・遊具等による郭内の破壊状況の確認を行った。

旧野沢会館は平成13年度に撤去が行われたが基礎部分を残しての撤去であったため、今回は残った基礎部分を撤去した後会館建設による破壊状況の確認調査を行い併せて遺構の有無を確認した。

基礎の撤去は破壊を免れている部分を傷めないように会館建設時に掘削した部分のみを掘り起こして基礎を切断した後に引き抜く方法で行い会館跡地の調査を行った。

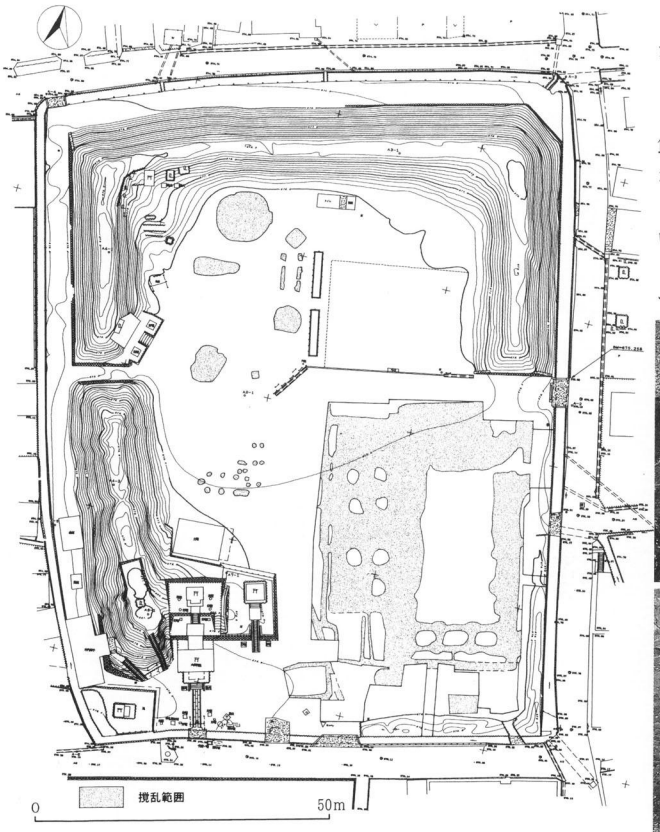
郭内調査前

調査の結果、第19図に示したように建物の東半部はホールであったことから、地下室が設けられていた北側を除いて比較的破壊を免れているものの、西半部については基礎の埋設箇所が多く撹乱の激しい状況が確認された。また、建物周囲においても会館への給排水管等の埋設による撹乱が認められた。本調査区内において遺構の確認を行ったが、遺構及び土塁の痕跡は認められなかった。

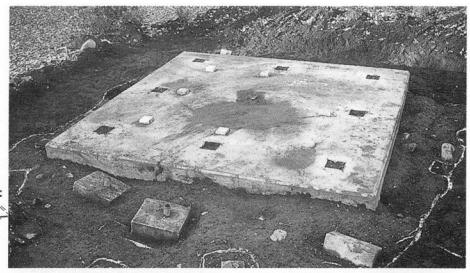
遺物は旧野沢会館建物跡地から出土した土師器皿（第20図３・６～10・13）と石搗臼（第21図28）を図示した。土師器皿はすべてロクロ成形によるもので、３・６・７・13の底部には回転糸切り痕が認められる。

調査区北側は城山公園として利用されていたことから四阿・遊具等が設置されていた。旧野沢会館の建物撤去に併せて基礎部分を残して撤去が行われていたことから、旧野沢会館建物基礎の撤去と同様な方法で行い、設置によって破壊を受けている範囲の確認調査を行った。

調査結果は、第19図郭内確認図に示したとおりである。



第19図　郭内確認図



四阿・遊具基礎

第6節　遺　物

今回行った調査はトレンチによる確認調査であることから、限られた範囲での調査であり出土遺物は少なく、本館跡の時期決定を行うには不充分な資料である。出土遺物には土師器皿・土鍋・陶磁器・石製品・銭貨等があるが、いずれも小破片であり器形・法量等が明確なものは極めて少ない。また、調査段階で打製石斧・耳環等の古代の遺物や近現代の陶器等が出土しているが、ここでは図示するのみに止め城跡に関係するであろうと考えられる中世の遺物についての報告を行いたい。

土師器皿

今回の調査で出土した土師器皿の内第20図に示した18点を図化した。手捏成形のものはなくいずれもロクロ成形によるもので底部に回転糸切り痕を残しているが、欠損品のみであり法量については不明確である。

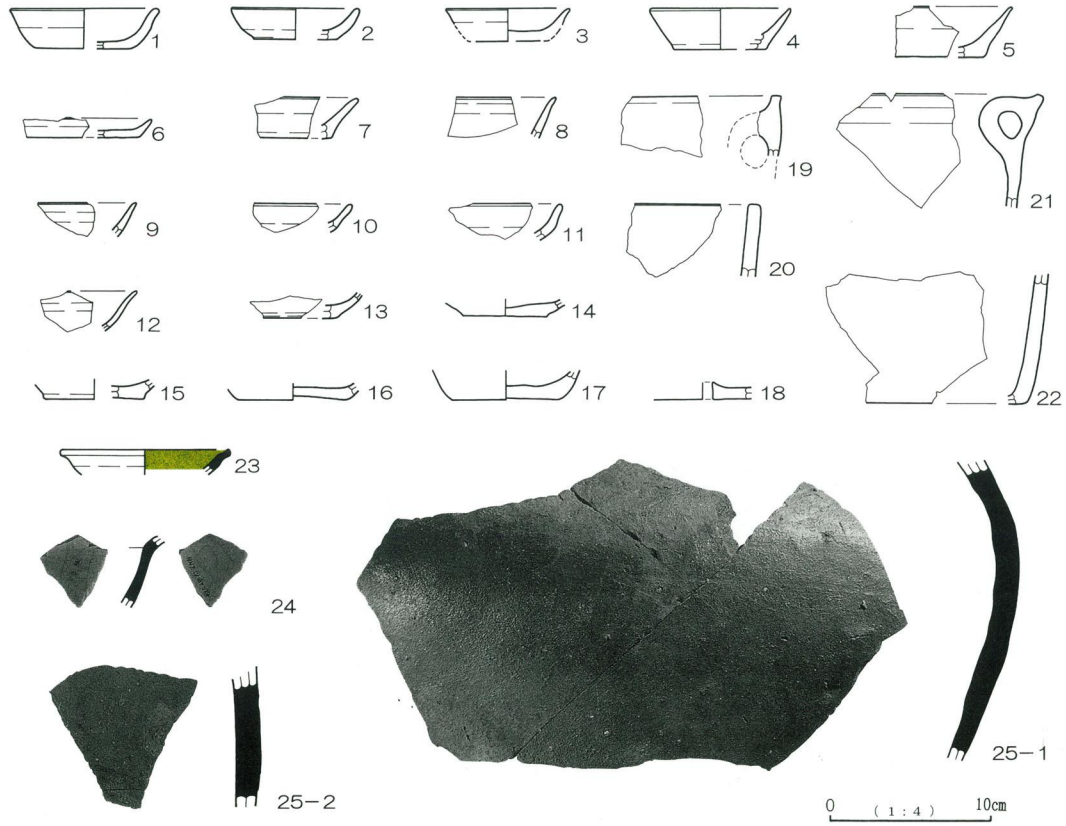
体部は底部からわずかに内彎するものもみられるが、直線的に立ち上がるものが主体的であり、服部氏分類のⅢ群Bにあたるものと考えられ、Ⅵ期（15世紀後半から16世紀代）に位置づけられている。

土　鍋

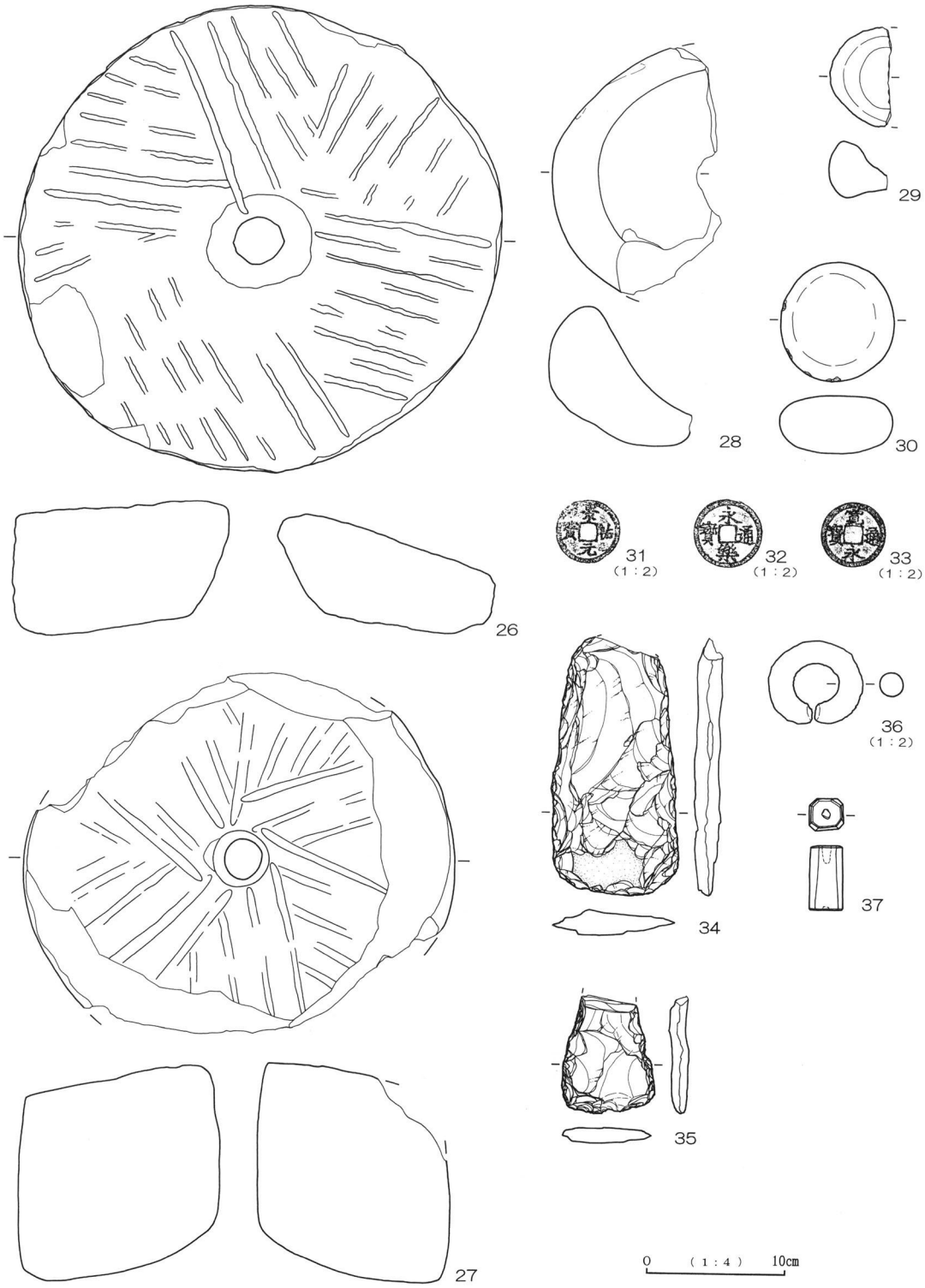
４点を図示したがいずれも小片であり器形・法量ともに不明である。第20図21・22は同一個体と考えられ、体部は底部から直線的に立ち上がり口縁部は「く」の字状に外反する。また、口縁端部には面取りが行われ平坦面をもたせている。野村氏の述べている「Ⅰ類は口辺部を強く「く」の字状に外反させるもので、口辺部内面は凹凸が少なく直線的に開く。」ものに相当し、15世紀前半頃の使用が考えられるとしている。

陶磁器

国内産陶器には古瀬戸小皿（23）と常滑甕（25－1・2）があり、輸入磁器には龍泉窯系と考えられる青磁鉢（24）があるが小片のため器形は不明である。古瀬戸小皿は14世紀代、常滑甕・青磁鉢は15世紀代の製品と考えられる。



第20図　遺物実測図（1）



第21図　遺物実測図（2）

第２表　出土遺物観察表

No.	器　種	法量			成形・調整・文様		色調等	出土位置
		口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	外　面	内　面		
1	土師器皿	(9.2)	(6.0)	2.4	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	7.5YR7/3 にぶい橙色	郭内トレンチ
2	土師器皿	(8.0)	(5.2)	1.9	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	トレンチB
3	土師器皿	(7.6)	－	2.0	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	会館跡地
4	土師器皿	(8.6)	(5.6)	2.5	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	5YR6/4 にぶい橙色	郭内トレンチ
5	土師器皿	－	－	3.1	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	2.5YR6/6 橙色	郭内トレンチ
6	土師器皿	－	－	1.2	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	5YR6/6 橙色	会館跡地
7	土師器皿	－	－	2.5	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	5YR6/6 橙色	会館跡地
8	土師器皿	－	－	〈2.5〉	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/6 橙色	会館跡地
9	土師器皿	－	－	〈2.1〉	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/6 橙色	会館跡地
10	土師器皿	－	－	〈1.7〉	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/6 橙色	会館跡地
11	土師器皿	－	－	〈2.2〉	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR3/3 暗赤褐色	郭内トレンチ
12	土師器皿	－	－	〈2.4〉	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3 浅黄橙色	郭内トレンチ
13	土師器皿	－	－	〈1.3〉	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	10YR6/2 灰黄褐色	会館跡地
14	土師器皿	－	(5.2)	－	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	1OYR7/2 明褐灰色	郭内トレンチ
15	土師器皿	－	(6.2)	〈0.8〉	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	郭内トレンチ
16	土師器皿	－	(6.6)	〈O.6〉	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	10YR1.7/1 黒色	郭内トレンチ
17	土師器皿	－	(6.6)	〈1.8〉	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	トレンチC
18	土師器皿	－	－	－	底部回転糸切り、底部穿孔		2.5YR6/6 橙色	郭内トレンチ
19	土　鍋	－	－	〈3.7〉	ナデ、口唇部面取り	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	土塁トレンチ６層
20	土　鍋	－	－	〈4.4〉	ナデ、口唇部面取り	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	虎口
21	土　鍋	－	－	〈7.0〉	ナデ、口唇部面取り	ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐色	虎口
22	土　鍋	－	－	〈7.9〉	ナデ	ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐色	虎口
23	古瀬戸小皿	(10.2)	－	〈1.5〉	ロクロナデ、14世紀	灰釉	2.5Y5/1 黄灰色	土塁整地層25層
24	青磁鉢	－	－	〈3.9〉	龍泉窯、15世紀		5G7/1 明緑灰色	虎口
25-1	常滑甕	－	－	〈18.2〉	ナデ、15世紀		2.5YR3/3 暗赤褐色	土塁トレンチ７層
25-2	常滑甕	－	－	〈8.7〉	ナデ、15世紀		2.5YR3/3 暗赤褐色	土塁トレンチ７層
26	石臼（下臼）	34.4	－	9.7	６分画		11,570 g	土塁トレンチ７層
27	石臼（下臼）	30.7	－	15.8	６分画		13,580 g	土塁トレンチ５層
28	石搗臼	－	－	8.7			1,400 g	会館跡地
29	凹　石	(7.1)	－	4.1			105 g	郭内トレンチ
30	擦　石	8.6	8.2	4.1			325 g	会館跡地
31	景祐元寶	外径2.34	内径1.96	1.0	初鋳年　景祐元年（1034年）、真書		2.54 g	会館跡地
32	永楽通寶	外径2.51	内径2.10	1.3	初鋳年　永楽六年（1408年）、真書		3.60 g	会館跡地
33	寛永通寶	外径2.35	内径1.93	1.1	古寛永		2.96 g	会館跡地
34	打製石斧	〈18.5〉	9.3	1.8	基部わずかに欠損		390 g	会館跡地
35	打製石斧	〈8.5〉	6.7	1.2	基部欠損		90 g	トレンチB
36	耳　環	3.0	3.4	0.9			24.8 g	会館跡地
37	不明石製品	2.4	2.3	4.6	上下からの穿孔痕あり		55.6 g	郭内トレンチ

第Ⅳ章　調査のまとめ

今回の調査は公園整備に先立ち保存を前提としての調査であり、トレンチによる限られた範囲での調査であることから城跡全体を把握するためには不充分であるが、現段階での調査結果についてふれまとめとしたい。

今回の調査で城郭において最も重要な施設である虎口の存在が明らかになり、さらに部分的にではあるが堀のプランが確認されたことは大きな成果である。

虎口は現在の入口とほぼ同じ南側中央部分から、両側に石積みを設けた幅約３ｍの土橋の存在が確認された。土橋の石積みは堀内周の接続部から東側で1.4ｍ、西側で1.7ｍが検出されたが、南に向かって徐々に崩落している状況が認められた。土橋の構築には堀と土橋の接続部の状況から、主郭の南側に掘削した堀の内周（南面）にほぼ直立した状態で石積みを行った後、礫や土砂によって堀を埋め戻し両側に土留めとして石積みを設けて土橋としたものと考えられる。また、土橋の石積みに用いられたと思われる礫が土橋西側の堀内から崩落した状態で多量に検出されているが、人為的な破壊を受けたものあるいは自然の崩落によるものの両方の可能性が考えられる。

堀は調査区の南及び東側にトレンチ３本を掘り下げるとともに、南東部分でプランの検出を行った。その結果、堀の内周部分が検出され堀の存在が確認されたが、周囲に用水路・道路が巡っていることから堀幅の確認には至らなかった。内周立ち上がり部分の構造については各トレンチによって状況が異なる。トレンチＡでは虎口部分と同様にほぼ直立する石積みが設けられ、トレンチＢでは礫が敷き詰められた状態で緩やかに立ち上がるなど石が多用されているのに対して、トレンチＣでは石の利用は認められなかったことから、主郭の正面にあたる堀の南面に礫を敷き詰めたものと考えられる。また、南面においても虎口部分は石積みによってほぼ直立して立ち上がるのに対して、トレンチＢでは前述したように緩やかに立ち上がる状況がみられたが、部分的な調査であるため範囲については不明である。

次に、土塁の調査では現存する東側土塁の一部切断調査を行い、土塁の規模及び構築過程の把握を行った。現状では北側・西側と東側の北半部が残っており、調査は東側土塁のほぼ中央に幅約２ｍのトレンチを設定して切断調査を行った。また、このトレンチを西側郭内に延長することによって郭内における遺構及び整地層の確認を行った。この調査によって、土塁の構造及び構築過程についてある程度把握することができたことは、堀の存在を確認できたことと共に大きな成果であろう。

まず、構造について特徴的な点は下層土塁の頂部付近両側に設けられた石積みの存在である。この石積みは川原石の自然石を利用して石の小面を壁面とした乱積みであり、土塁の外側で６段（高さ80㎝）、内側で４段（50㎝）の規模で検出された。今回の調査は１箇所のみの切断調査であり、現存する土塁のすべてにこのような石積みが存在しているかどうかについては不明であり、その機能についても今後の検討が必要である。

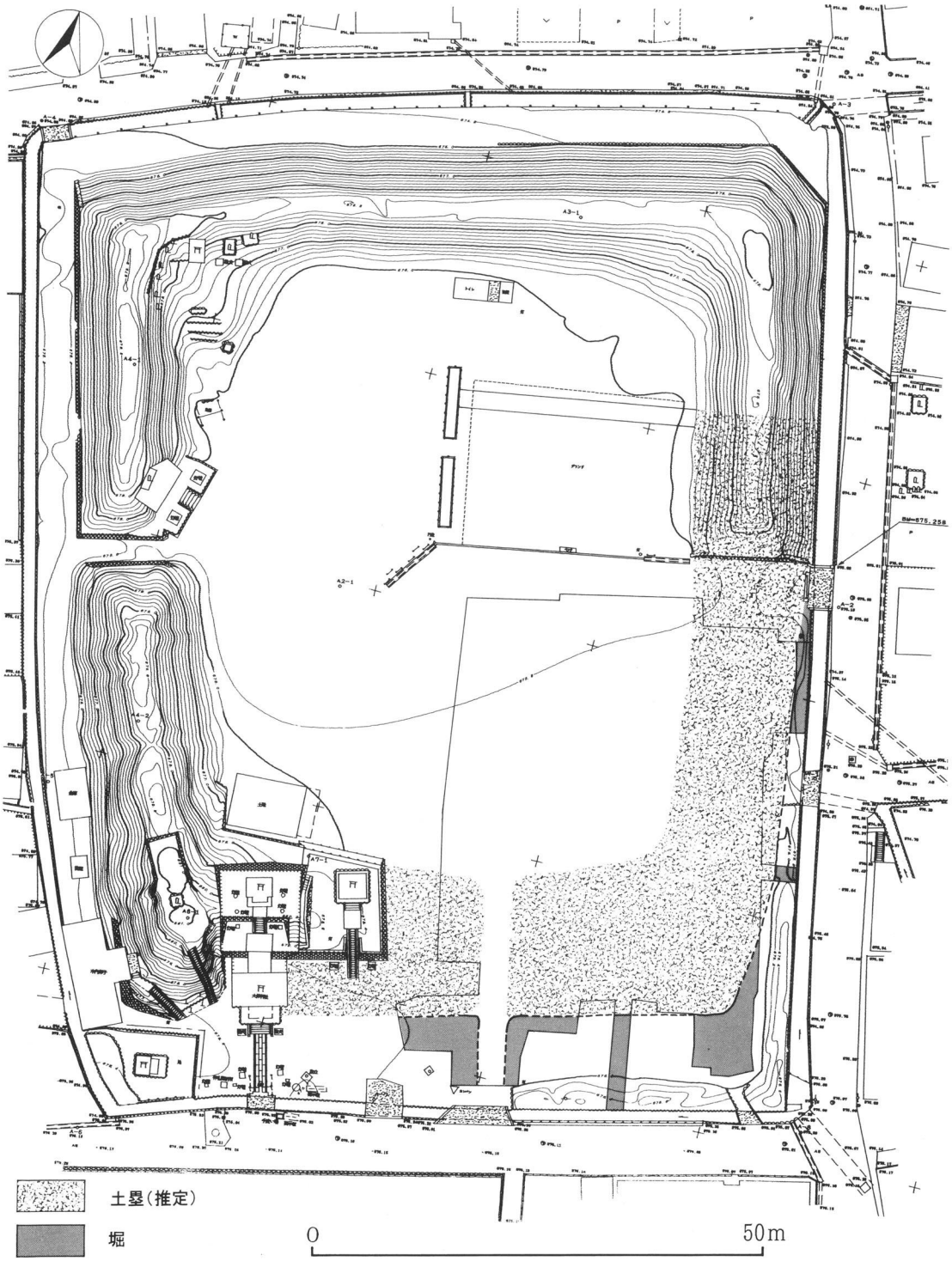
土塁の構築過程については、土層断面により大きく二つの構築方法に分かれることが判明し、二段階にわたって土塁の構築が行われているものと考えられる。土塁構築土と裾部の整地層の堆積状況から、下層土塁の構築段階では土塁の構築後に郭内の整地が行われ、次に下層土塁全体を被うように上層土塁が構築されるが、この際の整地は土塁の構築と同時に行われたものと推測される。

土塁の構築された時期については、上層土塁の構築土である７層から出土した常滑甕片（第20図25－１・２）と郭内に設定したトレンチから出土した土師器皿などの極めて少ない出土遺物から推測すると、15世紀～16世紀代に現在みられるような上層土塁の構築が行われたものと考えられるが、下層土塁との関係については時期差によるものか構築段階の差によるものであるのかは判然としない。なお、今回の調査では鎌倉期の館に関わると考えられる遺物は出土していない。

第22図は今回の調査によって確認された堀のプランと推定による土塁の範囲を示したものである。郭内の規模は南北約67ｍで、東西は北側で約55ｍ、南側で約47ｍと南に向かって幅を狭めている。この状況は西側に残っている土塁からも窺うことができる。

以上、今回の調査によって現段階で考えられる点について簡単にまとめを行ったが、本城跡は今も良好な状態で土塁を残している極めて重要な城跡であり、今回の調査が史跡保護の一助となることを願って結びとしたい。

最後に、調査にあたっては地元の方々をはじめ多くの皆さんのご指導・ご協力をいただき、特に長野県埋蔵文化財センター河西克造氏には調査中何度も現場に足を運んでいただき大変なご足労をおかけしました。この場をお借りして心から感謝申し上げます。



第22図　土塁範囲推定図

引用参考文献

北垣聰一郎　2000「わが国における伝統的石積み技術とその課題」『東大阪短期大学研究紀要』

服部　実喜　1984「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置」『神奈川考古　第19号』

中野市教育委員会　1993『高梨氏館跡』

箕輪町教育委員会　2001『上ノ平城跡』

佐久市教育委員会　1986『大井城跡（黒岩城跡）』
1991『金井城跡』
1999『観音堂遺跡』
2000『薬師寺遺跡』
2002『野沢館跡Ⅲ』

佐久市志刊行会　1988『佐久市志　自然編』
1993『佐久市志　歴史編（二）　中世』

長野県教育委員会　1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』

長野県埋蔵文化財センター　1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』

伴野氏館跡保存会　1972『資料第一　伴野氏館跡来歴　伴野氏について』

付　編

戦国期の野沢館跡－構造と変遷－

長野県埋蔵文化財センター
河西　克造

１．はじめに

佐久市野沢にある野沢館跡（県史跡伴野城跡）は、市街地にも関わらず土塁が良好に残存しており、堀跡に流れる水路とともに中世的景観を今に残している貴重な遺跡である。中世信濃の館・屋敷を考えるために、中野市高梨氏館跡とともにここに足を運んだ研究者諸氏は多い思われる。

野沢館跡（註１）は、『一遍上人絵伝』に「伴野の市」が描写されている関係で、今まで文献史学の研究対象として扱われ、論じられてきた。今回の公園整備に伴う発掘は、野沢館跡に初めて考古学的なメスが入ったことと、考古資料の分析・検討でより遺跡の実態解明に迫ることが可能となったことで非常に意義深いことである。

筆者は、この貴重な発掘を実見する機会に恵まれた。調査は館を構成する重要な要素（施設）にトレンチを入れたものであったが、遺跡の構造や存続時期を考える上で興味深い資料が得られている。発掘成果の詳細は第Ⅲ章で報告されているため、ここでは館の全体像を捉えて発掘資料の解釈を試みたい。

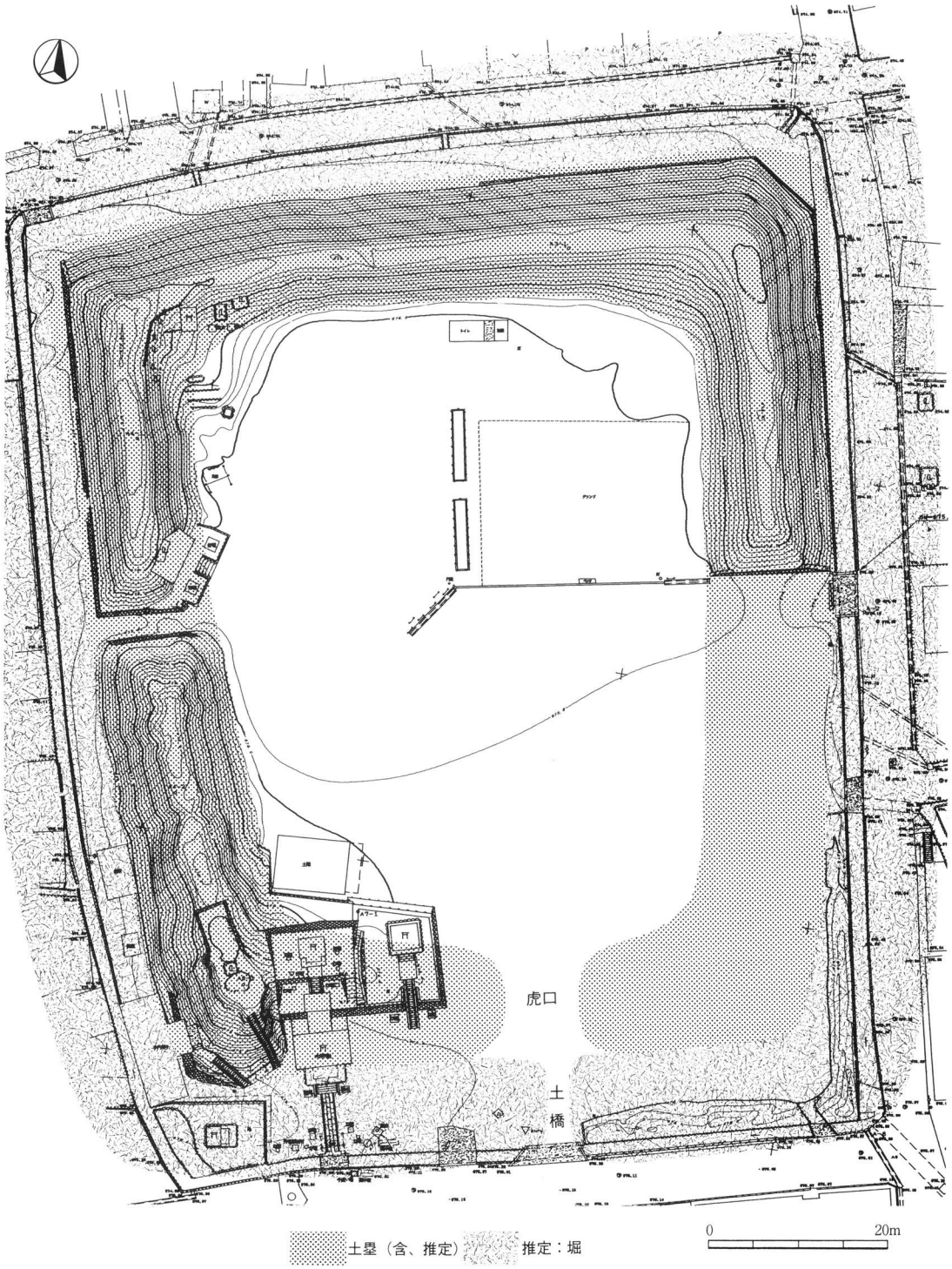
県史跡の関係で発掘範囲や掘り下げ深度などに制限があり、資料に一定の限界性がある。今回の調査では野沢館跡のほんの一端を垣間見ることが出来たに過ぎないため、本稿は遺跡を考える上でのひとつの試論と理解して頂きたい。なお、前項（本文第Ⅲ章）の内容と一部重複することを前記することをご了承願いたい。

２．現況遺構－プランとその年代観－

野沢館跡は主軸が14°程西に振っているもののほぼ南北に長軸をもつ方形プランを呈する。現在、旧野沢会館建設地の南東隅一帯を除き良好に土塁が残り、土塁外側の堀跡推定地に水路が巡っている（本文第７図）。土塁の規模は、細部については場所によって異なりがあるものの、裾部から頂部まで約３ｍ、基底部幅約13ｍ、頂部幅約２ｍと大規模なものである。ただし、昭和50年代に補修工事がされており、土塁の水路側裾部にある石積みは土塁を削って設置されているため（註２）、現在目にする土塁は厳密な意味で野沢館跡の廃城時の規模を示していない。土塁外側を巡る堀は、現状では詳細な規模・形状は不明である。現状と地籍図（旧公図）との照合で、現水路と道路を加えた部分が堀跡と推定されるが、特に東側は道路外側の宅地まで堀が広がっていた可能性がある。

野沢館跡は大規模な土塁と堀に囲まれた方形館である。現在大伴神社がある南西隅は、北側から続く土塁が本殿付近で東に屈曲し本殿東側でほぼ垂直にカットされた形となっている。1830年代（天保年間）の作とされる「野澤八景」と題した絵図には（９頁に収録）、野沢館跡の残存する土塁とともに土塁南西隅に大伴神社が描かれており、現状と絵図の照合から、大伴神社は土塁屈曲部から土塁開口部にかけた場所に鎮座していることが判明する。

館内部（平坦部）は、大伴神社背後を南側土塁（註３）の裾部とし、現在土塁が残存しない南東側にも北側と同規模の土塁が存在したとすると、長辺約67ｍ、短辺約54ｍ、約3,600㎡規模であることが分かる。土塁の四隅を計測すると、北西隅－北東隅の距離は約55ｍ、南西隅－南東隅の距離は推定で約46ｍである。東土塁と西土塁は南側出入口（虎口）に向かい狭まる形状を示しており、野沢館跡は北辺が長辺となる若干逆台形に近いプランである（付編第１図）。



付編第１図　野沢館跡（主郭）想定図（現況測量図に加筆）

館の主要虎口は南面の中央部にある。そのほかにも虎口が存在したものと思われるが、地籍図では判読できず不明である。なお、現在東側土塁中央部と西側土塁中央部が分断されているが、地籍図では分筆されておらず、開口部縁辺の石垣は明らかに新しいものであることから、後世に通路設置のため開削されたものと思われる。

地表面観察で確認される現況遺構は、いつ頃構築されたのであろうか。

野沢館跡は基底部幅約12m、高さ約2.5m（Ⅱ期土塁を計測）規模の土塁と、推定幅10～15mで深さ約３m（南堀を計測）規模の堀で構成されている。土塁と堀の同時期性の問題、特に現況土塁構築段階での堀の規模は不明で推測の域を脱しないが、堀の土層断面で改修痕跡が確認されなかったことから、上記規模の土塁と堀はセットで機能していたと捉えられよう。この形状と規模を東日本の居館跡を分析した橋口定志氏の論考（橋口1999）に依拠して年代を推定すると、15世紀以降の年代を与えることができる。さらに、顕著な方形館の成立時期からすると、下限年代は戦国期（16世紀）まで下がると推測される。野沢館跡の主郭とその外側に想定されている外郭の問題については後述するが、ここでは主郭が戦国期の様相を示していることを捉えておきたい。

３．発掘資料の検討

（１）土塁の構築方法と曲輪内の整地

今回、土塁の断ち割りで構築方法が異なる２種類の土塁が確認されたことは非常に興味深いことである。上層の土塁は拳大～小児頭大の石を多量に含む暗褐色土の盛土を主体とするもので、所謂「掻き上げ土塁」に相当するものである。一方、下層の土塁は、地山のシルト層を基調として土塁の最も芯部分で見られたものである。石の混入はなく、かなり硬化するものである。硬化の状態は、高梨氏館跡の築地塀と酷似しており、西ケ谷氏（西ケ谷1994）と小野氏（小野1992）の分類の「版築状土塁」に相当すると思われる。ただし、下層土塁は地山まで断ち割っていないため構築方法は不明な点がある。

上層土塁と下層土塁の関係については、これを構築過程における段階差と捉えるか、もしくは改修と捉えるかは難しいところである。盛土として用いている土に明瞭な差があり、土塁基底部の塁線が一致しないことから、ここでは改修と理解することとする。以下、下層の叩き締め土塁をⅠ期土塁、上層の掻きあげ土塁をⅡ期土塁と呼称して構築方法を類推することとする。

まずⅠ期土塁であるが、土塁基底部の曲輪側の地山面がほぼ水平であることから、土塁の構築は地山（シルト層）をある程度削平することから開始されたと考えられる。遺構保護の関係で土塁を完全に断ち割っていないため土塁芯部分の地山を掘り残したか不明であるが、ある程度掘り残した可能性はある。地山削平後に発生土を盛土として土塁の盛り上げを始める。トレンチ断面で硬化する盛土が細かく分層されたことは、曲輪側と外側の両側から薄い盛土を何度も盛り上げ、その都度叩き締めたことを示している。版築土塁と同様な硬化状態を示している。叩き締め方法で下端幅約４m、高さ約２mの台形状の盛り上がりをつくり、裾部には盛土で補強する。さらに、高まり頂部に土塁塁線と長辺方向を合わせた状態（石の長辺を控え）で川原石を４～６段程施し、石積み上部に若干土を盛ることで完成している。Ⅰ期土塁は基底部幅約７m、頂部幅約2.4m、地山面から高さ約２m規模である。土塁頂部の石積みについては、土塁機能時に石面が露出していたか否かは重要な問題である。石積みは土塁塁線の両側（曲輪側と外側）に施され、硬化したシルトが石積みを覆っている。シルトは石積み内部にも堆積している。さらに、石はほぼ垂直に積まれ法はほとんどないことから、Ⅰ期土塁が構築された段階で石面は露出していない可能性が高い。中野市高梨氏館跡の土塁断割りで見つかった築地塀と一概に比較はできないが、

この石積みが館を囲む土塁に露出していたとすると、土塁・土塀としての視覚的な効果は十分ある。その点で石積みを内部充填の施設と解釈できかねる面もあり、最終的な判断は今後の調査・研究に期待したい。

Ⅱ期土塁は、Ⅰ期土塁を被覆する形で存在する。Ⅰ期土塁の曲輪側法面に硬化するシルトを盛り、その上部に川原石を主体とする礫層を盛り上げてつくられている。基底部幅約12m、地山面からの高さ約３m規模の土塁である。曲輪内と土塁部分の地山に顕著な石の混入はないため、Ⅱ期土塁は堀の掘削で発生した礫を盛り上げ、この段階で顕著な土塁と堀のセットが成立したものと推測される。

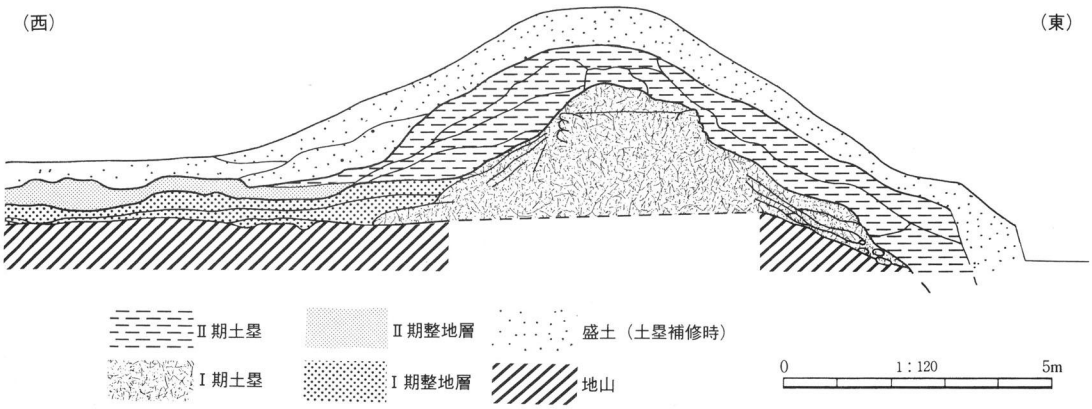
次に曲輪内（註４）の整地であるが、今回の調査では２面の整地層が確認されている。ここでは上層の整地層をⅡ期整地層、下層をⅠ期整地層と呼称する。なお、Ⅰ期整地層の下面が地山である。

トレンチ土層断面に各期の整地と土塁を示したものが付編第２図である。野沢館跡の変遷を類推すると、まず館の縁辺部にⅠ期土塁が構築され、それに伴い曲輪内が整地（Ⅰ期整地層）されている。整地層上面と土塁頂部とは約1.7mを測る。土層断面ではⅠ期土塁→Ⅰ期整地層の堆積を示しているが、両者は同時もしくはあまり時期差が生じない範囲で行われていたものと思われる。次に、曲輪内の整地（Ⅱ期整地層）と大規模な堀の掘削が行われる。堀掘削の発生土をⅠ期土塁上部に盛り上げてⅡ期土塁を構築する。Ⅱ期整地層上面と土塁頂部とは約2.5mを測る。土塁は曲輪内の造成に伴い幅広の低土塁→高土塁へ変遷している。

次に出土遺物から造成時期を推測することとする。

遺物はⅡ期土塁から15世紀代の内耳土器、15世紀代の常滑の甕、石臼、Ⅰ期土塁（整地層）から14世紀の古瀬戸小皿と15世紀～16世紀と思われるカワラケ、曲輪内トレンチから15世紀後半～16世紀のカワラケが出土している。曲輪内は表土・盛土直下がⅡ期整地層で、トレンチ掘削はⅡ期整地層上面でとめているため、出土遺物は基本的にⅡ期整地層に伴うものと考えられる。曲輪内から15世紀後半以降の遺物が出土しており、土塁内からは若干古い遺物が出土している。曲輪内と土塁とで出土遺物の様相が若干異なっている。

これら僅かな出土遺物から土塁の時期を捉えることは極めて難しいが、遺物の下限年代を根拠にするとⅠ期・Ⅱ期とも15世紀以降の年代を与えることができ、戦国期（16世紀）に入る可能性もある。



付編第２図　土塁と整地層の模式図

（2）南側出入口ー石積みを伴う土橋の構造とその破壊ー

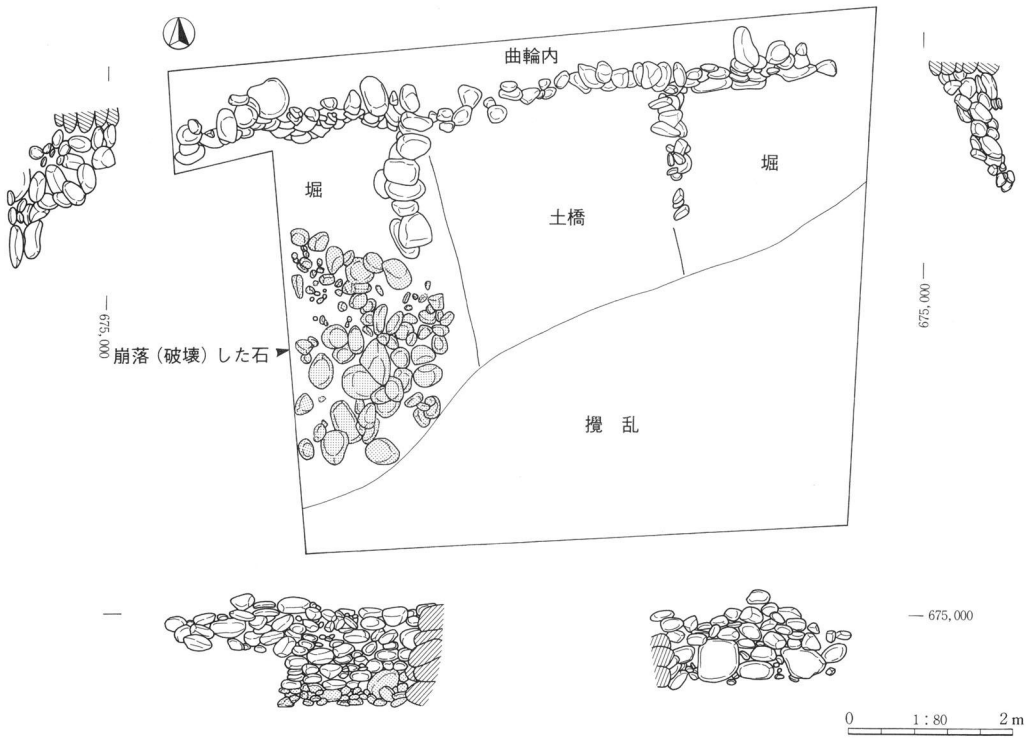
野沢館跡の出入口部については、南面の存在が想定されていたが、詳細な位置と構造は全く不明であった。今回、南側堀中央部で見つかった土橋は館の構造を考える上で重要な資料である。

土橋は約３ｍ幅で、堀と直交方向にのびる。調査区南側は攪乱が及び、さらに現水路と道路部分は未調査のため規模（長さ）は不明である。しかし、地籍図（本文第６図）で分筆されている土橋部分と現地の照合から類推すると、10～15m程の長さが想定され、南側堀の南側縁辺から曲輪内にかけて館と同一主軸で一直線にのびていたと考えられる。この主要虎口は土橋と土塁開口部を通り曲輪に入る形態で、調査で確認された堀の南東隅プランと想定南土塁塁線と一致することから、虎口形態は折れのない平虎口であったと考えられる。

土橋の特徴として、側面に石積みを伴うことがある（第３図）。土橋側面の石積みは、堀南面の法面に構築されている石積みと接している。堀の石積みは石の長辺を控えとして積まれている一方、土橋は石の短辺を控えとして積まれており、石積み方法に異なりが見られる。土橋石積みと堀石積みの関係については、堀石積みは土橋内部に入り込んでおり、法面に連続して石積みが施されていることから、堀石積みが完成した後に土橋を構築し、側面に石積みを施したことが判明する。土橋の東側に掘削したトレンチによると、堀は約３ｍの深さであったことが推定され、石混じりの土を他から運んできて構築したものと考えられるが、堀掘削時に土橋部分の地山を掘り残したか否かは不明である。

県内で土橋側面に石積みを施した事例として、中野市高梨氏館跡と高森町松岡城跡がある。

高梨氏館跡の土橋（西面北入口）は、長さ約９ｍ、幅約３ｍ、松岡城跡の土橋は長さ約3.6m、幅約４



付編第３図　南側出入口部（土橋）平面・立面図

m規模で、幅はほぼ野沢館跡と同規模である。両遺跡とも主要虎口前方の土橋側面に石積みが施されている点では共通する。一方、相違点として両遺跡の石積みは石の長辺を控えとして積まれていることと、高梨氏館跡では土橋と接続する堀法面に石積みがないこと、松岡城跡では曲輪と反対側の土橋接続部の堀法面に石積みがあることがあげられる。石積みの方法については、高梨氏館跡・松岡城跡とも土橋を断ち割っていないため推測の域を脱しないが、報文を見る限り、地山掘り残しの土橋である可能性が高く、石の長短どちらを控えとして積むかは、土橋の構築方法に起因するものと考えられよう。土橋接続部に限らず、城郭もしくは館の表面に当たる堀法面にほぼ垂直に石積みを施す例は、県内で皆無であろう。石積みは、その積み方から防御的要素のみならず、視角的要素を具備していたとも考えられる。

次に、土橋石積みの検出状況について触れておきたい。

土橋石積みは、堀石積みと接する部分を中心に良好に残存する一方、土橋南西側の石積みは裏込め石とともに堀側に崩れており、堀堆積層の上に散乱する状態を示していた（付編第３図のアミ掛け部分）。これを人為的行為、自然的要因のどちらに起因するかの峻別が難しいところであるが、小児頭大をはるかに超える石積みの石と裏込め石が自然的要因で崩落することは考えにくく、ここでは人為的行為でなされた破壊痕跡と理解することとする。

石積みはその出土状態から、土橋側から堀側に向かい崩されており、城の破壊、すなわち「破却」を示すものと思われる。土橋南側には攪乱が及んでいるが、土橋自体に手を加えた痕跡がないことから、破壊は石積みを崩すことが目的であったと考えられる。

県内で破壊痕跡が確認された遺跡として上伊那郡箕輪町上ノ平城跡がある。主郭の調査で推定土塁開口部幅約３ｍの平虎口と門（礎石建物）が見つかっており、土塁開口部に小児頭大～人頭大の多量の礫が投棄されている状況が確認された。礫の投棄で虎口をふさいでおり、虎口・石垣・曲輪縁辺など城郭を構成する主要な施設を壊すことが城の破壊を意味する近年の研究成果によると、主郭虎口を壊した上ノ平城跡と土橋の石積みを壊した野沢館跡は、「破却」行為を受けたものと解釈することができよう。しかし、今回は調査範囲や調査深度に限界があるため、野沢館跡における破壊の範囲や方法については今後周辺での調査や類例の増加を待って充分検討する必要がある。

この破壊時期であるが、堀に崩れた石は現地表から約１ｍ下位の場所に広がっており、石の下層には堀の覆土が堆積している。土橋の東側に掘削したトレンチでは、現地表から約３ｍ下位に堀底が確認されており、堀全体が約３ｍの深さであったとすると、堀が1.5～２ｍ程埋まり、土橋が約１ｍの高まりとなった状態で石積みを破壊していることとなる。破壊は堀の埋没過程で行われている。

（３）堀の構造

南側堀トレンチ（トレンチＢ）では、確認面から堀底まで約３ｍを測る堀が確認された。堀は確認面より約2.2m下まで緩やかに傾斜しほぼ平坦な堀底付近は急傾斜となる堀で、斜面途中に傾斜変換点がある中世の城で普遍的に見られる形状（中井1988）のものである。また、立ち上がり部分では礫が敷き詰められており、土塁周囲には、このような堀が巡っていたものと考えられる。堀の時期については、トレンチでは堀の南側の立ち上がりが確認できておらず、立ち上がりは現水路もしくは道路直下までのびる可能性が高いため推定の域を脱しないが、土塁盛土の関係から類推すると、Ⅱ期土塁構築段階で掘削され、土層断面で明確な改修痕跡が認められなかったことから、先行する堀や埋没過程における再利用がなかったものと言える。出土したカワラケは出土層位が不明であるが、カワラケの時期と堀機能時とはあまり時期差がないと考えることもできよう。なお、南側堀は、土橋接続部の表面中央にほぼ垂直の

石積みがある一方、トレンチB付近の堀法面は緩やかな傾斜を示しており、法面の傾斜と石積みの方法で明確な差異がある。攪乱が著しいため今回の発掘では明らかにできなかったが、土橋とトレンチBの中間で堀の傾斜が変わっている可能性がある。

野沢館跡においては、館の出入口部付近の堀に、長辺を控えとしてほぼ垂直に石積みが施されていることが特徴である。

（4）出土遺物について

今回の調査では、カワラケ・内耳土器・古瀬戸製品・常滑製品・青磁・石臼などが出土した。トレンチ調査のため出土量は極めて僅少であるが、カワラケと内耳土器の出土地点は面白いことを示している。

カワラケは出土量の88%が旧野沢会館跡地の調査と曲輪内トレンチから出土している一方、内耳土器はその大半が虎口から出土している。カワラケの出土は曲輪内で「儀礼」・「饗宴」が行われ、器はそこで消費されたことを示している。中野市高梨氏館跡では曲輪内の一角にカワラケが一括廃棄されており、野沢館跡でも廃棄場所が存在すると思われる。内耳土器は曲輪内で使われたものを虎口に廃棄したものと考えられ、曲輪内で煮炊きが行われていたことを示している。

4．考古資料から見た野沢館跡の時期

現況遺構と出土遺物をもとに、野沢館跡の年代を考えることとする。

野沢館跡の最終段階であるが、地表面観察で確認される現況遺構が戦国期の様相を示すこととと、Ⅱ期土塁から口縁部が直立する内耳土器と常滑の甕が出土していることから、16世紀代に比定される。土塁から曲輪内に延長したトレンチはⅡ期整地層上面で調査していることから、トレンチ出土のカワラケをⅡ期整地層に伴う遺物とすると、Ⅱ期整地層が15世紀後半～16世紀代に形成されたと考えられる。最終段階（Ⅱ期）に先行するⅠ期については、Ⅰ期土塁の整地層からカワラケと古瀬戸小皿が出土しており、15世紀後半～16世紀代の年代を与えることができる。

出土したわずかな遺物から野沢館跡の詳細な存続時期と廃城時期を決めることは困難であるが、今回の発掘成果は、①Ⅰ期・Ⅱ期とも曲輪内の整地と土塁構築が戦国期の所産であること、②13世紀以前の遺物はなく、『一遍上人絵伝』が成立した時期に構築された遺構は確認されない、以上の２点を示している。主郭のプラン（方形区画）が14世紀以降に成立したと解釈できる。

5．最終段階の様相ー主郭と外郭ー

野沢館跡の主郭には、全周土塁の外側に水路が巡る。現状と地籍図との照合などから水路を堀跡推定地と理解されており、今回の発掘でこれが証明された。

野沢館跡がある現野沢市街地には、南から北方に水路が流れている（付編第４図）。現道路と水路をもとに外郭が想定され、主郭（註５）と外郭で構成される回字形の館と理解されている（郷道1989）。主郭と郷道氏想定の外郭を地図に表示したのが付編第４図で、図中Ｃが外郭の虎口に想定されている。市街地のため現状で外郭の施設を確認できないが、寛延４年（1751）の「信州佐久郡野沢原両村図」（第５図）に土塁を伴う外郭が描写されており、当時土塁が存在していたか、もしくは外郭の存在が認識されていたと理解できよう。

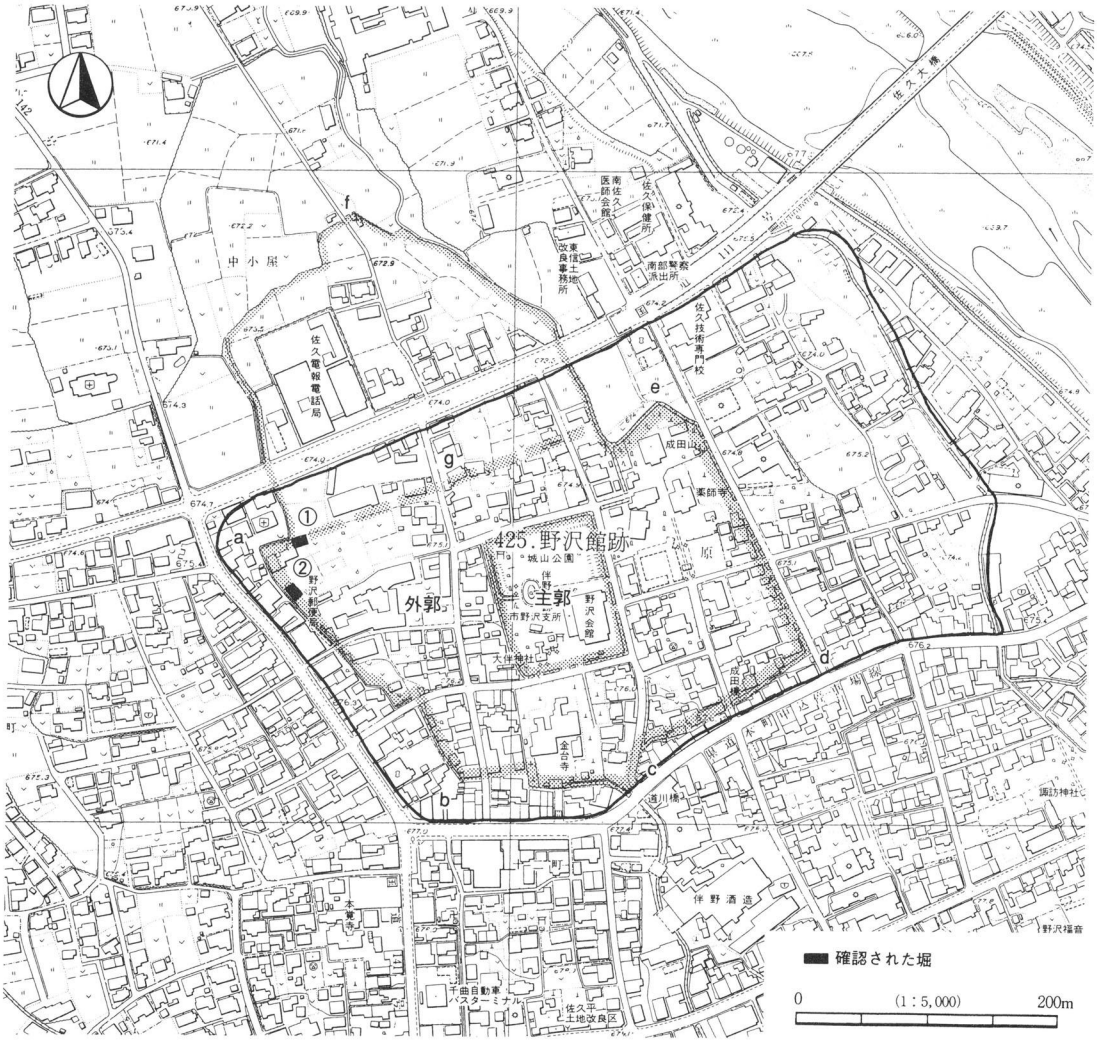
第４図では、主郭が方形を呈する一方、外郭は不整形で随所に折れが見られることが分かる。外郭の範囲については、北半部（ａ・ｆ・ｅ）と南半部（ａ～ｅ）が異なる形状であることから、外郭北限を

ｆ・ｇどちらにするかは見解が分かれている。主郭と外郭については、各々に主軸のずれがあり、このずれは構築時期の差に起因するものと理解されている。野沢館跡は、方形単郭の館（主郭）が先行して構築され、戦国期において主郭の改修とそれに伴い外郭が形成されたと解釈されている（郷道1989）。

今回の発掘は、野沢館跡の変遷を考える上で２つの資料を提示している。

第１は主郭の存続時期をある程度推測可能となったことである。曲輪内の整地を戦国期の所産と捉えられ、14世紀以降の遺物が出土していることから、主郭の成立時期が当該期を遡らない可能性が考えられる。

県内における最近の発掘では、溝（堀）囲いの遺跡が14世紀～15世紀代に成立していることが明らかとなっており（長野県考古学会1998）、野沢館跡（主郭）もこれに属すると思われる。出土遺物が僅少なため、詳細な構築時期と存続時期は今後の調査・研究の進展で明らかになるものと思われる。



付編第４図　主郭・外郭配置図（郷道復元図を地図に表示）

第２は外郭の存在を明らかにしたことである。昨年末の調査で堀と土塁（痕跡）が確認され（註６）、確認地点を第４図に示した。①地点で東西方向、②地点で南北方向にのびる堀が外郭線に想定されている現水路の脇で検出されており、土塁痕跡は堀の曲輪側で見つかっている。土塁の高まりが残存しないため推測を含むが、堀の上端と想定土塁塁線がほぼ接するため、基本的に外郭も主郭と同様、土塁法面がそのまま堀法面につながる構造であったと考えられる。

堀の位置と絵図との照合で外郭の北辺が判明した。「信州佐久郡野沢原両村図」に描かれている北辺の土塁は、東辺屈曲部（ｅ）と両辺屈曲部（ａ）がほぼ直線的につながっており、これと①地点の堀が一致することから、ａ～ｅを結んだライン（図中ｇ）が外郭北辺と捉えられる。

郷道氏は文献史料に登場する「伴野」「野沢」の検討により、野沢館跡に３つの画期があったことを指摘している。第１は弘安８年（1285）の霜月騒動、第２は大井氏、伴野氏、野沢氏の間に紛争が起こった文明11年（1479）～長享３年（1489）頃、第３は甲斐武田氏が佐久へ侵入・支配した天文年間以降である。さらに、郷道氏は佐久が徳川・後北条氏の抗争の場となった天正10年６月以降に折れをもつ外郭が形成されたと推測している（郷道1992）。

主郭と外郭の構築時期と変遷過程については、発掘資料の蓄積で序々に明らかにされると思われる。外郭部分での発掘はほぼ想定プラン通りの外郭線の存在が証明され、主郭と外郭の構築時期を考古資料から言及可能となった意義深いものに間違いない。

６．おわりに

旧市街地の面影を残す野沢も近年は開発行為が及ぶようになり、野沢館跡でも随所で発掘調査が行われるようになった。地下遺構の破壊にとどまらず、土地に刻まれた歴史である景観をも変える現状変更行為が中世的な面影を残している野沢館跡（主郭）に及び、姿が変わってしまうことは中世城館跡を学ぶ一人として残念の一言に尽きる。今回の「まちづくり総合支援事業城山公園整備」もこの行為に帰属するものであることの認識を真摯に受け止めなければならない。

今から約25年程前、初めて野沢館跡を見た際、市街地にも関わらず土塁の良好さに感心したことを鮮明に記憶している。廃城後、今に至るまで土塁を残してきたことの努力・重要さを評価する必要があり、『一遍上人絵伝』での登場と「中世的景観を残す遺跡」が融合した結果、全国的に著名となったことを忘れてはならない。『一遍上人絵伝』と現況遺構には、その年代に大きな隔たりがあるが、現地を歩いた研究者はこの姿から「中世」をイメージしたことに違いない。

今回の発掘では、前項で列記したような貴重な資料を得ることができ、野沢館跡の実態解明に一歩進んだと思われる。本稿は野沢館跡（主郭）の氷山の一角に過ぎない資料を、推測的要素を含有して解釈を試みた。今回の調査は、館を構成する主要な施設（パーツ）に考古学的なメスを入れたに過ぎないため、本稿は可能性を指摘したにとどまるが、遺跡の属性を示すことは出来たと考えられる。

このような成果の反面、県史跡という関係で解明できなかったことも多い。城郭遺跡として、何を捉えることが出来なかったか。史跡として残る遺跡とともに課題を継承することも重要なことである。

今回の発掘は、野沢館跡を考古学的にアプローチする突破口を開いたものと位置付けられ、今後の調査・研究は、今回の成果を補強・修正しつつ進展するものと思われる。考古学・文献史学・城郭史・絵画史など、複眼的視点による各分野の研究が期待されるところである。

（2004年２月11日稿了）

註

1　佐久市野沢の現金台寺北側にある遺跡については、「伴野氏館跡」「野沢城跡」「伴野城跡」「野沢館跡」など複数の呼称名がある。存続時期のなかで館→城へ変遷したとする見解に立つと、戦国期以前と以降とで峻別する必要もあろうが、本稿では、地表面観察で確認される現況遺構を、便宜上「野沢館跡」と統一して呼称する。

2　伴野氏館跡保存会1978ａ・ｂには、水路開削と土塁補修時の写真が掲載されており、工事の際に土塁を削っていることが分かる。

3　本稿では、土塁と堀の各部位を説明する際、便宜上、東側土塁・南側堀などの呼称を用いる。

4　平坦部の呼称であるが、本稿では「くるわ」と訓読みの場合は「曲輪」、「かく」と音読みする場合は「郭」を用いる。

5　本稿では野沢館跡の中核部分を「主郭」と呼称したが、これは郷道氏などが「内郭」と呼称している区画（施設）と同じものである。

6　堀の覆土から近世陶磁器が出土していないため、中世に存続した堀と理解される。現在整理中のため、詳細な堀の存続時期と埋没時期は後日明らかとなると思われる。

引用・参考文献

伴野氏館跡保存会　1978ａ　『資料第６　野沢八幡宮鰐口と猪俣文書』

伴野氏館跡保存会　1978ｂ　『資料第７　伴野氏に関する２・３の考察－特に所領の消長を中心として－』

藤本正行　1987　「中世城郭の構造とその見方」（龍ケ崎市史　別編Ⅱ『龍ケ崎の中世城郭跡－城郭にみる龍ケ崎のあゆみ－』）龍ケ崎市教育委員会

中井　均　1988　「中世城郭の堀について」（『城』№126）関西城郭研究会

栗村知弘　1989　「天正期の根城－破却（城わり）の実態について－」（『八戸博物館　研究紀要』第五号）

郷道哲章　1989　「城館跡の時代的変遷について－信濃の事例をもとに－」（『信濃』第41巻第11号）

橋口定志　1991　「中世居館研究の現状と問題点」帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集『考古学と中世史研究』名著出版

壇原長則・徳竹雅之　『高梨氏館跡発掘調査概報Ⅱ』中野市教育委員会

大越道正ほか　1992　「木村館跡」（『東北横断自動車道遺跡調査報告15』）福島県教育委員会・福島県文化センター

小野義信　1992　「城館跡等に見られる土塁の覚書－菅谷館跡の土塁を中心にして－」（『研究紀要』第14号）埼玉県立歴史博物館

郷道哲章　1992　「郷土史と信濃の中世城館」（『古代・中世の信濃社会』）

木内　寛　1993　「佐久市域の城館」（『佐久市志』歴史編（二）中世）

郷道哲章　1993　「武士の館」（『佐久市志』歴史編（二）中世）

笹本　正治　1993　「戦国大名の支配と佐久」（『佐久市志』歴史編（二）中世）

関孝一・中島庄一・徳竹雅之　『高梨氏館跡－発掘調査報告書－』中野市教育委員会

西ケ谷恭弘　1994　「土塁構築法の編年化試論－関東の発掘成果事例を中心に－」（『城郭史研

究』第14号）
今村善興　1995　『松岡城跡』高森町教育委員会
長野県考古学会　1998　『長野県における中世考古学の諸問題－考古学から見た中世の「館」－』（平成８年度長野県考古学会秋季大会資料）
河西克造　1998　「長野県における中世考古学の諸問題－考古学から見た中世の「館」－内容と雑感」（『信濃考古』№152
北垣聰一郎　1999　「伝統的石積み技法の成立とその変遷－穴太積みの意味するもの－」（橿原考古学研究所紀要『考古學論攷』第22冊）
原　眞　2000　「中世城館跡に見る版築土塁－関東地方の事例を中心として－」（『研究紀要』18号）群馬県埋蔵文化財調査事業団
河西克造　2001　「上ノ平城跡の変遷と虎口の破壊」（『上ノ平城跡』）長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
鋤柄俊夫　2002　「市と館－館の成立とその背景－」（『長野県考古学会誌』99・100号）
河西克造　2004　「城を壊すことの意味」（『信濃』第56巻第２号）

付　編

野沢館跡Ⅳ自然科学分析業務委託報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回、野沢館跡Ⅳにおいて、土塁と堀の調査が行われた。土塁は現在の改修跡の下位に、戦国時代の遺物を伴う改修跡が見られたものの、鎌倉時代の館跡に関する遺物は検出されていない。一方、堀は後代の用水路により削られており、現代の盛土や近・現代の遺物を含む堆積層が認められるが、堀の底部には堀が機能していたときのものと考えられる水成堆積物が検出されている。今回は、堀埋積物の珪藻分析と花粉分析を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

1．試料

堀の調査は、3カ所で行われ、それぞれAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチと付されている。今回は堀の底部を中心として、Aトレンチから3点（A-1～3）、Bトレンチから5点（B-1～5）、Cトレンチから4点（C-1～4）の試料を採取し、分析用試料とした。Aトレンチの、A-1は17層、A-2は18層、A-3は11層に相当し、いずれも少し砂礫が混じる黒褐色～黒色のシルト層である。Bトレンチの、B-1は23層、B-2は22層、B-3は19層、B-4は18層、B-5は16層にあたる。B-1は黒褐色シルト層、B-2は黒色シルト層、B-3が黒褐色の細粒砂層、B-4が黒褐色のシルト層、B-5が黒褐色のシルト質砂である。Cトレンチの、C-1は25層、C-2は23層、C-3は20層、C-4は11層に相当する。C-1は黒色の砂層、C-2は黒褐色のシルト、C-3は黒褐色のシルト、C-4は黒褐色のシルト質土である。

2．分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料は、産出率3.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析については、海水～汽水生種は小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（2）花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、セルロースの分解を目的とするアセトリシス（無水酢酸９：濃

硫酸１の混合液）処理の順に、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全体を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

分析結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図で示す。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、木本花粉が100個体未満の場合は、確率分布による誤差が大きくなることから、百分率表示はせず、検出された種類を＋で表示するにとどめる。

３．結果

（１）珪藻分析

結果を表１、図１に示す。Ａトレンチ～Ｃトレンチ断面とも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、70％以上と各トレンチとも化石の保存状態が良い。産出分類群数は、合計で34属184種類である。トレンチ別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・Ａトレンチ

A-3は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻と、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）とが半々づつ産出した。水生珪藻の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（小量の塩分には耐えられる種）、真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）と真＋好流水性種（流水域に最もよく生育する種）が多産する。水生珪藻はとくに多産するものはなく、好流水性で中～下流性河川指標種群（安藤，1990）の*Cymbella sinuata*、*Fragilaria vaucheriae* 等が産出した。陸生珪藻は、耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群（伊藤・堀内，1991）の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta fo. biceps*、*Navicula mutica* が産出した。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群のことである（安藤，1990）。A-2は、水生珪藻が約90％以上と優占する。生態性の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、真＋好流水性種が多産する。産出種はとくに多産するものはなく、好流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Cymbella minuta*、*C. sinuata*、*Fragilaria vaucheriae*、*Melosira varians*、*Rhoicosphenia abbreviata*、流水不定性の*Gomphonema parvulum* 等が産出した。A-1は、水生珪藻が優占するが陸生珪藻も約30％産出する。淡水生種の生態性の特徴は、前試料に近似する。産出種の特徴は、*Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の*Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、それに陸生珪藻Ａ群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* 等が産出した。

・Ｂトレンチ

B-1～5は、水生珪藻が優占した。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、真＋好流水性種が優占あるいは多産した。主な産出種は、試料により消長が異なるが、ほぼ同様の種類から構成される。流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Cymbella minuta*、*C. sinuata*、*Fragilaria vaucheriae*、*Melosira varians*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Synedra inaequalis*、流水不定性の*Achnanthes minutissima*、*Gomphonema parvulum* 等が産出した。

表1　珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境指標種	A-3	A-2	A-1	B-5	B-4	B-3	B-2	B-1	C-4	C-3	C-2	C-1
	塩分	pH	流水													
Nitzschia sigma (Kuetz.) W.Smith	Euh-Meh			E2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia filiformis (W.Smith) Van Heurck	Meh				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
Navicula gregaria Donkin	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	2	2	2	1	-	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.) Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	2	2	-	-
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	1	-	3	1	1	-	-	-	1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	2	-	1	1	1	-	1	1	2	-	-
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	5	-	5	1	1	-	1	3	2	1	-	10
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4	18	3	16	16	18	17	8	16	13	11	9
Achnanthes laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
Achnanthes linearis W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	1
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	7	7	3	5	21	8	11	7	8	9	4
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	1	4	2	1	2	-	-	5	4	3	5
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	3	3	4	4	1	1	6	-	-	5	2
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	8	-	3	1	-	-	1	-	1	-	-	1
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	1	-	-	-	2	-	1	3	-
Anomoeoneis vitrea (Grun.) Ross	Ogh-hob	ac-il	l-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	1	3	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-
Aulacoseira crenulata (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1	-	4	1	1	-	-	1	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	2	-	3	-	-	-	1	-
Caloneis silicula var. minuta (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Ceratoneis arcus var. hattoriana Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	1	6	-	-	6	1	3	-	1	-	-
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.) Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	1	2	-	6	1	22	3	1	5	2	5	5
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	6	3	8	11	3	3	5	17	11	6	9	9
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	4	2	1	2	1	-	-	1	2	3	1	4
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	2	1	1	-	-	-	-	1	1	1	-	2
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cyclotella stelligera Cleve & Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella cistula (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	1	-	1	-	-	1	1	-	-	3	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	15	3	5	9	31	8	4	8	11	14	3
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	2	6	10	7	6	9	1	6	7	9	6	5
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	8	9	4	9	3	12	6	6	15	9	9	4
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	2	3	3	6	-	-	2	3	3	1	1
Cymbella tumida var. gracilis Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	2	1	-	-	-	2	1	1	2	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	3	5	2	6	4	3	1	2	7	2	14	4
Diatoma hyemalis (Roth) Heiberg	Ogh-hob	ind	r-bi	K	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diatoma mesodon (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	1	1	1	-	2	4	4	3	-
Diploneis oculata (Breb.) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	2	1	-	-	5	-	-	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	1	-	-	5	5	1	-	-	1
Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	2	1	-	9	-	3	-	3	-
Fragilaria capucina var. mesolepta (Rabh.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	4	-	-	2	-	-	1	-	1
Fragilaria construens fo. binodis (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	1	1	-	-	3	-	-	-	1	1
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	11	-	5	3	-	-	8	1	8	-	-	7
Fragilaria elliptica (Schumann) Carlson	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-
Fragilaria leptostauron (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria leptostauron var. dubia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria parasitica (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	2	1	-	2	2	-	-	-	1
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	2	1	1	1	-	-	6	-	1	2	-	5
Fragilaria pinnata var. lancettula (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	1
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	5	-	-	-	-	1	10	-	-	1	-
Fragilaria ulna var. arcus (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	9	12	13	19	8	15	3	11	21	14	16	17
Fragilaria vaucheriae var. capitellata (Grun.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	1	5	1	-	4	-	-	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	2	1	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	2	-	-	-	-	1	1	1
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	3	2	2	-	1	-	2	1	1	-	3	1

表１　珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境指標種	A-3	A-2	A-1	B-5	B-4	B-3	B-2	B-1	C-4	C-3	C-2	C-1
	塩分	pH	流水													
Gomphonema clevei var. inaequilongum H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema minutum (Agardh) Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
Gomphonema olivaceum var. minutissimum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	2	2	-	-	1	-	1	2	-	-	-
Gomphonema olivaceum var. olivaceoides (Hust.) Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	1	2	1	1	10	1	-	2	1	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	4	11	6	8	8	7	13	8	3	6	8	10
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	5	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.) Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	-	-	2	1	1	1	-	-	1	-	1	1
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	1	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	19	1	15	3	-	-	1	1	1	3	2	11
Hantzschia amphioxys var. capitata O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Martyana martyi (Heribaud) Round	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U	2	14	2	-	39	1	8	11	5	1	7	5
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	2	1	1	1	-	-	1	-	1	2	1	-
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula capitatoradiata Germain	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1
Navicula cari Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula clementis Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	17	3	6	3	-	1	2	-	4	15	1	2
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1	-	2	-	1	-	-	2	1	3	-
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	1	-	-	1	-	-	1	1	1	1	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	4	2	2	8	-	-	1	1	2	3	-
Navicula exilis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula hasta var. gracilis Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	-
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
Navicula ignota var. palustris (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula lanceolata (Agardh) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	43	2	23	2	1	2	1	-	2	8	-	12
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula notanda Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula notha Wallace	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	4	2	-	8	12	6	1	9	6
Navicula radiosa fo. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	1	-	1	-	1	1	1	3	-
Navicula reinhardtii Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula ruttneri var. capitata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula venerablis Hohn & Hellerman	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
Navicula viridula var. linearis Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	1	-	-	5	1	1	-	-	-	1	-
Navicula viridula var. rostrata Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	3	-	-	-	-	2	-	2	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-
Neidium apiculatum Reimer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	2	1	1	2	4	2	1	1	-	-	1	7
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	1	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia dissipata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2	1	-	5	9	-	1	2	-	-	-
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind		1	1	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-
Nitzschia linearis W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1	-	-	1	-	3	-	1	-	-
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	1	-	-	3	-	2	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	1	3	-	-	-	-	-	2	2	-	2
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia brauniana (Grun.) Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia brevicostata var. sumatrana Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia macilenta (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	5	4	5	1	1	3	2	1	-	2	1	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	2	-	-	-	2	-	-	1	-	1	-	2
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	6	9	6	13	4	7	10	6	16	14	8	8
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-

表１　珪藻分析結果（３）

種　　類	生態性 塩分	生態性 pH	生態性 流水	環境指標種	A-3	A-2	A-1	B-5	B-4	B-3	B-2	B-1	C-4	C-3	C-2	C-1
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind		-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-
Sellaphora bacillum（Ehr.）Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Sellaphora laevissima（Kuetz.）Mann	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	1	1
Sellaphora pupula（Kuetz.）Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	1	17	6	-	8	3	4	3	2	5
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Stauroneis borrichii（Pet.）Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	1
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis lauenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-
Stauroneis phoenicenteron（Nitz.）Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Stauroneis producta Grunow	Ogh-hil	al-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	2	-	-	2	-	1	1	1	-	-	1
Surirella biseriata Brebisson	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Surirella ovata var. pinnata（W.Smith）Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	2	-	2	2	1	-	-	1	3	1	-
Surirella robusta Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Synedra inaequalis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,K,T	1	4	6	11	2	2	8	8	1	4	12	4
Tabellaria flocculosa（Roth）Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
汽水生種					0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	3	3	1	5	2	3	6	5	8	1	0
淡水生種					201	205	199	201	204	202	207	201	201	198	201	203
珪藻化石総数					201	209	202	202	210	204	210	207	206	206	202	203

凡例

H.R.　：塩分濃度に対する適応性
Euh-Meh：海水生種－汽水生種
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH　：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C.R.　：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群
E2：汽水泥質干潟指標種（小杉，1988）
J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，M：湖沼浮遊性種，N：湖沼沼沢湿地指標種，
O：沼沢湿地付着生種，P：高層湿原指標種（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI：未区分、伊藤・堀内，1991）

・Ｃトレンチ

C-1～4は、水生珪藻が優占した。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、真＋好流水性種が優占あるいは多産した。主な産出種は、試料により若干異なるが、ほぼ同様の種類から構成される。流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Cymbella minuta*、*C. sinuata*、*Fragilaria vaucheriae*、*Rhoicosphenia abbreviata*、流水不定性の*Achnanthes minutissima*、*Cocconeis placentula* 等が産出した。

（２）花粉分析

結果を表２・図２に示す。A-1、A-3、B-5、C-4は花粉化石の保存が悪く、検出数も少なかったが、他の試料からは多くの花粉化石が得られた。多くの花粉化石が得られている試料をみると、各トレンチとも傾向が類似する。下位（B-1、B-2、C-1、C-2）では木本花粉ではツガ属、マツ属、コナラ亜属、ガマズミ属、草本花粉ではイネ科やヨモギ属が多く検出される。一方上位（C-3、B-3、B-4、A-2）では、木本花粉はマツ属の割合が高く、他の種類は産出率、種類数ともに少なくなる。草本花粉は、イネ科などの割合が高い。また栽培植物であるソバ属が検出される。

４．考察

Ａトレンチの下部、Ｂトレンチ、Ｃトレンチ共に共通した特徴として、中～下流性河川指標種群に属する流水性種が多いが、個々の種に着目すると、種類数が多く、特定の種が優占しない。このような傾向は、氾濫堆積物などに特徴的に現れ、混合群集と呼ばれている（堀内ほか，1993）。河内・荒牧（1979）によれば、遺跡が立地する地形面は完新世の河川堆積物からなり、治水工事により河川が固定されてい

表2　花粉分析結果

種　　類　　試料番号	A-3	A-2	A-1	B-5	B-4	B-3	B-2	B-1	C-4	C-3	C-2	C-1
木本花粉												
モミ属	−	9	−	−	10	2	13	9	−	7	7	20
ツガ属	−	14	−	2	26	26	33	27	−	−	48	62
トウヒ属	−	7	−	−	6	9	5	10	−	−	23	9
カラマツ属	−	1	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−
マツ属単維管束亜属	−	3	−	−	3	−	5	1	−	2	6	5
マツ属複維管束亜属	−	131	1	1	144	116	23	27	−	87	32	53
マツ属（亜属不明）	1	47	2	1	26	19	11	10	−	31	12	36
コウヤマキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−
スギ属	−	1	1	−	1	1	1	−	−	1	1	−
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	−	1	−	−	5	−	4	6	−	2	2	−
ヤナギ属	−	−	−	−	−	−	7	9	−	−	1	−
クルミ属	−	6	−	−	5	−	7	2	−	2	10	2
クマシデ属−アサダ属	1	2	−	1	2	2	11	14	−	1	6	2
ハシバミ属	−	−	−	1	2	−	4	4	−	−	−	1
カバノキ属	−	1	−	−	13	5	14	14	−	1	21	2
ハンノキ属	−	−	1	−	1	2	11	12	−	1	12	3
ブナ属	−	−	−	−	1	−	7	15	−	−	3	−
コナラ属コナラ亜属	−	4	−	1	8	2	25	25	−	3	19	2
クリ属	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	1	2
ニレ属−ケヤキ属	−	1	−	−	10	4	7	5	−	2	12	6
エノキ属−ムクノキ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
フサザクラ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
カツラ属	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	−	−
サクラ属	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−
キハダ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ウルシ属	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	3
モチノキ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
カエデ属	−	1	−	−	−	1	7	1	−	1	2	−
トチノキ属	−	−	−	−	−	−	1	3	−	−	1	−
クロウメモドキ科	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	−
ブドウ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2	−
ウコギ科	−	−	−	−	−	1	1	2	−	−	−	−
ミズキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
ツツジ科	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	2	−
イボタノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
トネリコ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
ムラサキシキブ属近似種	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ガマズミ属	−	10	−	−	7	1	29	26	−	3	14	3
草本花粉												
ガマ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
サジオモダカ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
イネ科	2	28	3	4	150	71	81	81	6	15	113	151
カヤツリグサ科	−	6	−	−	9	5	23	11	−	2	19	6
イボクサ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ツユクサ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ミズアオイ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ユリ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
ユリ科	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−
アヤメ科	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
クワ科	−	−	−	−	1	−	23	59	−	1	23	−
ギシギシ属	−	−	−	−	1	−	5	2	−	1	2	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	−	−	−	1	2	6	−	4	−	−	2	2
タデ属	−	−	1	−	2	2	4	6	−	−	3	7
ソバ属	−	2	−	1	2	12	2	16	−	2	12	6
アカザ科	−	−	−	−	1	−	9	17	−	−	11	73
ナデシコ科	−	2	1	−	−	−	1	2	−	−	2	10
カラマツソウ属	−	−	−	−	−	1	5	2	−	−	2	−
キンポウゲ科	−	−	−	−	1	−	4	2	−	−	2	−
アブラナ科	−	−	−	−	3	−	3	2	−	3	−	−
バラ科	−	−	−	−	−	−	3	3	−	−	1	−
フウロソウ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
ツリフネソウ属	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	−	−
キカシグサ属	−	−	−	−	8	−	−	−	−	−	1	−
セリ科	−	−	−	−	−	−	3	1	−	−	3	−
リンドウ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
オオバコ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ヤエムグラ属−アカネ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オミナエシ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
マツムシソウ属	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−
ツリガネニンジン属−ホタルブクロ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ヨモギ属	−	1	2	1	−	9	40	74	−	5	66	23
キク亜科	−	1	−	1	2	1	2	13	−	−	5	5
タンポポ亜科	−	−	1	2	3	−	6	3	−	1	3	10
不明花粉	−	4	1	−	2	2	10	6	−	1	11	9
シダ類胞子												
ヒカゲノカズラ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ゼンマイ属	−	−	−	2	−	4	2	2	−	2	4	5
他のシダ類胞子	13	71	7	35	21	45	59	50	−	32	113	118
合　計												
木本花粉	2	239	5	7	272	191	238	233	0	144	242	211
草本花粉	2	41	8	10	188	110	219	306	6	30	272	294
不明花粉	0	4	1	0	2	2	10	6	0	1	11	9
シダ類胞子	13	71	7	38	21	49	61	52	0	34	117	123
総計（不明を除く）	17	351	20	55	481	350	518	591	6	208	631	628

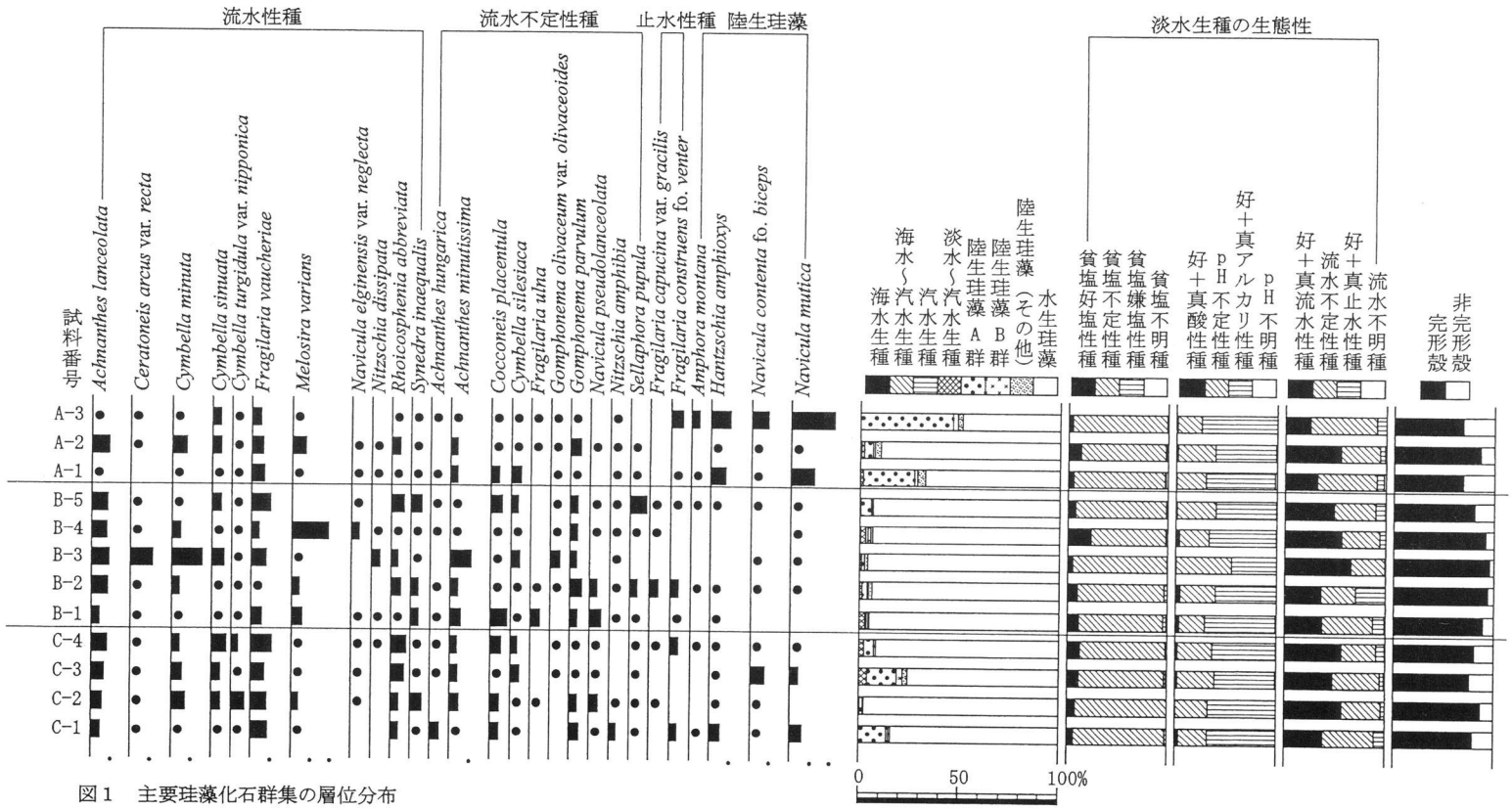


図１　主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は３％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

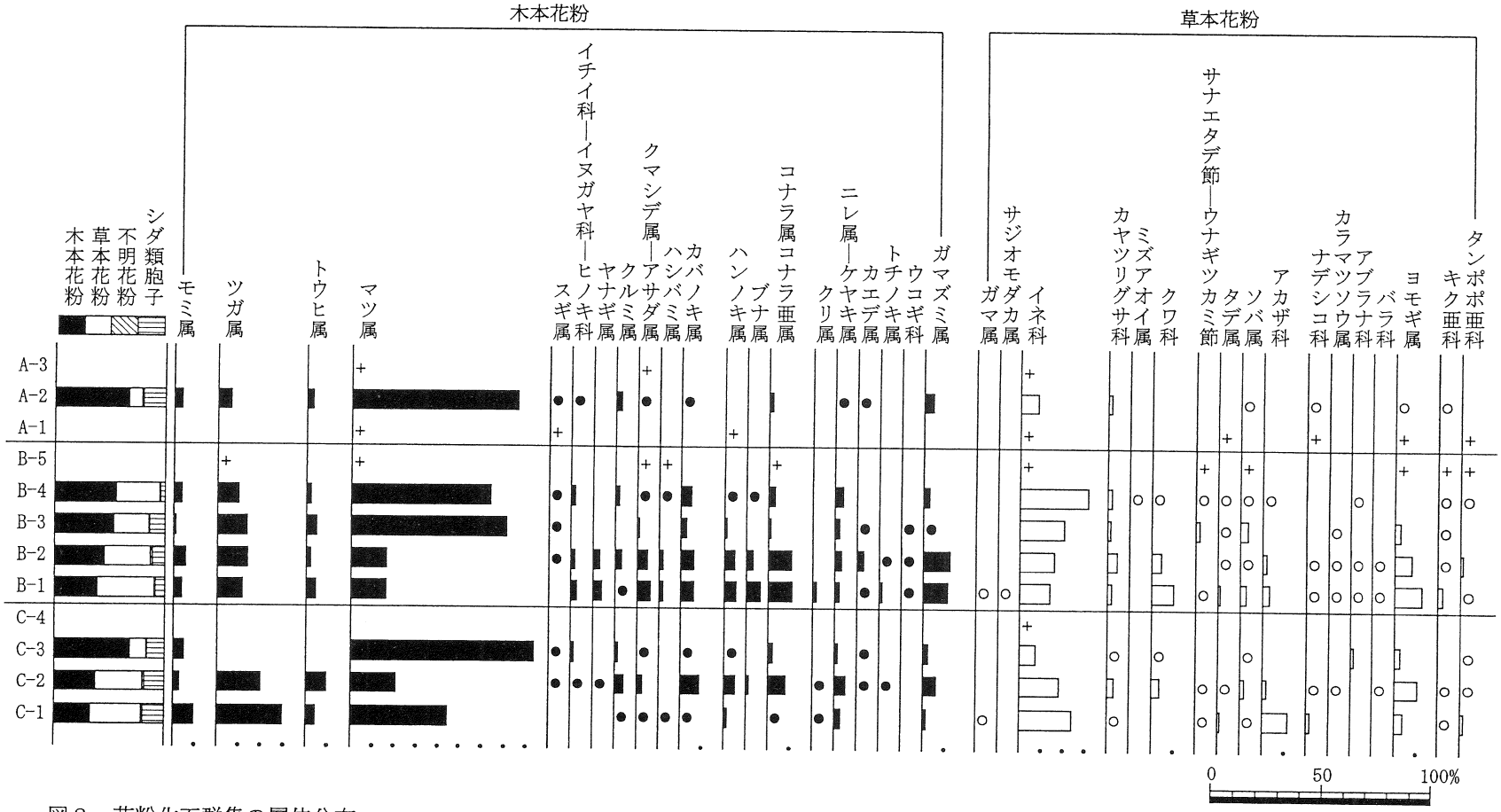


図２　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

なければ、氾濫源になっている場所である。その中でも、微高地状に高まった部分に集落が分布していると推測され、野沢の市街地もその一つであると思われる。おそらく、治水整備が行われる以前は、千曲川をはじめ他の小河川による氾濫の影響を少なからず受けていたことが予想され、堀の埋積物はそのような氾濫の際に堆積したものと推測される。おそらく、千曲川等の氾濫によって流水域の堆積物が窪地となっている掘に堆積したため、このような群集になったとみられる。一方、Aトレンチの13層では陸生珪藻が検出されるが、これは、当時の表土に由来すると思われる。13層の堆積物は、シルトを基質とするが、礫や砂ブロックを含むなど自然堆積にしては不自然な点があることから、当時の表土等によって埋め戻された人為層であると思われる。

花粉分析結果をみると、マツ属が急増する傾向が認められる。マツ属は森林が失われた場所に先駆的に進入して、森林を形成する陽樹であるため、人里近くに二次林として存在する場合が多い。また、成長が早く、痩地でも育つためしばしば植林される。周辺地域のマツの増加は、人為的な植生破壊や植林などによって増加したと思われるが、このような傾向は全国各地で報告されている。佐久地方で中・近世を対象にした花粉分析の成果は見あたらないが、北信地域ではマツの急増は近世以降とされており(田中・辻本；2000)、佐久地域でのマツの増加もほぼこれと同時期に相当する可能性がある。

一方、B・Cトレンチの下位などマツの増加が顕著でない層位は戦国時代～中世頃、すなわち、堀が機能していた時の堆積物に相当するといえる。木本類をみると、マツ属、ツガ属、カバノキ属、コナラ亜属がみられ、これらは本遺跡周辺の山地を中心に分布していたものと推定される。一方、クマシデ属－アサダ属、ガマズミ属、ニレ属－ケヤキ属といった種類は、河川沿いなど湿ったところを中心に分布していたものと推定される。草本花粉では、イネ科、クワ科、アカザ科、ヨモギ属などのいわゆる「人里植物」が多く検出されることから、これらは遺跡周辺の草地に生育していたものと思われる。また、ソバ属の花粉化石もみられることから、周辺でソバが栽培されていたと推測される。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，p.35-47.

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について．－混合群集の認定と堆積環境の解釈－，日本文化財科学会，第13回大会研究発表要旨集，p.62-63.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

河内晋平・荒牧重雄（1979）地域地質研究報告　5万分の1図幅　小諸地域の地質．39p.,地質調査所.

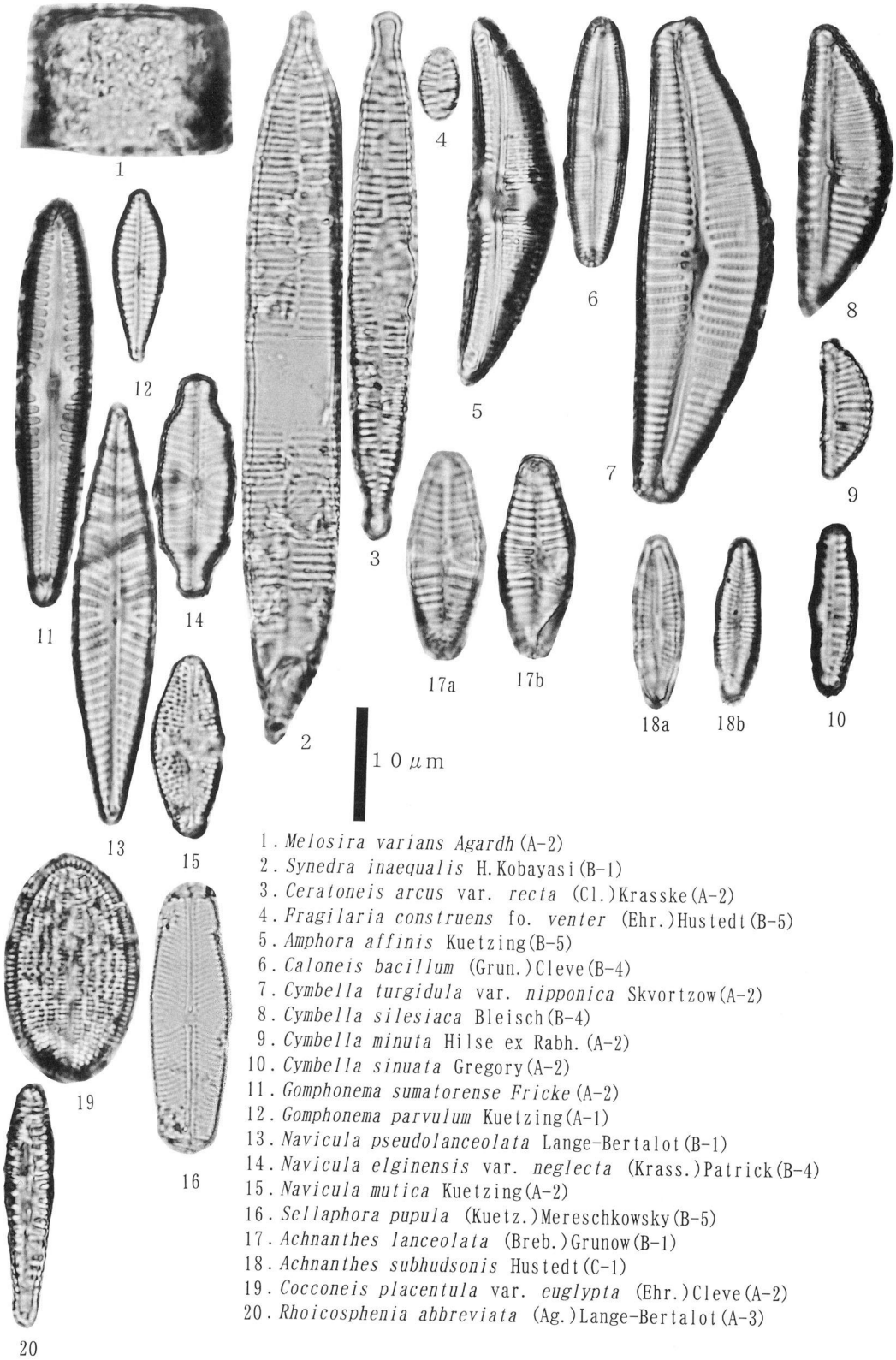
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA，BAND 26，p.1-353.，BERLIN・STUTTGART.

Krammer，K. and Lange-Bertalot，H.（1986）Bacillariophyceae，Teil 1，Naviculaceae．Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa，876p.，Gustav Fischer Verlag.

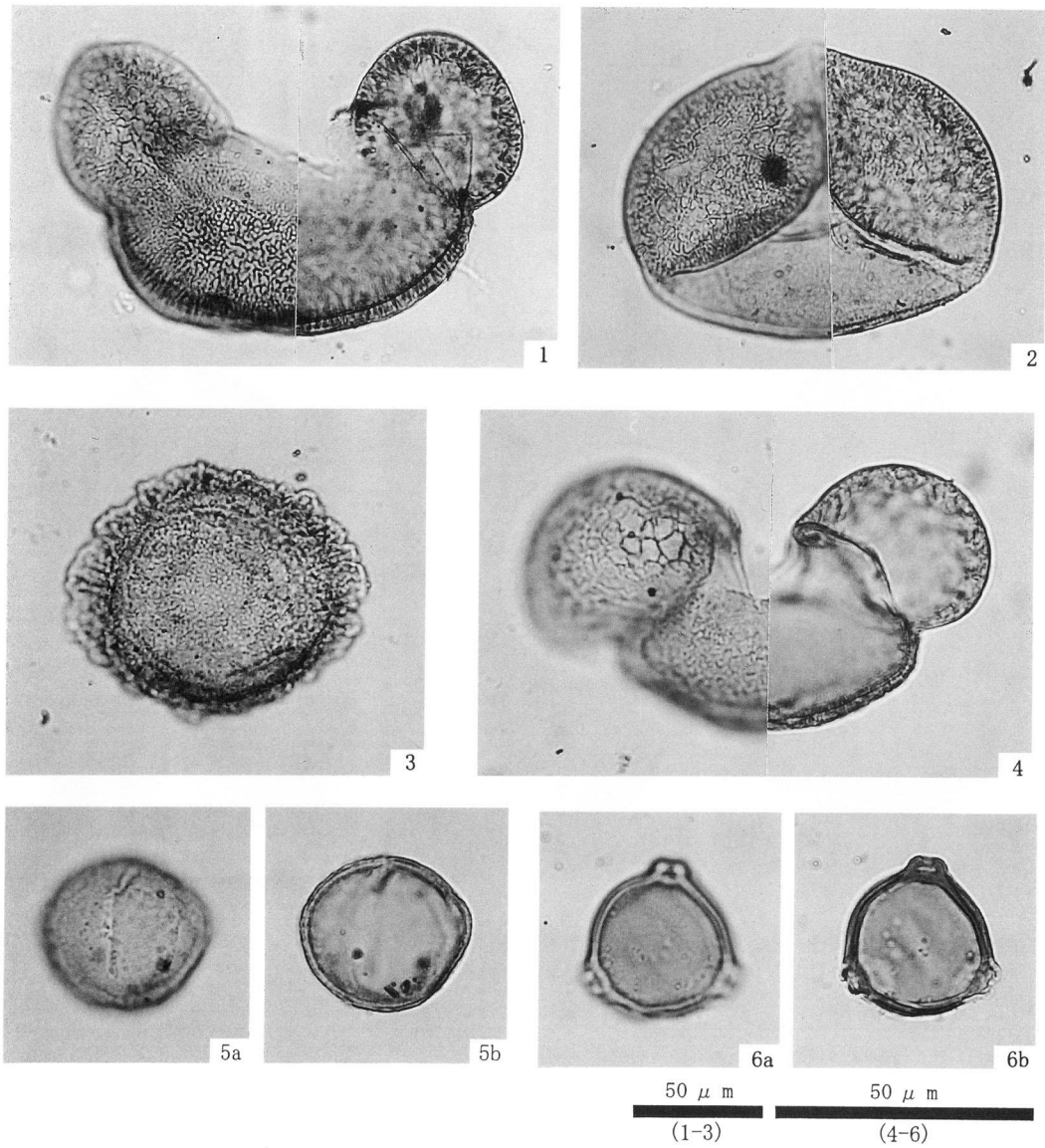
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.(1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
田中義文・辻本崇夫（2000）更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析.「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　50　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27　更埴市内その6　更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）－古代２・中世・近世編－」, p.198-204, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.

図版１　珪藻化石



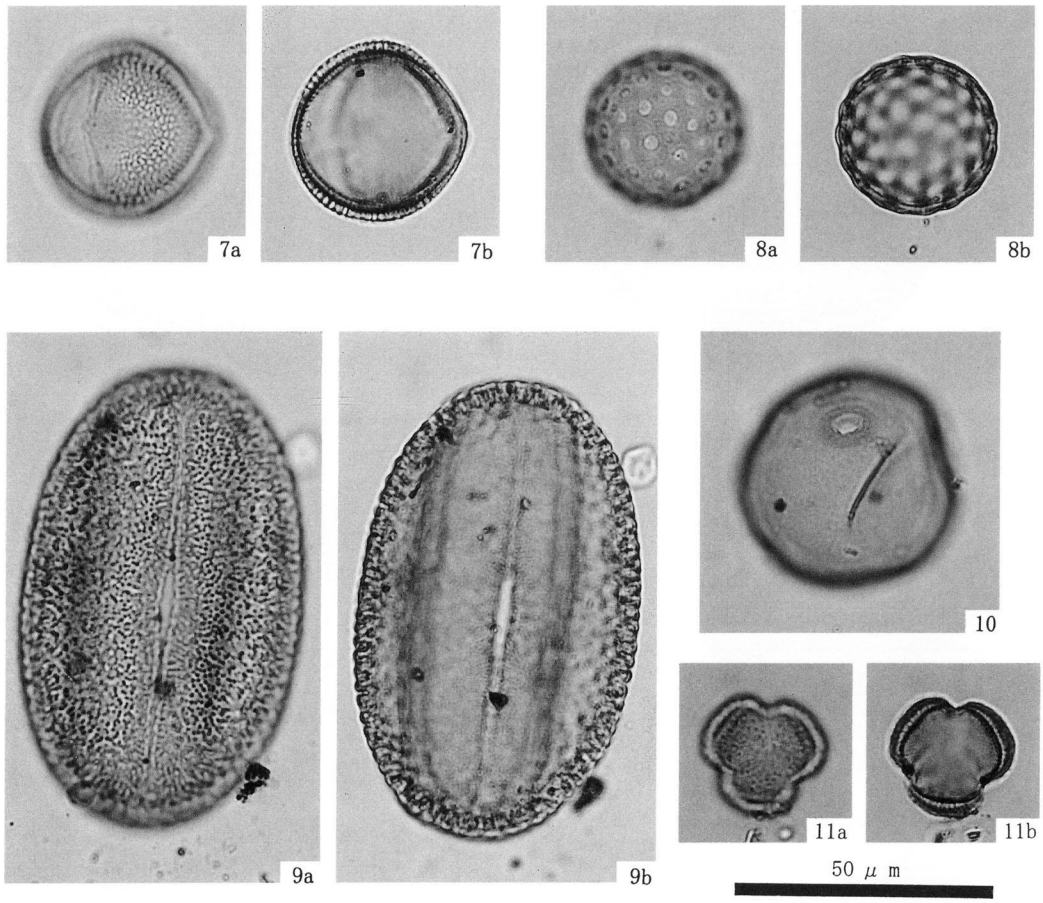
1. *Melosira varians Agardh* (A-2)
2. *Synedra inaequalis* H.Kobayasi (B-1)
3. *Ceratoneis arcus* var. *recta* (Cl.)Krasske (A-2)
4. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.)Hustedt (B-5)
5. *Amphora affinis* Kuetzing (B-5)
6. *Caloneis bacillum* (Grun.)Cleve (B-4)
7. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (A-2)
8. *Cymbella silesiaca* Bleisch (B-4)
9. *Cymbella minuta* Hilse ex Rabh. (A-2)
10. *Cymbella sinuata* Gregory (A-2)
11. *Gomphonema sumatorense Fricke* (A-2)
12. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (A-1)
13. *Navicula pseudolanceolata* Lange-Bertalot (B-1)
14. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick (B-4)
15. *Navicula mutica* Kuetzing (A-2)
16. *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky (B-5)
17. *Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow (B-1)
18. *Achnanthes subhudsonis* Hustedt (C-1)
19. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.)Cleve (A-2)
20. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.)Lange-Bertalot (A-3)

図版2　花粉化石



1．モミ属(A-2)　　2．トウヒ属(B-1)
3．ツガ属(A-2)　　4．マツ属複維管束亜属(A-2)
5．コナラ属コナラ亜属(B-1)　　6．カバノキ属(C-1)

図版３　花粉化石



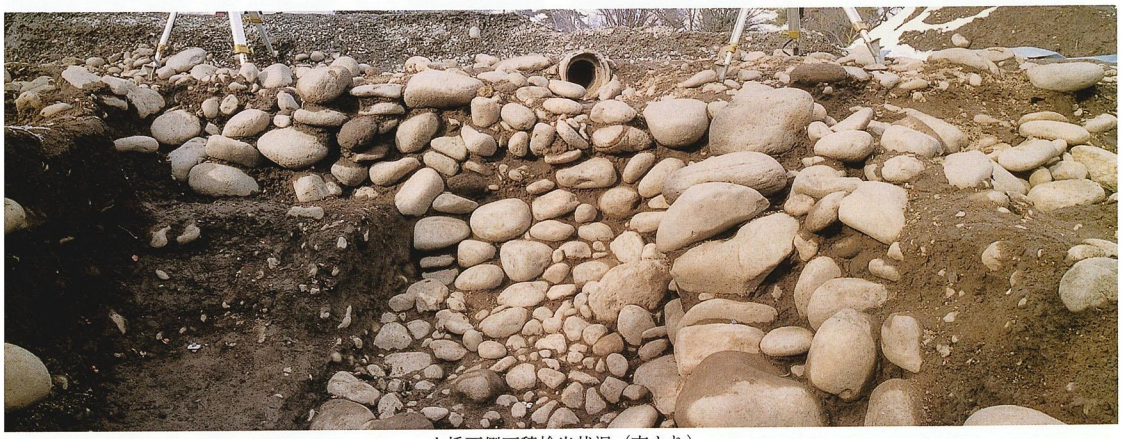
７．ガマズミ属(B-1)　　８．アカザ科(B-1)
９．ソバ属(B-1)　　10．イネ科(C-1)
11．ヨモギ属(B-1)

図版一

野沢館跡Ⅳ付近航空写真

調査区航空写真

虎口部分石積検出状況（南より）

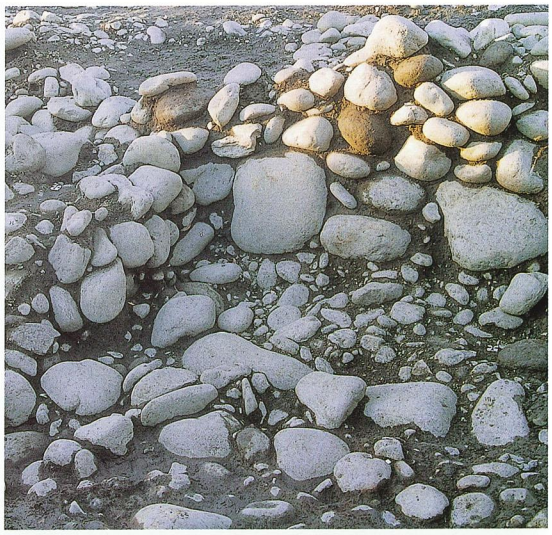


土橋西側石積検出状況（南より）

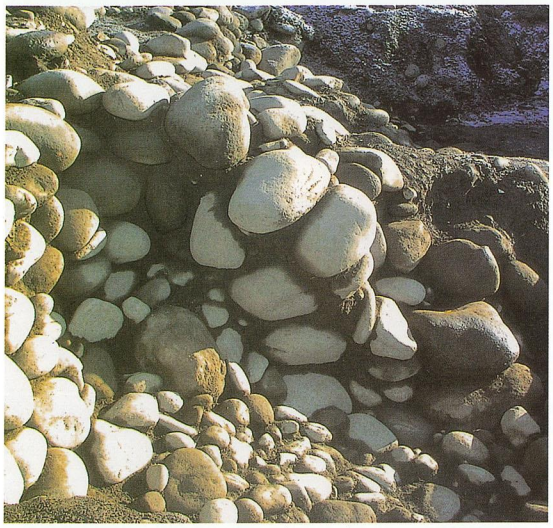
土橋東側石積検出状況（南より）

図版　四

土橋西側石積検出状況（南より）



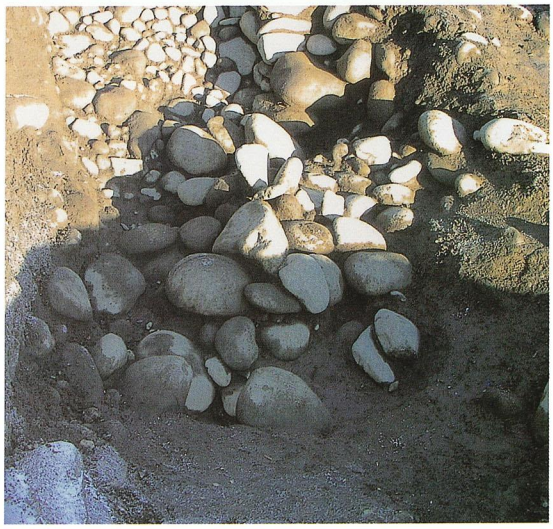
土橋東側石積検出状況（南より）



土橋石積（西より）

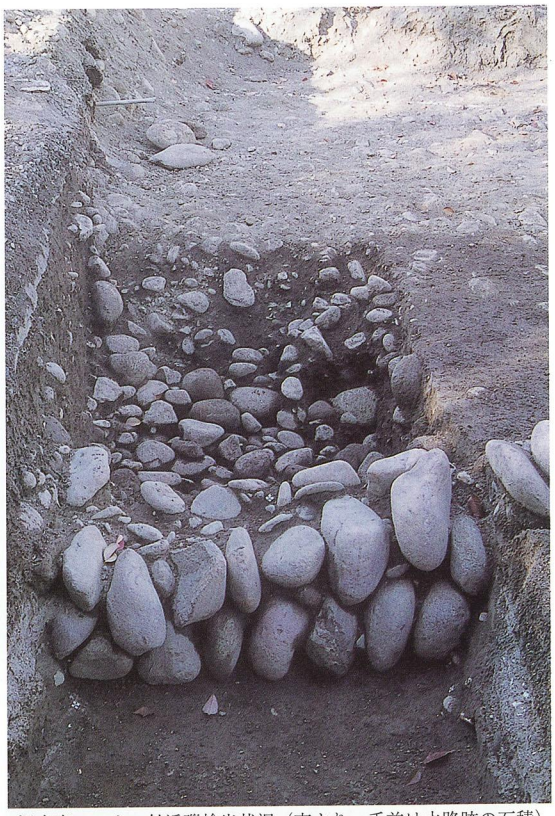
土橋石積（東より）

土橋検出状況（南西より）



堀内崩落礫（南より）

トレンチＢ礫検出状況（南より）



堀南東コーナー付近礫検出状況（南より、手前は水路跡の石積）

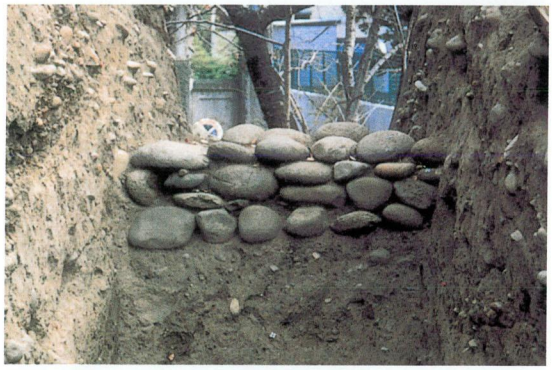
トレンチＡ土層断面（北西より）

トレンチＢ土層断面（北東より）

トレンチＣ土層断面（北西より）

堀プラン確認状況（西より）

土墨断面（西より）



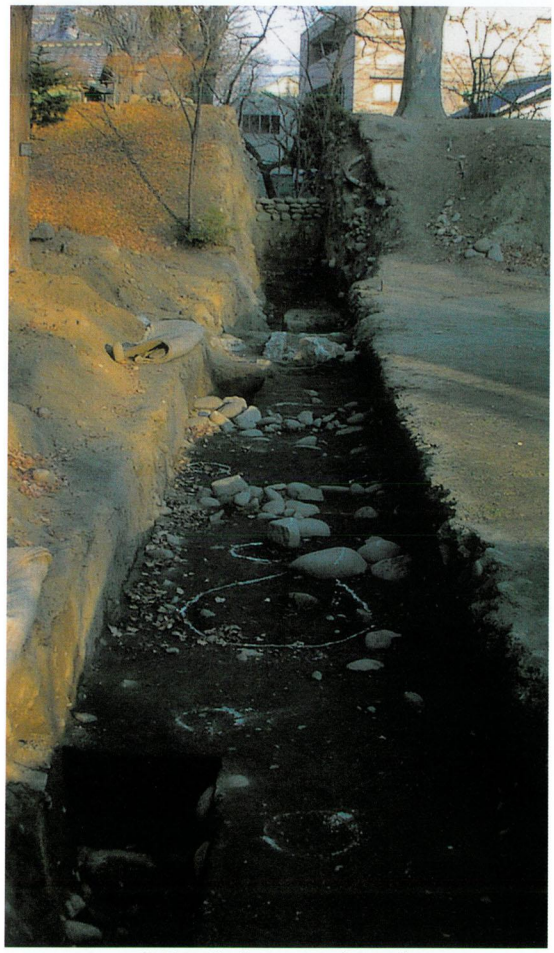
土墨内西側石積（西より）

土墨内東側石積（東より）

土墨整地層断面（南より）

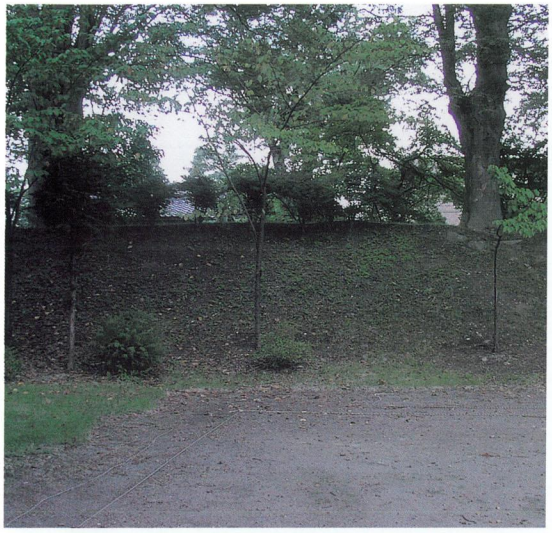
土塁及び郭内トレンチ

郭内トレンチ（東より）

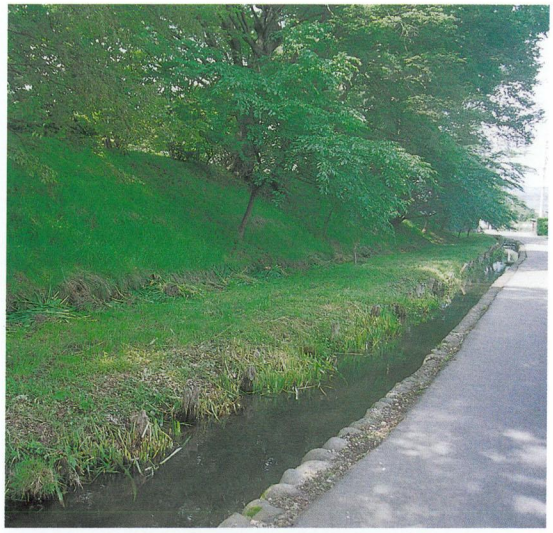


土塁及び郭内トレンチ（西より）

図版 八



東側土塁（西より）



北側土塁（東より）

西側土塁（北より）

大伴神社

1～18・23・24（1：2）
19～22　（1：4）

20−25−1

20−25−2

21−26

21−27

21−30

21−31
（1：2）

21−32
（1：2）

21−33
（1：2）

21−29

21−35

21−34

21−36
（1：2）

21−37

21−28

（明記のないものは全て　1：4）

1～16　土師器皿（1：2）
17～23　土　鍋（1：2）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
（1：2）
1～8　水　路　跡
9～27　旧野沢会館跡

近現代陶磁器類（1：4）

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城跡』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群Ⅲ』
第４集　『大ふけ』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
第13集　『上高山遺跡Ⅱ』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』
第19集　『上芝宮遺跡』
第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
第21集　『金井城跡Ⅲ』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向Ⅳ』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
第27集　『上久保田向Ⅲ』
第28集　『曽根新城Ⅴ』
第29集　『筒村遺跡Ｂ　山法師遺跡Ｂ』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集　『山法師遺跡Ａ　筒村遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割』
第33集　『聖原遺跡Ⅶ　下曽根遺跡Ⅰ』
第34集　『西一本柳遺跡Ⅰ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集　『蛇塚Ｂ遺跡Ⅲ』
第37集　『西一本柳遺跡Ⅱ　中西ノ久保遺跡Ⅰ』
第38集　『南下中原遺跡Ⅱ』
第39集　『中屋敷遺跡』
第40集　『寺畑遺跡』
第41集　『曽根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ』
第42集　『寄山』
第43集　『権現平遺跡　池端遺跡』
第44集　『寺添遺跡』
第45集　『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集　『濁り遺跡』
第47集　『上芝宮遺跡Ⅴ』
第48集　『池端城跡』
第49集　『根々井芝宮遺跡』
第50集　『藤塚遺跡Ⅲ』
第51集　『寺中遺跡　中屋敷遺跡Ⅱ』
第52集　『坪の内遺跡』
第53集　『円正坊遺跡Ⅱ』
第54集　『市内遺跡発掘調査報告書1995』
第55集　『番屋前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第56集　『聖原遺跡Ⅹ』
第57集　『高師町遺跡Ⅱ』
第58集　『下穴虫遺跡Ⅰ』
第59集　『市内遺跡発掘調査報告書1996』
第60集　『曽根城遺跡Ⅱ』
第61集　『割地遺跡』
第62集　『野馬久保遺跡Ⅱ』
第63集　『西大久保遺跡Ⅲ』
第64集　『梨の木遺跡Ⅳ』
第65集　『中宿遺跡』
第66集　『中西ノ久保遺跡Ⅱ　仲田遺跡　寺畑遺跡Ⅱ』
第67集　『供養塚遺跡』
第68集　『前藤部遺跡』
第69集　『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第70集　『観音堂遺跡』
第71集　『市内遺跡発掘調査報告書1997』
第72集　『市道遺跡Ⅱ』
第73集　『西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』
第74集　『五里田遺跡』
第75集　『八風山　五斗代』
第76集　『南近津』
第77集　『番屋前遺跡』
第78集　『蛇塚遺跡　蛇塚古墳』
第79集　『四ツ塚遺跡Ⅰ』
第80集　『四ツ塚遺跡Ⅱ』
第81集　『薬師寺遺跡』
第82集　『市内遺跡発掘調査報告書1998』
第83集　『下聖端遺跡Ⅳ』
第84集　『榛名平遺跡』
第85集　『柳堂遺跡』
第86集　『市内遺跡発掘調査報告書1999』
第87集　『宮添遺跡』
第88集　『下曽根遺跡』
第89集　『川原端遺跡』
第90集　『梨の木遺跡Ⅲ』
第91集　『西一本柳遺跡　中長塚Ⅰ・Ⅱ　松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第92集　『辻の前遺跡Ⅱ　中仲田遺跡Ⅱ』
第93集　『入高山遺跡』
第94集　『聖石遺跡』
第95集　『市内遺跡発掘調査報告書2000』
第96集　『上木戸遺跡』
第97集　『久禰添遺跡』
第98集　『深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』
第99集　『中道遺跡』
第100集　『野沢館跡Ⅲ』
第101集　『深堀遺跡Ⅳ』
第102集　『円正坊遺跡Ⅳ』
第103集　『聖原　－第１分冊－』
第104集　『聖石遺跡Ⅱ』
第105集　『曽根城遺跡Ⅲ』
第106集　『樋村遺跡Ⅱ』
第107集　『聖原　－第２分冊－』
第108集　『市内遺跡発掘調査報告書2001』
第109集　『西一本柳Ⅷ』
第110集　『佐久駅周辺土地区画整理事業
埋蔵文化財発掘調査報告書』
第111集　『上ノ城遺跡』
第112集　『西赤座』
第113集　『西一本柳遺跡Ⅸ』
第114集　『供養塚遺跡Ⅱ』
第115集　『聖原　－第３分冊－』
第116集　『東久保遺跡Ⅱ』
第117集　『東五里田遺跡』
第118集　『東近津遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第119集
野沢館跡Ⅳ（長野県史跡伴野城跡）
―長野県佐久市大字原野沢館跡Ⅳ発掘調査報告書―
2004年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市大字中込3056
（文化財課
〒385-0006　長野県佐久市大字志賀5953
TEL 0267-68-7321）
印　刷　所　株式会社 中 信 社